

日本写真家協会会報

NO.172
(2019. Oct.)

- 焦点「個人事業者(写真家)と消費増税の影響について」
- 展望「奈良原一高のスペイン——約束の旅」展
- 第3回「笹本恒子写真賞」受賞者決定
- 第15回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる

JPS

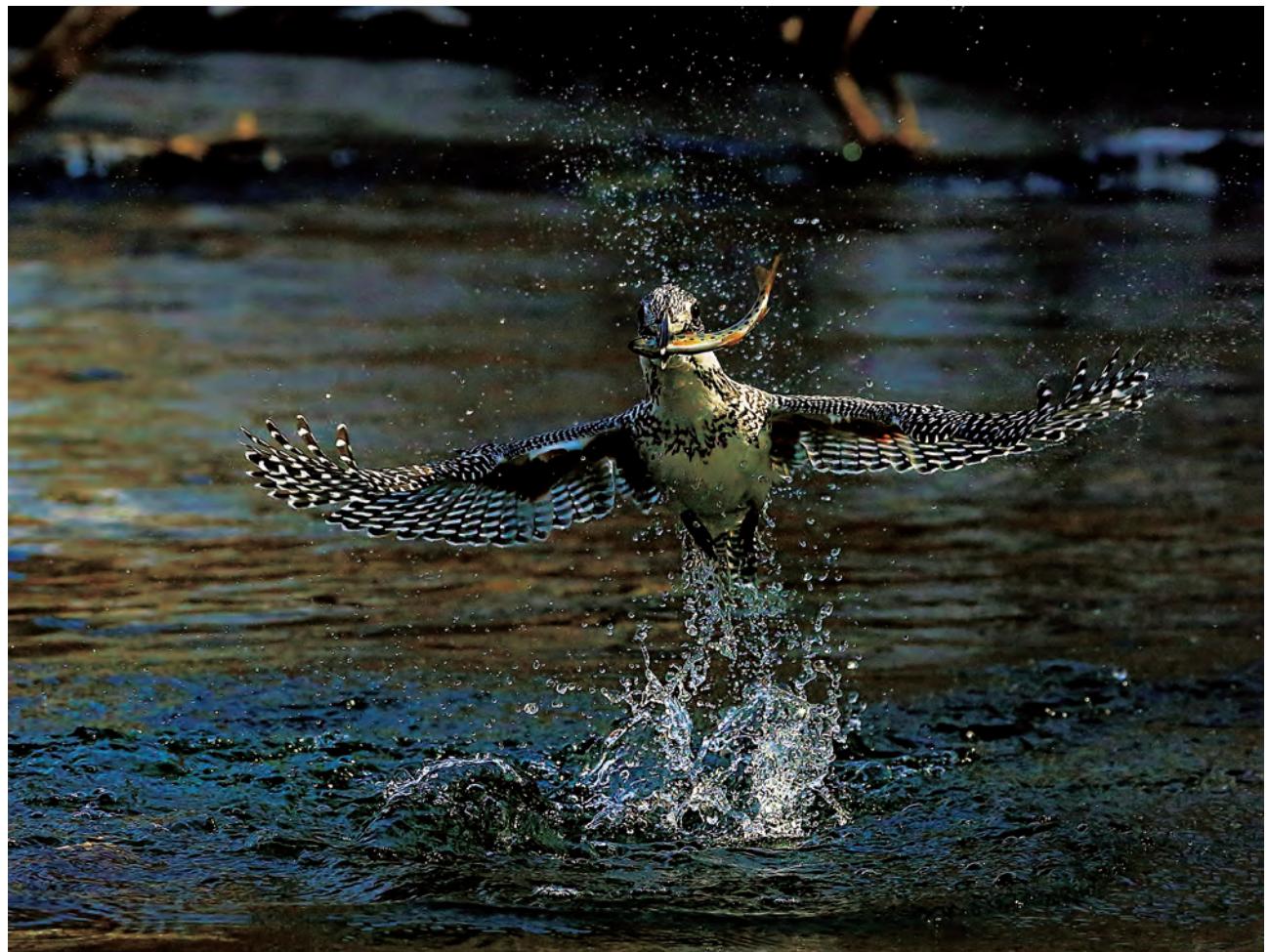


Photo Shimada Tadashi

GITZO

ユーザビリティと機能性を追求した
最新トラベル三脚。



新規会員
募集中 日本写真家協会会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!
ヨドバシカメラ
www.yodobashi.com

新宿西口本店
〒160-0023
新宿区西新宿1-11-1
☎03(3346)1010

マルチメディア新宿東口
〒160-0022
新宿区新宿3-26-7
☎03(3356)1010

マルチメディアAkiba
〒101-0028
千代田区神田花岡町1-1
☎03(5209)1010

マルチメディア錦糸町
〒130-8580(駒ビルテルミニ1・2・3階)
墨田区江東橋3-14-5
☎03(3632)1010

マルチメディア上野
〒110-0005
台東区上野4-10-10
☎03(3837)1010

マルチメディア町田
〒194-0013
町田市原町田1-1-11
☎042(721)1010

八王子店
〒192-0082
八王子市東町7-4
☎042(643)1010

マルチメディア吉祥寺
〒180-0004
武藏野市吉祥寺本町1-19-1
☎0422(29)1010

マルチメディア川崎ルフロン
〒210-0024
川崎市川崎区日進町1-11
☎044(223)1010

アウトレット京急川崎
〒210-0007
川崎市川崎区駅前本町21-12
☎044(221)1010

マルチメディア横浜
〒220-0004
横浜市西区北幸1-2-7
☎045(313)1010

マルチメディア京急上大岡
〒233-0002(京急百貨店1-8-9階)
横浜市港南区上大岡西1-6-1
☎045(845)1010

マルチメディアさいたま新都心駅前店
〒330-0843
さいたま市大宮区吉敷町4-263-6
☎048(645)1010

千葉店
〒260-0015
千葉市中央区富士見2-3-1
☎043(224)1010

マルチメディア新潟駅前店
〒950-0901
新潟市中央区弁天1-2-6
☎025(249)1010

マルチメディア宇都宮
〒321-0964(ララスクエア6-7-8階)
栃木県宇都宮市駿河通り1-4-6
☎028(616)1010

マルチメディア郡山
〒963-8002
福島県郡山市駿前1-16-7
☎024(931)1010

マルチメディア仙台
〒983-0852
仙台市宮城野区榴岡1-2-13
☎022(295)1010

マルチメディア札幌
〒060-0806
札幌市北区北6条西5-1-22
☎011(707)1010

マルチメディア梅田
〒530-0011
大阪市北区大深町1-1
☎06(4802)1010

マルチメディア京都
〒600-8216
京都府京都市下京区京都駅前 京都タワー横
☎075(351)1010

マルチメディア名古屋松坂屋店
〒460-8430
名古屋市中区栄3-16-1
☎052(265)1010

マルチメディア博多
〒812-0012
福岡市博多区博多駅中央街6-12
☎092(471)1010

ヨドバシカメラの
インターネットショッピング
www.yodobashi.com
ケータイでいつでもどこでも簡単ショッピング!
<http://m.yodobashi.com>

お電話で1本すぐにお届け!
テレフォンショッピング
☎ 0120-141405
受付時間：あさ10時～よる8時 365日年中無休

HCLネットサービス

HORIUCHI COLOR
FINE ART PRINTSERVICE

感動を表現する。

長年の信頼感 ファインアート・プリントサービス

作品イメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数の6種類のアーティスト用紙でご提供します。

品質要求対応度No.1 ネットdeザ・プリント

銀塩の表現力を最大限に活かしたラムダプリントで、作品表現に最適な組み合わせが選べ、ドライマウント・マットパネル・アルミフレームのパネル加工も同時に注文できます。

お客様評価「表現力」部門No.1 ネットdeザ・フォトアルバム

多彩な編集機能と仕様でさまざまな用途に合わせ、表紙はハードとソフト、本文は高品質銀塩写真、見開きはフルフラット仕様の製本で高級感溢れる銀塩フォトブックができます。

個展・グループ展などの開催を受付けています。

HCLフォトスペース神田

東京都千代田区神田小川町 2-6-14 ☎(03)3295-2191
●都営新宿線「小川町駅」B5 出口より徒歩 5 分



株式会社 **堀内カラー**

フォトイメージングセンター（フォトアート）
東京都千代田区神田小川町 2-6-14 ☎(03) 6854-9581

フォトイメージングセンター
東京都渋谷区神宮前 3-41-6 ☎(03) 3479-5351

名古屋営業所
名古屋市中区錦 1-11-20 ☎(052) 211-6151
関西営業部
大阪市北区万歳町 3-17 ☎(06) 6313-2351

各サービスの詳細やご注文はホームページから…www.horiuchi-color.co.jp

■ <i>Gallery</i>	JPS ギャラリー 中野晴生、西川祐介、吉村和敏、河野英喜、 宮入芳雄、小澤太一	5
■ <i>First Message</i>	P P S の時代 野町和嘉 11	
■ <i>Focus</i>	個人事業者(写真家)と消費増税の影響について 櫻木康裕 12	
■ <i>Telescope</i>	「奈良原一高のスペイン——約束の旅」展 14	
■ <i>Zooming</i>	写真×写真(連載 20) 鉄道写真家・宮澤孝一インタビュー 河野和典 16	
■ <i>Award</i>	「笹本恒子写真賞」第3回受賞者決定!! 吉永友愛さん 18	
■ <i>Topics</i>	来日したクラシック音楽名演奏家 19 丹野 章 オリジナルプリント写真展	
■ <i>Archives</i>	「日本写真保存センター」調査活動報告(31) 松本徳彦 20 日本人の美意識を追求する写真家・西川孟	
■ <i>Workshop</i>	著作権研究(連載 47) 小川明子 22 平成最後の著作権法改正 ーなにができるようになったのかー	
■ <i>World Topics</i>	アンドリュー・ウォンが語る 香港の写真家のスタイル 24	
■ <i>Report</i>	2019年度「報道写真論」講座報告・小松健一、前川貴行 26	
■ <i>Education</i>	2018年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告 28	
■ <i>Topics</i>	2019年度高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」報告 30 賛助会員トピックス 32	
■ <i>Award</i>	2019年第15回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる 34 「名取洋之助写真賞」和田拓海「SHIPYARD ~翼の折れた天使たち」 「名取洋之助写真賞奨励賞」藤本いきる「おじりなりてい」	
■ <i>Congratulation</i>	おめでとうございます 第45回「日本写真家協会賞」受賞 38 「ポートレートギャラリー」一般社団法人 日本写真文化協会 会長:田中 秀幸さん	
■ <i>New Face Gallery</i>	JPS2019年新入会員展「私の仕事」 39	
■ <i>Comment</i>	写真解説 43	
■ <i>Challenge</i>	フィリピンの子どもたちを支援してきて 木下 健さん 44	
■ <i>Digital Topics</i>	プロカメラマンのための「ミラーレスカメラ入門」 46	
■ <i>Exhibition</i>	2019JPS 展報告・2020JPS 展案内 48	
■ <i>Books</i>	JPS ブックレビュー 51	
■ <i>Message</i>	Message Board 54	
■ <i>Annually</i>	2018年受賞・出版・写真展(JPS会員) 56	
■ <i>International</i>	日本写真家協会の沿革(英文) 62	
■ <i>Information</i>	第13回 JPS フォトフォーラム / 2019年ラグビーワールドカップ日本大会・阿部典子 63 /追悼=正会員・柿木正人、矢部忠朗、太田宏昭、鎌山英次、野村英男/経過報告/編集後記 X ギャラリー ヤナガワゴー、土屋敏郎、大浦タケシ 72	
■ <i>Gallery</i>	表紙・島田 忠、表4・芥川仁 72	

広告
案内

■ (株)ヨドバシカメラ
■ (株)堀内カラー
■ キヤノンギャラリー
■ キヤノンマーケティングジャパン(株)

■ (株)タムロン
■ (株)ニコンイメージングジャパン
■ リコーイメージング(株)

■ (一社)日本写真著作権協会(JPCA)
■ (株)シグマ
■ 富士フイルム(株)

キヤノンギャラリーのご案内

Canon
make it possible with canon

キヤノンギャラリー S · キヤノンオープニングギャラリー 1・2(品川)

■「キヤノンギャラリー S」では、キヤノンマーケティングジャパンのメインギャラリーとして、2003年5月に開館以来、著名なプロ写真家出展による、さまざまなジャンルの作品展を開催しています。

■「キヤノンオープニングギャラリー 1・2」では、さまざまな企画展やグループ展をはじめ、キヤノンマーケティングジャパンの所蔵するフォトコレクションの展示などを行っています。

キヤノンギャラリー(銀座・大阪)

■「キヤノンギャラリー」(銀座・大阪)では、プロ・アマを問わず、公募により選出された写真家の作品展を開催しています。(毎年2月・8月に公募作品募集)

■品川 〒108-8011 東京都港区港南2-16-6 キヤノンSタワー 1F・2F 開館時間:10:00~17:30(日、祝、年末年始弊社休業日 休館) TEL:03-6719-9021

■銀座 〒104-0061 東京都中央区銀座3-9-7 レンズ銀座ビルディング 1F 10:30~18:30(最終日15:00まで)日、祝、年末年始弊社休業日 休館 TEL:03-3542-1860

■大阪 〒530-0005 大阪市北区中之島3-24 中之島フェスティバルタワーウエスト1F 10:00~18:00(最終日15:00まで)日、祝、年末年始弊社休業日 休館 TEL:06-7739-2125



◎キヤノンギャラリーホームページ

canon.jp/gallery

キヤノンマーケティングジャパン株式会社



出雲大社 吉兆さんと番内さん——中野晴生
写真集『出雲大社』



浮き世——西川祐介
写真集『浮き世』



恐竜たちの楽園——吉村和敏
写真集・写真展「Du CANADA」



微笑——河野英喜
写真展「LUMIXS × 河野英喜写真展 Stylish」



アサギマダラ——宮入芳雄
写真集『高尾山昆虫記』



こぼれ落ちそうなトラック——小澤太一
写真集・写真展「SAHARA」

PPSの時代

会長 野町 和嘉

あと何年かで後期高齢者に分類される年回りとなつたが、20代に身につけたやり方で現在も旅に出て撮り続けていられる、有り難いことだ。人により経験値は様々だろうが、写真が最も盛んであった時代に大いに視野を広げることが出来た。私にとってそれは“PPSの時代”でもあった。

‘80年代を中心に、海外の著名写真家を網羅し、日本人写真家も含めた大規模な写真展という写真展はPPSが仕掛けたものだった。頻繁に開催されるそのオープニングパーティは、写真界にとってタイムリーな交流の場として定着していた。

‘70年代半ばにPPS通信社と出会い、海外での出版や雑誌掲載で深く連携するようになった。日本で売れなくても欧米では通用した。これはその後の展開に大いに自信を得た。

当時PPSはマグナムの日本代表だったし、ナショジオをはじめ著名写真家たちは訪日の度にPPSをベースにしていて、海外情報も集中していた。カラーの魔術師と讚えられ一世を風靡したエルнст・ハースは、カレンダー撮影の特写で毎年来ていた。営業スペースに並ぶライトボックスは、夕方になると宴会テーブルに変わるのが常で、海外から誰かが来るときしばしば招集が掛かった。レニ・リーフェンシュタールのヌバ展が池袋の西武美術館で開催され、そのオープニングにマグナムのルネ・ブリと行った。展示は圧巻だったが、ブリさんが冷めた口調で、“ヒトラーの女だった”と言い放ったひと言が突き刺さった。ヒトラーの影におびえたスイス人として看過できない過去である。

世界から約100人の著名写真家を招集してある国の一目を撮らせる、「A Day in the Life of ○○」に参加するようになったのもPPSの紹介だった。初回のオーストラリアは日程の都合で行けなかつたが、翌‘83年のハワイ、カナダ、日本、アメリカと毎年参加し、フ

オトジャーナリストたちとのまたとない交流の機会となつた。30代前半の2人のアメリカ人が立ち上げた企画であったが、次々にスポンサーが付き、世界的なプロジェクトに育て上げるところが、さすがアメリカである。ハワイでは東松照明さん、アメリカでは江成常夫さんと相部屋で親交を深める機会にもなつた。

‘85年の日本の「A Day~」では新宿のヒルトンホテルがベースとなり、多くの日本人写真家も参加し、濱谷(浩)先生がホスト役のような立場で中心に立つた。海外での知名度がありジャポネスクを絵にしたような爽やかな風貌の濱谷先生はさすがの貫禄であったが、打ち上げパーティーのディスコで、一転、狂乱の踊りに狂う濱谷を眼にしたナショジオのエディターが“HA・MA・YA Crazy!”と驚喜絶叫したのが忘れない。

濱谷先生とは、サハラ情報を交換したことをきっかけに、長く親密な交際をさせていただいた。最晩年に至っては、老いの哀しみを赤裸々にしみじみと晒し見せてもらったと、感謝の言葉もない。

1980年から‘90年代にかけて、振り返ってみれば写真家にとって最高の時代だったと言える。時代は移り、写真を取り巻く環境は激変した。メジャーなグラフメディアが消えてしまったことで、写真表現も人の数だけ流儀が並立してどこに軸があるのか、見えなくなつて久しい。

2020年はJPS創立70周年にあたる。写真環境が大きく変化した、1985年から2015年までの30年を区切りとした、時代を代表する140人の作品が集う写真展と出版企画が佳境に入っている。写真家の立ち位置が難しい時代に、互いの存在を間近で確かめられる機会となれば、素晴らしいことではないだろうか。そう願つてやまない。

個人事業者(写真家)と消費増税の影響について — 今後導入されるインボイス制度の影響 —

櫻木康裕(税理士・翔税理士法人 所長)

2019年10月1日より8%と10%の2つの消費税率が併存するようになりました。店内で食しない食料品や新聞は8%、それ以外は10%の消費税率が課されました。8%と10%の税率が混在する事業者は大変だろうなと同情する気になりますが、フリーランスの写真家にはもっと重大な問題が生じる可能性があります。それは、4年後(2023年)10月から始まるインボイス制度です。(※インボイスとは一般的に貿易における「送り状」のことですが、今回の消費税改正では別の意味があります。)

今年から4年間は領収書に消費税率8%と10%を明記しなければなりませんが、インボイス制度での領収書等には事業者の登録番号の記載が必要になります。領収書等に記載する登録番号は、法人であれば法人のマイナンバーが登録番号になります。ところが、個人事業者(写真家)の登録番号に個人のマイナンバーは使用できません。登録番号を得るには消費税の課税事業者を選択して税務署に登録する必要があります。

2023年9月までは消費税の課税売上高が1,000万円を超えていない個人事業者は免税事業者として消費税の納付は必要ありません。しかし、2023年10月以降、仕事の依頼先からの要請で登録番号を登録した個人事業者は、たとえ課税売上高が1,000万円以下であっても消費税の納付が必要になります。

以下、2019年10月より2029年10月までの10年間、大きく変動する消費税制度を見ていきます。

今回の改正は「税制抜本改革法第7条に基づく消費税率引上げに伴う低所得者対策」として2019年10月から軽減税率制度の名称で実施することになりました。財務省が公表したスケジュールに合わせて見ていきます。

1. 経過措置期間(区分記載請求書等の保存方式)

本年2019年10月から2023年9月末の期間は経過措置期間として、領収書に登録番号はなくとも消費税率8%と10%の区分記載があれば今まで通り消費税の課税事業者は課税仕入控除を認めています。この4年間は8%の軽減税率と10%の標準税率が品目ごとに記載されているかが問題となるだけです。

2. インボイス制度導入(適格請求書等の保存方式)

1) 仕入税額控除にはインボイスが必須

2023年10月からインボイス制度が導入されます。

インボイス制度の正式名称は「適格請求書等保存方式」といい、適格請求書等の発行方法と保存方法が大幅に変わります。インボイスとは、適格請求書等のことです。適格請求書等とは、請求書、納品書、領収書、レシート等に、
①事業者の氏名又は名称及び登録番号 ②取引日の日付 ③取引の内容 ④取引内容別の適用税率 ⑤税率ごとの消費税額 ⑥取引相手の氏名又は名称、を記載したもので、不適格請求書等とは①～⑥の記載のないもの、例えば、登録番号や軽減税率(8%)と標準税率(10%)の区分記載がないものです。

インボイス通達2-3【登録番号の構成】

- ① 法人番号を有する課税事業者 「T」+法人番号
- ② ①以外の課税事業者(個人) 「T」+数字13桁

登録番号の記載例 T-1234567890123

国税庁はインボイス(適格請求書等)について「売主が買主に対して正確な適用税率や消費税額等を伝える手段」と説明しています。

インボイス制度には、インボイスがないと仕入税額控除を受けられない、という重大なルールがあります。

消費税を納付する義務がある課税事業者は、顧客などから預かった消費税を税務署に納めなければなりませんが、このとき、課税事業者が依頼先に支払った(預けた)消費税の額を差し引くことができます。これが仕入税額控除です。つまり、仕入税額控除ができないと、課税事業者が税務署に支払う消費税が多くなってしまうのです。

2) 免税事業者はインボイスを発行できない

免税事業者とは、2年前の課税売上高が1,000万円以下の事業者で課税事業者を選択していない事業者です。インボイスは誰でもどの会社でも発行できるわけではありません。インボイスを発行できるのは、適格請求書発行事業者に限られます。そして適格請求書発行事業者になるには、税務署に適格請求書発行事業者の登録申請書を提出し、適格請求書発行事業者として登録する必要があります。適格請求書発行事業者になれるのは、原則、課税事業者だけです。零細企業や個人事業者などの免税事業者は、そのままではインボイスを発行できません。

3) 仕事依頼企業は経費負担が増える

免税事業者に仕事を依頼している企業などは、「そのままで」経費負担が増えることになります。例えば、免税事業者に総額10,000円の仕事を依頼しても、免税事業者はインボイスを発行できないので、消費税分909円(=

$10,000 \times (10 \div 110)$ 、標準税率 10%で計算)を仕入税額控除に計上できないのです。

インボイス制度が導入された後も現状と同じ仕事を同じ金額で免税事業者に依頼し続けると、約 1 割の値上げと同じ影響が出るわけです。

3. 2023 年以降の仕入税額控除の経過措置

2023 年 10 月から 2029 年 9 月末までインボイス制度が導入されても、免税事業者からの仕入税額相当額の一定割合を仕入税額控除に計上できる経過措置があります。

2023 年 10 月に導入される予定のインボイス制度では原則、免税事業者が「軽減税率(8%)と標準税率(10%)を書き分けた請求書」を作成しても、免税事業者に仕事を依頼した企業は仕入税額控除に計上できません。

しかし、2023 年 10 月から 2029 年 9 月までの約 6 年間に限って、免税事業者に仕事を依頼した企業は、免税事業者から受け取る区分記載請求書等の要件を満たす請求書を保存し、帳簿にも経過措置の適用を受ける旨を記載した場合には一部を仕入税額控除に計上できます。区分記載請求書とは、正式なインボイスではないものの、消費税 8%と 10%を書き分けた請求書のことです。

1) 控除できる割合

この経過措置は段階的に引き下げられます。その内容は以下のとおりです。

期間【2023 年 10 月 1 日～2026 年 9 月 30 日】

・・・ 控除できる割合 仕入税額相当額の 80%

期間【2026 年 10 月 1 日～2029 年 9 月 30 日】

図3/ 軽減税率・インボイス制度の導入・施行スケジュール		
2019. 10 ← 経過措置 期間 → 2023. 10 →	4年間	3年間 → 3年間
消費税率	区分記載請求書等 保存方式 (現行制度) 8%	過格請求書等保存方式 (インボイス制度) (標準税率) 10% (軽減税率) 8%
課税計算の 方法	← (割り戻し計算) (現行どおり) → 「積み上げ計算」または 「割り戻し計算」	
請求書等	現行の記載事項 ■発行者および 受取者の住所 または名称 ■取引の年月日、 内容、対価の 額(税込)	左記事項に、 ■軽減税率制度の 対象品目である旨 ■税率ごとに区分 して合計した対 価の額(税込み) が記載されま す ■受取者が請求 可能
売り手の 交付義務	← 交付義務なし (現行どおり) → 交付義務あり	左記事項に、 ■登録番号 ■税率ごとに区分して 合計した対価の額 (税込みまたは税抜 き) および適用税率 ■税率ごとに区分して 合計した対価の額 が記載されます
仕入税額 控除の要件	請求書等の保存が 要件	過格請求書等の保存 が要件 ■免税事業者の仕入税 額控除特別算定 (ただし、以下の特例を除 いて) ■免税事業者からの 仕入税額控除の特例 (80%控除) (50%控除)

※元々の税率の特例 軽減税率対象売上上昇のみなし計算(2019.10～2023.10)
※仕入れ税額の特例 軽減税率対象仕入れのみなし計算(2019.10～1年間)
※高額度の事後選択等(2019.10～1年間)
(財務省ホームページを一部加工)

財務省「消費税の軽減税率制度の図」

「全国商工新聞第 3288 号 2017 年 11 月 13 日付図」を引用

・・・ 控除できる割合 仕入税額相当額の 50%

つまり免税事業者から仕入れた場合「消費税を 80%(または 50%)支払ったとみなす」わけです。

2) 免税事業者へ依頼した企業は事務作業が煩雑に免税事業者に仕事を依頼した企業の経理担当者は、かなり「面倒な」事務作業が必要になります。

仕入先を課税事業者と免税事業者にわけたうえで、免税事業者から受け取る請求書が区分記載請求書であるかどうかを確認し、消費税 8%分と 10%分にわけ、さらに時期によってその 80%または 50%を計算しなければならないのです。

その他にも、帳簿に「80%(または 50%)控除対象」と記載したりしなければなりません。

4. あとがき

財務省から「軽減税率・インボイス制度の導入・施行スケジュール」が左図のように発表されています。

10 月から始まった軽減税率導入は、商店街を混乱させています。この混乱が 2023 年からのインボイス制度の導入が時期尚早として延長されることを期待したいものです。

しかし、スケジュール通りに実施された場合、いずれ実施された場合、免税事業者に仕事を依頼している企業は、インボイス制度が導入されると「割高発注」と「事務作業の増加」という 2 つのデメリットを抱える可能性があります。依頼企業はこれにどのように対応してくるでしょうか。

1) 課税事業者になるよう要請されるかも

デメリットが生じるのは、依頼先が免税事業者だからです。したがって、そのデメリットを解消するために、依頼先(写真家)に課税事業者になるよう要請してくる可能性があります。課税事業者になれば適格請求書発行事業者になることができ、依頼企業は仕入税額控除を実施できます。

免税事業者である個人事業者にとっては、インボイス制度の導入を機に課税事業者になれば、事業を拡大できるかもしれません。しかし、免税事業者にとって課税事業者になることは「荷が重い」選択といえます。これまで消費税を納付する必要がなかったのに、納付義務が生じます。これは収入減に直結します。また、経理業務や税務業務が増加します。個人事業主の場合、1 人で本業と経理・税務業務をこなさなければならず、現状より事務作業が増えることになります。

2) 値引きするよう要請されるかも

免税事業者に仕事を依頼している企業が、インボイス制度導入によって「割高発注」になるのであれば、値引き要請をしてくる可能性があります。

インボイス制度の導入は、免税事業者の写真家の仕事に多大な影響を与えます。これからインボイス制度の導入に注視していくなければなりません。

(※翔鶴税理士法人は、JPS の税務顧問です。)

「奈良原一高のスペイン——約束の旅」展

Ikko Narahara Photographs: The Promised Journey to Spain

2019年11月23日【土・祝】～2020年1月26日【日】世田谷美術館

今秋、JPSの名誉会員でもある写真家・奈良原一高氏の写真展が世田谷美術館で開催されます。この写真展開催の経緯、見どころについて、学芸部企画担当マネージャー塚田美紀氏にお話を伺いました。

塚田氏は「数年前に奥様の奈良原恵子さんと同アカイブスの新美虎夫氏から写真展開催の相談があり、奈良原氏が世田谷区在住であるということもあって検討し、年にはほぼ1本の写真展企画と他の美術館では行っていないようなユニークなプラン、ある意味で変化球的なテーマ設定という当館の方針に合う形で考えました。氏の多くの作品の中からあまり世に出ていないシリーズを取り上げたい、『スペインは一高の心の故郷なのです。』という奥様の言葉もあって、この企画が決まりました。」と説明されました。

■写真展プレスリリースから

1950年代後半、極限状況での生を見つめる〈人間の土地〉や〈王国〉などのシリーズによって、戦後日本の新しい写真表現を切り開いた奈良原一高（1931-）。本展では、これまでほぼ取り上げられることのなかった1960年代のシリーズ、〈スペイン 偉大なる午後〉に注目します。

経済成長とオリンピックに日本が沸いていた1962年から65年、若き奈良原はそこから距離を置くように、ヨーロッパで自らの表現を問いかける旅に出ています。帰国後、二つの写真集『ヨーロッパ・静止した時間』（1967年）と、『スペイン 偉大なる午後』（1969年）が生まれます。つくりこまれた重厚なイメージが展開する『ヨーロッパ・静止した時間』が高い評価を得たのに対し、闘牛や祭り、村の暮らしといった、紋切り型のスペインのルポルタージュに見える『スペイン 偉大なる午後』は、今日に至るまで本格的に検証されてきませんでした。

幼い頃に暮らした長崎の街への愛着からスペインへの憧れをはぐくんだ奈良原は、ヨーロッパ滞在中、3度にわたってかの地を訪れ、五ヵ月あまりを過ごしました。自ら「約束の旅」と名づけた道のりの痕跡として残された作品の数々は、人々の生きざまへの共感と、歴史や

文学、美術をめぐる思索に裏打ちされた類まれな想像力とが生み出した、ダイナミックなイメージの奔流というふさわしいものです。

ところで当時、スペイン社会は過渡期にありました。内戦後長らく鎖国状態を保持していたフランコ政権が観光客の誘致に乗り出し、中世の面影をそのまま残すとさえいわれた地方の村々でも変化が始まっていたのです。奈良原の写真は、人々の暮らしも文化もいずれ姿を変え、失われてゆくとひそかに予感しながら撮られたものであります。

本展では、奈良原一高アーカイブ所蔵のニュープリントにより、奈良原一高のスペインを鮮やかによみがえらせます。プロローグとして、シリーズ〈ヨーロッパ・静止した時間〉から15点、ついで〈スペイン 偉大なる午後〉から120点、計135点のモノクローム作品を展覧。写真集『スペイン 偉大なる午後』は、闘牛がテーマの「偉大なる午後」に始まり、祭りの熱気を活写した「フィエスタ」、人々の生きざまを見つめる「バヤ・コン・ディオス」へと展開しますが、本展は奈良原がスペインと出合ってゆくプロセスをより身近に体感できるよう、異なる構成で「約束の旅」の軌跡をたどります。

【みどころ】

1、忘れられたシリーズ、東京でほぼ半世紀ぶりの展覧

〈スペイン 偉大なる午後〉のシリーズが初めてに発表されたのは、1965年の同名の個展においてでした。1969年の写真集出版と翌年の再個展以後は、2010年の



《フィエスタ セビーリャまたはマラガ》〈スペイン 偉大なる午後〉より 1963-65年 © Ikko Narahara



《フィエスタ バンプローナ》〈スペイン 偉大なる午後〉より 1963-64年 © Ikko Narahara

大回顧展「手のなかの空 奈良原一高 1954-2004」(島根県立美術館)で改めて紹介されるまで、同シリーズは一般にはほぼ忘れられた存在だったと言っても過言ではありません。東京での展覧はほぼ半世紀ぶりとなります。

2、120点で堪能する、スペインの魅力

—「祭り」、「町から村へ」、そして「闘牛」

奈良原におけるスペインとの遭遇は、牛追い祭りとして知られる北部パンプローナのサン・フェルミン祭から始まりました。本展第1章「祭り」は、南部アンダルシアで踊りに興じる若者の姿も含め、熱気をそのまま写し留めたような作品が魅力的です。第2章「町から村へ」では、奈良原がとらえた味わい深い村や人々の佇まいを紹介。ロードマップを手に、北から南まで自らの車で踏破した者にしか出合えない瞬間がそこにはあります。第3章「闘牛」は、驚くべき回数にわたって立ち会った闘牛の写真から、奈良原が最もこだわった「舞い」のイメージをクラシマックスに構成します。

3、〈ヨーロッパ・静止した時間〉の名作も楽しめる

〈スペイン 偉大なる午後〉と同時期に撮影されたシリーズ〈ヨーロッパ・静止した時間〉。本展のプロローグでは、そこから15点を紹介します。スペインで撮られたものもありますが、〈スペイン 偉大なる午後〉とは対照的な、重厚で静謐な世界です。奈良原の写真表現の多彩さをお楽しみください。

4、デザイナー勝井三雄とのコラボレーションを特集展示

奈良原の写真集『スペイン 偉大なる午後』のデザインを手がけたのは、グラフィック・デザイナーの勝井三雄(1931-2019)。この写真集をはじめとして、実験精神に富んだふたりの1960年代のコラボレーションについて、特集展示を行います。

【展覧会の構成】

プロローグ — 遠い都市

シリーズ〈ヨーロッパ・静止した時間〉より



《塔 セゴビア》〈ヨーロッパ・静止した時間〉より 1963-64年
© Ikko Narahara

第1章 — 祭り

シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「フィエスタ」

第2章 — 町から村へ

シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「バヤ・コン・ディオス」

第3章 — 闘牛

シリーズ〈スペイン 偉大なる午後〉より「偉大なる午後」

特集展示 — 奈良原一高と勝井三雄

写真集『スペイン 偉大なる午後』を中心に

(取材／出版広報委員会・小池良幸、写真提供／世田谷美術館)

【開催要項】

会期：2019年11月23日[土・祝]～2020年1月26日[日] 51日間
会場：世田谷美術館1階展示室（単館開催）

開館時間：午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)

休館日：毎週月曜日および年末年始

(2019年12月29日[日]～2020年1月3日[金])

*ただし2020年1月13日[月・祝]は開館、翌1月14日[火]は休館。

観覧料：一般1000(800)円、65歳以上800(600)円、大高生800(600)円、中学生500(300)円。

主催：世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)

後援：世田谷区、世田谷区教育委員会、駐日スペイン大使館、公益社団法人日本写真家協会、公益社団法人日本写真協会、インスティゥト・セルバンテス東京

特別協力：奈良原一高アーカイブズ

協力：株式会社クレヴィス、株式会社写真弘社

助成：芸術文化振興基金

協賛：株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン



《フィエスタ パンプローナ》〈スペイン 偉大なる午後〉より 1963-64年 © Ikko Narahara



《偉大なる午後 パンプローナ》〈スペイン 偉大なる午後〉より 1963-64年 © Ikko Narahara



《偉大なる午後 コルドバ》〈スペイン 偉大なる午後〉より 1963-64年 © Ikko Narahara

鉄道写真家・宮澤孝一インタビュー

河野和典 KOUNO Kazunori (編集者)

今年の3月、東京・半蔵門のJCII フォトサロンで宮澤孝一作品展「にっぽんの路面電車—昭和 20 ~ 50 年代—」を見たのだが、ここでとても印象深い写真にめぐりあった。その写真キャプションには「さよなら電車を撮影する沿線在住の婦人たち」とある。しかも三人の女性はそれぞれがカメラを持ったり構えたりしている。この作品展図録の裏表紙にも路面電車を撮影する女性の後ろ姿があった。一般的には鉄道ファン(主に男性)は、多くの場合、鉄道車両の勇姿を狙うのがほとんどなのだが、このように女性が登場するというめずらしく新鮮な鉄道写真?にめぐりあったのは印象深いものであった。

これはどうしたことか? そもそも、撮影者の宮澤孝一とは一体どのような人物なのか。ここは作者にご登場願い、この連載では初めてのインタビューにまとめるのが良いのではないかと、宮澤氏ご本人にご足労いただくこととした。

経歴によれば、「昭和6(1931)年、東京・芝高輪生まれ」とある。つまり今年 88 歳である。8月 22 日、日本写真家協会の会議室に現れた作者は若々しく、「少年時代のこと」にはじまって、「写真と鉄道の事始め」「カメラとレンズ」「アマチュアの心意気」などなど、朗々とそして理路整然と 1 時間半にわたって語っていただいた。

■軍国少年から平和な趣味としての鉄道写真へ

私は昭和6(1931)年東京・高輪で生まれて、昭和13(1938)年から恵比寿、そして昭和20(1945)年から疎開で浦和に転居して、昭和36(1961)年まで住みました。現在は世田谷に住んでおります。

子供の頃、戦前ですが、母方の明治生まれの伯父の家へ行くとグラフレックスを使っていました。暗室もあって、赤い電灯をつけて、あの酸っぱい匂いも漂っていました。伯父は早稲田を卒業してたしか国鉄に入りましたから、写真家でもないのですが、こういう趣味の世界もあるものだということを知りました。『アサヒカメラ』とか『カメラクラブ』とか近江屋写真商会のカタログなどいろいろありました。それを聞くとレチナだと、ライカ、イコンタだとかみんな出てくるんです。だから写真についてはもう生まれながらに、私の頭の中にはレールが敷かれていたような気がします。

ところが私は軍国少年でしたから、昭和20年8月14日までは我々子供の世界には兵器しかなかったんですね。軍艦であり、飛行機であり、戦車

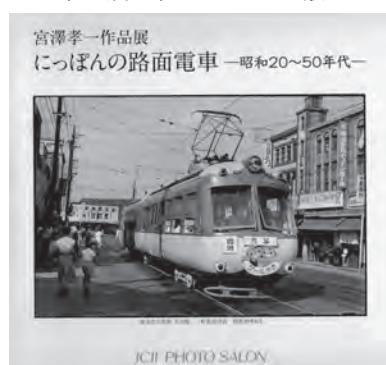
でした。それがある日、この変化というのは皆さんお分かりにならないでしょうけど、突然無くなった。旧制浦和中学に入ったら、もう幼年学校(陸軍)か兵学校(海軍)しか入る道はないと思っていたのに、それも無くなつて、ボーッとしているんですけど、先生も親も何もわからぬわけです。どうしよう

ということになった。そんなとき、浦和の友達の家へ遊びに行つたんです。浦和は戦争でほとんど焼けていませんから、結構むかしのものが残っていたんです。そのとき友達の家にあったのが、東京・神田須田町の鉄道模型メーカーのカワイモデルが出版した『模型鉄道』という雑誌でした。それを見たら列車の写真が載っているんですよ。こんなのが世の中にあらんだというのが、15歳の中学生の頭の中に忽然と入ってくるわけです。それは特急「さくら」というテールマークの付いた列車の写真。それで、ある日曜日に浦和から万世橋の交通博物館へ行つたら、車両がワッといっぱいあった。もう、それで決まり。

でも、順序があるんですよ。私の場合は車両への興味がスタートですから、その車体の写真が無性に撮りたくなった。それで昭和22年1月に初めてカメラを持ち出して、親父の古いカメラ、コダックのプリミティブもいいとこのプローニーカメラで写真を撮った。その写真は今でもあります。その最初のネガがあるという効能は、原点があるということで写真を前へ進めることができるという



インタビューに応える宮澤孝一さん(8月 22 日、日本写真家協会会議室)



宮澤孝一作品展「にっぽんの路面電車—昭和 20 ~ 50 年代—」図録。写真は「東京急行電鉄玉川線三軒茶屋付近 昭和 30 年 8 月」

ことです。今のメディアは何だ、と。撮った写真が消せるじゃないか、と。それはもう私は写真じゃないと思います。実は、今日もここへ来る前に撮影してきました。この年でもまだ撮って歩いていますよ。



「東京急行電鉄 玉川線 瀬田付近 昭和 44 年 5 月
さよなら電車を撮影する沿線在住の婦人たち」

■本来の鉄道写真と私流「行書写真」

これ、今日、駒込のホームから撮った写真ですけど、お召し用の列車が整備のため回送運転で通過するところです。鉄道ファンが撮るのは列車そのものですが、私の好みの写真はこれら、そのときのホームの様子を写した写真です。鉄道写真というのは、「カワセミがあそこにいるからとにかく行こう」とじゃないんです。何時何分にこれがここを通るから行こうよ、なんです。ですから年寄りでもまだちゃんとやれる。鉄道写真撮影の本道は、何時何分に通過するところですが、私はそこに人物を入れないと気がすまないんです。その写真は、文字に例えると、行書なんです。楷書ではない。楷書は決まったところを正確にきちんと撮る。いわゆる表札の文字。私はそうではなくて、といって草書でもない。いいとこ行書。行書の良いところはその場の息づかいが聞こえることです。

■ほとんど 50 ミリレンズの画角

私の路面電車の写真は、ほとんどが 50 ミリレンズなんです。ライカ判(35 ミリ判)で 50 ミリレンズというのは画角 46 度です。ところが人間の眼というのはそれより狭くて、だいたい画角が 30 度くらいですからレンズの焦点距離は約 85 ~ 90 ミリくらいです。ですから私の写真は人が普通にものを見るよりパースペクティブが広いんです。好きな車両を狙っていても必然的に両側が入ってしまう。で、その両側には情報量があるということです。その場の臨場感もそこから生まれるわけです。

私は昭和 27 年早稲田大学で鉄道研究会というのを作ったんです。今でもつづ



宮澤孝一作品展「にっぽんの路面電車—昭和 20 ~ 50 年代—」図録裏表紙に掲載された写真「東京急行電鉄玉川線三宿 昭和 44 年 4 月」

いています。そこで写真展があって、私は古い写真を出すんですけど、余計な電線とかいろいろ写っているのがあるんです。後輩は「消しますか」と思うらしいんですけど、宮澤へ言ってもどうしつけられるから黙っていようとなるんです。私は修正はお見合いや葬式写真じゃあるまいし、ペンなんかでレタッチすることはあたわず、と。そういういたずら物が避けられないところでも私は撮っている。プロみたいに一枚いくらで写真を売っているわけではないんだから、我々はアマチュアだから素直に堂々とやれ、と。

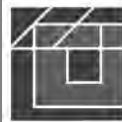
◎路面電車の存在意義を表す写真

以上、意気軒昂な宮澤さんの発言であったが、冒頭の「宮澤孝一作品展「にっぽんの路面電車—昭和 20 ~ 50 年代—」に登場する 3 人のカメラを構えた女性の写真に戻ろう。(左から) 1 人目はコンパクトカメラを手に持ち、2 人目は機種は不明だがファインダーを覗き、3 人目は二眼レフを持っていた。カメラが問題ではなく私が言いたいのは、これはいわゆる形式的な鉄道写真とはまったく無縁な、ドキュメンタリーとも言える一コマであるということだ。一般に路面電車は庶民の電車ともいわれるが、そしてまた、鉄道ファンの多くは男性であるのに対して、ここではめずらしく女性の鉄道ファンが写っている。これは老若男女、多くの人たちから路面電車が慕われていることを如実に示す一コマであるということだ。幅広い視野から宮澤さんは鉄道を捉えている。もう一つ突っ込んだ言い方をすると、この写真は路面電車の社会における存在意義そのものを表す写真と言えよう。

さすが写歴 72 年にわたる「鉄道写真」の長さというのは、鉄道と写真の限られた分野にもかかわらず、そこ内包する経験と知識はさまざまなことを含んでいて、驚かされる。「宮澤孝一作品展「にっぽんの路面電車—昭和 20 ~ 50 年代—」および「にっぽんの市内電車—昭和 20 ~ 50 年代—」(2017 年 9 月)は、一途でありながら、幅の広い取り組みから生まれた鉄道写真の傑作の一つと言えよう。

【みやざわ・こういち】

1931(昭和 6)年東京・芝高輪に生まれる。1947(昭和 22)年、平和な趣味として鉄道写真の撮影を開始し、交通科学研究会、東京鉄道同好会、京都鉄道趣味同好会(タイト会)、関西鉄道同好会に入会。1952(昭和 27)年、早稲田大学第一理工学部在学中に同大鉄道研究会創設に参画。1953(昭和 28)年、鉄道友の会創設と同時に加入。1955(昭和 30)年、大学を卒業し、安立電気株式会社に入社。1992(平成 4)年、アンリツテクニクス株式会社を退職。現在、鉄道友の会参与、稻門鉄道研究会、鉄人会などに所属。著書に『ブルートレイン全百科(コロタン文庫 22)』(小学館、1981 年)、『国鉄全線全百科(コロタン文庫 24)』(小学館、1981 年)、『決定版 日本の蒸気機関車』(講談社、1999 年)、『鉄道写真 ジュラ電から SL 終焉まで』(正編、続、続々(弘済出版社、1998 ~ 2001 年)、『鉄道写真 ジュラ電から SL 終焉まで』(完)(交通新聞社、2002 年)ほか多数。



笹本恒子写真賞 Tsuneko Sasamoto Photography Award

第3回受賞者決定!!

35年以上にわたりキリストの里を撮り続けた吉永友愛さん

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子（1914年生）名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を2016（平成28）年に創設。今回の選考委員は椎名誠（作家）、大石芳野（写真家）、野町和嘉（JPS会長）。授賞式は2019年12月11日（水）、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念写真展を12月19日（木）～25日（水）、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で催します。

【受賞理由】

徳川幕府によるキリスト教徒の迫害、弾圧が260年も続いた外海（そとめ）の教徒たちは、迫害を逃れて山中に立てこもり、信仰を守り続けてきた。その集落に住む末裔の敬虔な信徒たちの日常生活を、素朴な視線できめ細かく記録し、信仰の奥深さを丁寧に表現した力作に対して。



教会...老女



教会のミサで



【受賞の言葉】

このたびは栄えある写真賞をいただき誠に有難うございます。

知らせを受けたときは「本当に自分が」という思いでしたが、時間が経つにつれ嬉しさがこみ上げています。関係者の方々へ厚くお礼申し上げます。軽い気持ちで始めたキリストの撮影でしたが、その歴史や信仰の深さを知るほどに引き込まれ、また、土地の人々の優しさに甘えてつい長い時間

が過ぎてしまいました。今回の受賞で日々の成果が実ってこの上ない喜びです。私を受け入れてくださった長崎市外海（そとめ）地区の皆さんに感謝しています。

吉永友愛（よしなが・ともなり）：1944年長崎市生まれ。1971年から長崎市の写真クラブで写真を始め、勤務の傍ら写真を撮り続ける。1977年キリストの歴史、生活に興味を持ち撮影を始める。1979年から全国公募「視点」展に応募し、奨励賞、特選など受賞。1990年写真家一村哲也氏に師事。長崎県美術協会名誉会員。写真集：2018年12月「キリストの里－祈りの外海」自費出版。個展：2017年「ひぐれどきⅡ」長崎南山手美術館、他多数。



聖地でのミサ

第3回「笹本恒子写真賞」選評

大石芳野

今回推薦された写真家14人のそれぞれの写真集や写真展資料はいずれも実力は申し分のないものでした。審査員は慎重な討議を重ね、その結果、選出したのが写真集『キリストの里 祈りの外海』の作者である吉永友愛さんでした。

この写真集は前半がモノクローム、後半がカラー写真の構成となっています。長崎市外海（そとめ）地区のキリストの里暮らしを1979年から2012年まで撮影し続けたものを、2018年12月に自費出版したものです。人びとの日々の営みを35年以上にも渡りレンズを向けた映像に、里人に対する吉永さんの愛情深さがいかんなく滲み出でていて、審査員たちの間に静かな感動が広がりました。

まえがきには「山中に小さな教会がある集落に行ったのがきっかけで、この歴史と子孫の方たちに興味をもち、その生活、風土を記録してきました」と綴っています。16世紀のキリスト教弾圧で大勢が命の危険にさらされた日本の歴史を背負いながら、ひっそりと住み

続けてきた人びとの信心深い姿、厳しい環境のもとで古里を大切に護ってきた姿、そして村の美しい教会のたたずまいなどを丁寧にとらえています。

この写真集の普遍的な意味合いは、キリスト教会ばかりではなく仏教寺院でも神社でも共通する無限の力を信じながら人びとが刻んできた歴史を写し取っていることです。同時に、日本中どこにでもある集落における日常生活が現代でも生きていると知らせている点も見逃せません。

吉永さんの写真の力量はなかなかのものです。望遠レンズの写真が目立ちますが、その特徴を活かして構図を決め、光のトーンや色調を考えながらシャッターチャンスを狙っています。“素人のような撮り方”が流行っているだけに古典的とも言われそうですが、いえいえ、普遍的なテーマに即した表現方法だと言えるのではないでしょうか。笹本恒子写真賞に相応しい作品だと審査員の意見が一致しました。

来日したクラシック音楽名演奏家 丹野 章オリジナルプリント写真展

2019年6月17日～22日まで銀座の「画廊るたん」で、1950年～70年に来日したクラシック音楽家を撮影した故・丹野章本人によるオリジナルプリントの展示、販売が行われた。これまで『サーカス』『ボリショイ劇場』など、舞台を撮影した写真集は数多く出版されてきたが、音楽家を撮影した写真集は発売されていない。これだけの音楽家の写真が集結したのは初めてである。

この写真展は、公益社団法人日本写真協会が写真業界に呼びかけて開催したイベントの「東京写真月間2019」にあわせて行われた写真展で、1950年～70年にかけて来日したクラシック音楽家のリハーサルステージを撮影し、丹野氏自身の手で仕上げたオリジナルプリントを約80点展示、販売をした写真展「来日したクラシック音楽名演奏家」が6月17日～22日まで銀座の「画廊るたん」で行われた。

エルネスト・アンセルメ、ヘルベルト・フォン・カラヤン、ヴァルター・ギーゼキング、ストラヴィン斯基ー、マゼール、バーンスタイン、エッシャンバッハ、ヴァンデルノート、ジャン・マルティノン、カール・リヒター、マリア・カラス、ウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団など、多くの名演奏家たちの写真が展示されていた。丹野氏のオリジナルプリントの特徴的なところは黒の綺麗具合が独特の雰囲気で、しっとりとした黒の美しさであると言われるほど素晴らしい。丹野氏本人の手によるオリジナルプリントでこれだけの点数の写真展はこれが最初で最後の写真展になるだろう。

写真展会場では、金子隆一氏(写真史家)のトークショーも行われた。「10人の眼」展の企画をされた、写真評論家の福島辰夫氏が1957年に発行された「月刊カメラ」での丹野氏の印象的な写真や写真業界に残した偉業などを紹介した。内容については、簡単に丹野氏のプロフィールで紹介しているので参考にして欲しい。



オリジナルヴァインテージプリントの展示



金子隆一氏のトークショー

奥様である典子さんからお話を聞くことができて、生前の丹野氏が気に入っていた写真のことなど色々とお話をさせていただいた。ジャン・マルティノンやクリストフ・エッシャンバッハなど躍動感のある写真がお気に入りだったとお話を聞いた。

(取材・写真／出版広報委員：川上卓也)

丹野章 プロフィール

1925(大正14)年8月8日、東京に生まれる。
1947(昭和22)年、大内写真工房に入社、大内英吾のもとで広告写真にとりくむ。日本大学専門部芸術科で写真を専攻、49年卒業。51年に独立し、フリーランスとなる。57年、写真評論家・福島辰夫による企画、第一回「10人の眼」展に〈サーカス〉連作を出品。同展のメンバーの川田喜久治、佐藤明、東松照明、奈良原一高、細江英公と59年、VIVOを結成した。初めての写真集として『ボリショイ劇場』(音楽之友社、1958年)を刊行するなど、舞台写真から身体表現へと関心を広げ、その他の写真集に70年代から長くとりくんだ主題による『壬生狂言』(イメージハウス、1990年)、『壬生狂言』(光陽出版社、1992年)、『日本で演じた世界のバレエ 1952-1972』(イメージハウス、1995年)などがある。また炭鉱や基地問題など社会的主題の取材にもとりくみ、日本リアリズム写真集団にも参加、1989(平成元)年から2001年まで理事長を務めた。98年、第48回日本写真協会賞功労賞を受賞。死去の翌月、初期作品による写真集『昭和曲馬団』(禅フォトギャラリー、2015年)が刊行され、刊行記念の個展(東京・禅フォトギャラリー)が開催されるなど、晩年その仕事への再評価が始まっていた。2015年8月5日急性肺炎のため八王子市内の病院で死去した。享年89歳。



(丹野章写真展プロフィールより抜粋)

「日本写真保存センター」調査活動報告(31)

日本人の美意識を追求する写真家・西川孟

松本 徳彦(副会長)

日本写真保存センターでは、わが国の歴史的・文化的に貴重な日本人の美意識や生活習慣、出来事などを記録した写真原板(乾板やフィルム類)を収集・保存し後世に遺し伝える作業を行っている。ここには明治、大正、昭和の約100年に及ぶ日本の姿を撮影された写真原板約40万点をデータベース化して、文化庁から貸与されている国立映画アーカイブの収蔵庫(室温10℃、相対湿度35~40%)で保存している。

センターでは収蔵している原板からプリントした写真「後世に遺したい写真」(2017年)を制作し、CP+横浜みなとみらいギャラリーと光村印刷ギャラリーで展覧するなどの活動をしている。2020年には、国立国会図書館が運営するわが国の文化資料を国内外に発信する「ジャパン・サーチ」と連携して、写真原板情報の発信を行うことにしている。

心魂を傾けた西川孟(1925~2012)の労作

この夏、土門拳の写真術や人生観に心酔した愛弟子の西川孟が撮影した写真原板を、ご遺族の西川香代さまから寄贈いただくことになった。原板は8月末、父の貴重な作品原板を宅急便で送るのはとても心配だからと、香代さまが自らの手で梱包されたトランクを、御徒町の写真保存センター分室までご持参いただいた。第1回目として氏の代表作『桂離宮』の写真集に使用された原板(4×5サイズのカラーポジとモノクロフィルム3,006枚)を受け取った。

西川氏は、京都の離宮や、龍安寺、西芳寺、伊勢神宮などの寺社、さらに姫路城、京都島原の角屋など、日本の文化史に燐然と輝く建築物や庭園などを撮影し、多くの写真集として発表している。なかでも代表作『桂離宮』(講談社、1977年)は、圧倒的な



園林堂脇の飛石

存在感がある。

ページをめくるたびに、「作品」が「ここを見よ」とばかりに強い視線を放つ。ただならぬ気配がそこに立ち上がり、目が釘付けになる。

「桂離宮」は西川が大阪でコマーシャル写真を撮っていたとき、土門拳の『室生寺』の写真集に出会い、写真とはなにかを突き詰めるために61年36歳の時、弟子入りを志願する。

あるとき土門さんと話す機会があった、西川は「自我を否定し、先入観念を捨て去り、自分が小さくなつて被写体の中に消滅したときに写真が撮れる」と話したところ、「その通り。俺は25歳のときそのことが分かった」と語ったという。

また、土門さんからは「写真家としての生き方」を、身をもって教えてもらったという。

「僕にとって人生と写真は同じ。土門さんのものをつくる人間の生き方を学んだ」。

桂離宮の構想を練っているとき、内藤昌著の『新桂離宮論』(鹿島出版会1967年)を読み、桂の造形の社会的・文化的背景を探ろうとする論に共鳴し、内藤氏の「適格な教示」を指標として「桂離宮の構想は約10年間かけて膨大な資料を読み、撮影に4年間のべ400日間通い、77年に講談社から写真集『桂離宮』(A3判、400頁、59,000円の豪華本)として出版された。写真集には内藤氏の論文、実測図が併載され、学術的にも貴重な書として海外(英、独、仏語版)でも高く評価され、ユネスコアジア文化センター賞を受賞する。

写真是恐ろしいまでの存在感、触覚さえも刺激する、質感を描写している。障子紙、古文書、木目、壁、釘隠しなどあたかもその空間に立つかのように「時空間」を共有する。「自分の意見を押し付けるのではなく、被写体



月波楼中の間よりの化粧屋根裏詳細

の声を写す」、「主觀を押し付けず、見えてくるものだけを写す」と述べ、日本人の美意識「雅」「あわれ」「幽玄」「わび」などを感じ取ることができる。

作家の佐多稻子氏は「西川さんは厳しく強い人で、いい意味で執拗でもあり、そして鋭い」と言う。私が1961年に、大阪在住の女友達数人と室生寺詣でをしたとき、土門拳の写真集『室生寺』を手引書のようにたずさえていた。室生寺の社務所の2階に宿を取り、そこで紹介された西川さんにこの写真集を見せたところ、『写真の凄さに感動し、昨夜は一睡もしなかった。』と話され、西川さんの仕事に対する人間の情熱に感動させられた。また、1978年に西川さんが出版された『桂離宮』の出版記念会で、西川さんは出席者へのお礼の言葉に続いて、写真集を印刷された人たちにお礼の言葉を述べ、自分に贈られた花束を手渡すなど、仕事を大切にした人の情感として、私には美しく思えた。』と記す。(『日本の心 現代日本写真全集 京の離宮 集英社 1982年』)

西川孟は『京の離宮』巻頭の言葉「限りのない問い」で「写真家として歴史的なものを対象としている私にとって、被写体を認識するのは撮影するという手段しかない。直観という甚だ客観性のないものを唯一の手懸りとして夢中で対象を追う行為を続けているだけで、出来上がった作品は、望んでいたものと隔たりがあり過ぎて自己嫌悪に陥るときがある。遂に出来たと喜んでも自惚れは2,3日にして消え去る。』と厳しい。「作品には作家の人間性が反映する。対象との対話が成立するまで、ひたすら観察する。忍耐しかない。』と作家としての胸中を語っている。

追悼集『無我の軌跡 F64』より

狭き門より入れ。
滅びにいたる門は大きく、
その路は広く、
それよりに入る者多し。
いのちにいたる門は狭く、
その路は細く、
これを見出す者すくなし。



新御殿一の間上段



西川邸の写真原板保管タンスと遺影

『マタイによる福音書 第7章 13～14節』

西川孟(孟宏)は、このような生き方を目ざしていたのではないかと思います。

激しい情熱の人、孤独の人、神の美と真とを執拗に追求し続けた人。

西川孟は、2012年10月25日に、その険しい87年9か月余りの生涯を閉じ、天に帰りました。

西川 静(西川氏夫人、『西川孟追悼集・無我の軌跡 F64』2013年)

私にとって父は、人生の一番の師であった。

私は、撮影の助手をしたというより、「教えていただいた」という方が相応しい。師・西川孟は、基本的なことを徹底し、一つでも欠けたことがあると、その重大さと責任をとことん追求する。「一つ間違うと全てが駄目になる」と烈火の如く、これでもかこれでもかと追い責めてくるのです。

西川香代(西川氏娘、『西川孟追悼集・無我の軌跡 F64』2013年)

保存センターでは、『桂離宮』の次に京都島原の『角屋』(83年 中央公論社)を、さらに『姫路城』(92年 新潮社)、『龍安寺』(89年 集英社)、『聖域 伊勢神宮』(94年 ぎょうせい)の写真原板の収集を続けていく予定である。



松琴亭一の間・二の間境

著作権研究（連載 47）

平成最後の著作権法改正 —なにができるようになったのか—

小川明子（山口大学国際総合科学部・教授）

著作権法が2018年の12月末までに、いろいろな箇所の改正案が国会を通過し、2019年の1月から施行されました。また、それと並行してアメリカが抜けたTPP11協定による改正が18年12月に発効し、19年1月から施行されました。それらをまとめて「平成30年の改正」と呼ばれています。今回は、改正箇所をまとめて解説していただき、変化を掴もうと試みました。

I. はじめに

著作権法は迷路なのだろうか。令和元年の今、多くの人々にとって、あるCMでいう「小さすぎて見えない！」ならぬ、「(変更が)多すぎてわからない！」という状況が起きている。その一つの理由としては、平成30年12月30日から平成31年4月1日までに3種類（厳密に言えば4種類）の法改正^{*1}が行われたことにある。

本稿では、法改正の内容から「著作者の許諾なしでできるようになったこと」「許諾なしにはできないこと」、あるいは「変更になったこと」といった点をとりだして、施行日順に時系列で示していくと考える。詳細に知りたい場合には、それぞれ該当する文化庁HP^{*2}の説明を読み込んでいただきたい。

Ⅱ. 1つ目の改正（2018（平成30）年12月30日施行）^{*3}

アメリカがTPP交渉から離脱したことは大きく報道されたが、その後は興味をなくしてしまった人もいるかもしれない。実際アメリカを除く11か国によって、CPTPP協定（あるいはTPP11）が締結されていた。CPTPPは、11か国中6か国が国内手続きを完了したことをニュージーランドに通達すれば、60日後に発効することになっていた。そして6か国目のオーストラリアが2018年10月31日に通達したため、2018年12月30日にCPTPPが発効した。主要な変更点は以下。

（1）著作物等の保護期間の延長

	始期	終期（改正前）	終期（改正後）
著作物原則	創作時	著作者の死後50年	著作者の死後70年
無名・変名		公表後50年	公表後70年
団体名義		公表後50年	公表後70年
映画		公表後70年	公表後70年
実演	実演した時	実演が行われた後50年	実演が行われた後70年
レコード	音を最初に固定した時	レコードの発行後50年	レコードの発行後70年

（2）著作権等侵害罪の一項非親告罪化

著作権侵害の場合、親告罪（権利者等の告訴が必要）だったもの（第123条1項）について、今回の改正で、「対価としての財産上の利益を得る」又は「有償著作物等の提供若しくは提示により権利者の得ることが見込まれる利益を害する」目的の一号乃至二号の行為は、非親告罪とした（第123条2項）。

123条2項柱書	「次に掲げる行為の対価として財産上の利益を得る目的又は有償著作物等の提供若しくは提示により権利者の得ることが見込まれる利益を害する目的がある」場合
一	原作のまま複製された複製物を公衆に譲渡、又は、原作のまま公衆送信
二	原作のまま複製された複製物を公衆に譲渡、又は原作のまま公衆送信を行うための有償著作物等の複製

ここでいう有償著作物等とは、「著作物又は実演等であって、有償で公衆に提供され、又は提示されているもの」をいう（第123条3項）。充たすということは、単に「非親告罪」として扱われることになるということであって、全て充足していなければ侵害とならないということではない。

現在有償で販売されている漫画、小説、映画等の海賊版を販売する行為は、まさに、非親告罪の対象となる侵害行為であるが、一方で、漫画等をもとにした同人誌やパロディといったものを販売したり、ネット上に投稿したりする行為は、「親告罪」が維持されることになる。すなわち、権利者等の告訴が依然として必要である。

（3）アクセスコントロールの回避等に関する措置

「技術的利用制限手段」が新設され（第2条第1項第21号）、「技術的利用制限手段」の回避を行うことが、みなし侵害の一つとされた（第113条第3項）。すなわち、アクセスコントロールを権限なしに回避する行為は、（著作権者等の利益を不当に害しない場合を除き）侵害行為とみなされる。一例を挙げれば、マジコンと呼ばれるゲームソフトをコピーしたりバックアップしたり、バックアップをゲーム機で起動することができる機械の使用が対象となる。

※1：本稿では触れないが、3種類の改正の他、「民法及び家事事件手続法の一部を改正する法律」が平成30年7月に公布されたために、著作権法も一部改正が行われている。

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuen/hokaisei/minpou/>

※2：「最近の法改正等について」文化庁HP

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuen/hokaisei/>

※3：「環太平洋パートナーシップ協定の締結に伴う関係法律の整備に関する法律（平成28年法律第108号）及び環太平洋パートナーシップ協定の締結に伴う関係法律の整備に関する法律の一部を改正する法律（平成30年法律第70号）について」文化庁HP

http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuen/hokaisei/kantaiheiyo_hokaisei/

Ⅲ. 2つ目の改正（2019（平成31）年1月1日施行）^{*4}

平成30年著作権法改正では、以下4つの観点から権

利の例外(権利制限規定)が増改築されたといえる。※5

(1) デジタル・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定の整備

「著作物に表現された思想または感情の享受を目的としない使用」(第30条の4)は、著作権者等の利益を不当に害さない限り、著作者の許諾なしに行うことが可能となった。

第30条の4	一 著作物の利用に係る技術開発、実用化試験
	二 情報解析
	三 それ以外の人の知覚による認識を伴わない電子計算機等による使用

「電子計算機における著作物の利用を円滑又は効率的に行うための付随的な利用」(第47条の4第1項)は、著作権者等の利益を不当に害さない限り、著作者の許諾なしに行うことが可能となった。

第47条の4	一 電子計算機における著作物の利用に伴う複製
	二 送信の障害の防止等のための複製
	三 情報通信技術を利用した情報提供の準備に必要な情報処理のための利用

「電子計算機における利用を行うことができる状態を維持し、又は当該状態に回復するための利用」(第47条の4第2項)は、著作権者等の利益を不当に害さない限り、著作者の許諾なしに行うことが可能となった。

第47条の4	一 保守、修理のための一時的複製
	二 機器の交換のためのデータの移行
	三 減失等の場合の復旧のために複製すること

「電子計算機による情報処理およびその結果の提供の付随する軽微利用等」(第47条の5)は、著作権者等の利益を不当に害さない限り、著作者の許諾なしに行うことが可能となった。

第47条の5	一 所在検索サービスの結果を提供
	二 情報解析とその結果の提供
	三 それ以外に、電子計算機による情報処理により、新たな知見又は情報を創出し、その結果を提供する行為であって、国民生活の利便性の向上に寄与するもの

(2) 教育の情報化に対応した権利制限規定の整備

「学校その他の教育機関における複製等」は、ICTを活用した教育での円滑化を目指し、今後は、家での予習復習にも活用できるよう「公衆送信」が可能となるはずであったが、実質現時点では、新たな規定は適用されていない。

35条	現行	改正後条文(3年以内)
1項	授業過程の複製	授業過程の複製 / 公衆送信 / 伝達
2項	授業の同時配信	公衆送信の場合の補償金支払い
3項	一	授業の同時配信

改正後は、教育機関を設置する者は、相当な額の補償金を著作権者に支払う義務が生じることから、この補償金の額及び徴収方法は3年以内に決定するとされ、その後、35条は改正された新規定に差し替えられる。

(3) 障害者の情報アクセス機会の充実に係る権利制限規定の整備

我が国が「盲人、視覚障害者その他印刷物の判読に障害のある者が発行された著作物を利用する機会を促進するためのマラケシュ条約(通称マラケシュ条約)」に加盟したことによって、肢体不自由で本を持てないといった視覚障害以外の理由も含めた同様の困難さがある

人々も含まれることとなった。

37条	改正前	改正後
1項	点字による複製	点字による複製
2項	点字の公衆送信	点字の公衆送信
3項	視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者のために必要な方式での複製又は公衆送信	視覚障害その他の障害により視覚による表現の認識が困難な者のために必要な方式での複製又は公衆送信

(4) アーカイブの利活用促進に関する権利制限規定の整備等

「図書館等における複製等」(第31条3項)においては、国立国会図書館は絶版等資料については他館からの依頼に基づいて複製や自動公衆送信が可能であったが、今回の改正で外国の図書館等であっても政令で定めるものに該当すれば、送信等可能となった。

「美術の著作物等の展示に伴う複製等」(第47条)は、美術展等で観覧者のための小冊子の複製を許容している規定だったが、小冊子に加えてタブレット端末等の電子機器への掲載も可能としている(1項、2項)。また、展示作品情報をサムネイル画像でネット公開(3項)することも可能とした。

「著作者不明等の場合における著作物の利用」(第67条)は、既に公表された著作物の著作者が不明で、相当な努力を払っても連絡が取れないような場合、文化庁長官が定める額の補償金を供託すれば、利用可能であることを定め、裁定と呼ばれている。本改正では、国や政令で定められた団体(国等)が利用する場合には供託が不要であるとした。ここでいう政令は著作権法施行令第7条の6であり、独立行政法人、国立大学法人、地方独立行政法人、日本放送協会が含まれる。ただし、裁定を受けようとするのであれば、申請書に著作権者と連絡できない等の証拠となる資料を添えて、文化庁長官に提出する必要がある。

※4:「著作権法の一部を改正する法律(平成30年法律第30号)について」文化庁 HP http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/h30_hokaisei/

※5:「著作権法の一部を改正する法律の概要」

http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/h30_hokaisei/pdf/r1406693_01.pdf

IV. 3つ目の改正(2019(平成31)年4月1日施行)※6

最後の改正は、従来の教科用図書にデジタル教材が加えられることになったことに伴う著作権法の改正であり、著作権法上「教科用図書代替教材への掲載等」(第33条の2)が新設された。

実質デジタル教材を加えたに過ぎないが、教科用図書教材関連条文に代替教材も追加されている。

※6:「学校教育法等の一部を改正する法律(平成30年法律第39号)について」文化庁 HP http://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/gakkou_kyouikuhou/

小川 明子(おがわ・あきこ)



早稲田大学政治経済学部経済学科卒業

早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程

修了、博士(法学)

2008年 早稲田大学法学学術院助手

2017年 山口大学知的財産センター

特命准教授

2019年より現職

アンドリュー・ウォンが語る 香港の写真家のスタイル

2018年4月に開催された国際交流セミナーに登壇して、海外の写真家の活動を紹介してくれたアンドリュー・ウォン氏。写真家がどんなスタイルで仕事をしているのかは、同業者としては気になるところ。海外の写真家となればさらに興味深い。アンドリューとは、国際交流セミナーの後に香港で何度か会ううちに、オフィスでインタビューを受けてもらえることになった。彼のオフィスを訪問して、香港の写真家がどんなスタイルで仕事をしているのか、その様子をインタビューを交えて紹介する。

オフィス兼スタジオは倉庫のフロアを友人とシェア

アンドリューのオフィスは香港の郊外、葵涌(クワイチョン)にある。この辺りは古くからある倉庫街で、大型のトラックが行き来するようなところだ。彼のオフィスもそんな倉庫のワンフロアにあった。

貨物用の大きなエレベーターでオフィスのあるフロアに着くと、アンドリューの事務所「COFFEE HOUSE PHOTO」の看板が掲げられている。このワンフロアを友人とシェアしているのだと言う。シェアしている友人は、料理人と倉庫業の人など5人。いずれも同業者ではないのがユニークだ。

多くの人と1つのフロアをシェアするのは、香港では一般的なスタイルなのだろう。香港の家賃はとても高いから、広いところを借りようと思ったら、多くの人がシェアしたほうが借りやすい。カメラマン、デザイナー等々クリエイティブな人が集まって広いスペースをシェアすることは珍しくないと言う。「写真家やビデオカメラマンがシェアするのは合理的と思う」とアンドリューも語っている。

家賃はいくら?と突っ込んだ質問をすると、「正確な数字は言えないが10,000香港ドル以下(15万円程度)。もし1人で借りるとしたら、30,000~40,000香港ドル(約45~60万円)」だと言う。この広さがこの金額で使えるなら、これで十分」なのだろう。

香港の家賃は、東京以上に高い。行列ができるほど繁盛しているお店でも、高騰する家賃が払えずに閉店する

ほどだ。「友人のスタジオは契約更新時に40~50%値上げされて引っ越しざるを得なくなった。利益が40~50%アップすることはめったにないよ。だから引っ越ししてシェアするしかない。すべてのカメラマンとは言わないけど、多くの人はそうしてる。香港の写真家みんなの共通の問題だね」。

アンドリューも昨年、近くに借りていたオフィスを引き取ってこの場所に引っ越ししてきた。以前のビルは古くて狭く、使い勝手も悪かったのだそうで、今のオフィスを気に入っているのだと言う。

「ここには少なくとも5年はいるつもり。なぜなら5年契約だから。5年後にどうなってるかはわからないけどね」。

無給の撮影で人脉作りと経験を積み運をつかむ

アンドリューが写真家の活動を始めたのは2004年から。今年で15年目になる。最初は香港のエンターテインメント会社に就職し、そこでコンサートの撮影を2~3年行っていた。ところがその後半年くらい、香港の経済が落ち込んで、何も仕事がない状態が続いたのだと言う。その間はパートタイムの仕事で頑張っていたのだそうだ。「小さな会社で、ファッショショナーの写真を撮ったりしていました。40人くらいの本当に小さいイベントでした」と懐かしそうに語る。

その後、本当にラッキーだったと本人が言うように、知人の紹介でスーパースターのコンサートの仕事を受けた。それがアンディ・ラウのコンサートだ。

「5人の写真家でチームを作って2か月間、毎日彼を撮



オフィスの入り口にて。



アーティストのCD・DVDジャケット写真も撮影。共有スペースにはビリヤード台。遊び心も忘れない。



っていました、その間は無給です。でも、ここでいろいろな人と人脈ができ、経験を積むこともできました」とアンドリューは語る。「コンサートが終わってDVDがリリースされた時、ジャケット写真が自分の撮影したものだったんです。それはもう驚きました。1,000枚の写真を5人で撮れば5,000枚。30日間だったら15,000枚。そのうちの1枚ですからね。そこでキーフォトグラファーに連絡しました。あれは自分の写真だ、と。非常に驚いていましたし、感謝している」と熱く語った。

「それをきっかけに、アーティストのマネジメント事務所にポートフォリオを送って交渉しました」。セルフインポートデュース(自分で売り込み)をして、仕事を得たのだ。

香港で写真家になるのは難しいのかと聞くと、「私の知っている多くの人は、昼間は普通のオフィスワークをして、休みの日にウェディングの写真を撮ったりしている」と教えてくれた。「香港にはそんなパートタイムのカメラマンはものすごくたくさんいる。フルタイムのカメラマンに会うと逆にびっくりする。どうやって生き残ってきたんだろうと思う」とアンドリューが感じるほど、香港で写真家として生きしていくのは厳しいようだ。

「2005年からは、フルタイムで撮影の仕事ができるようになって、香港で行われるインターナショナルなコンサートも撮影できるようになりました。年中撮影漬けです。当時は、ほとんど香港コロシアムに住んでいたようなものでした(笑)。そこで、来香したレディ・ガガやセリーヌ・ディオンを撮影できるチャンスを得ました」。充実した2年間だったと言うが、これ以上同じことはできないな、と感じたのだとアンドリューは言う。

もっと自分の仕事をコントロールしたい。スタジオを持ちたいと思ったアンドリューは、コンサートの仕事を続ける一方で広告の仕事も手がけるようになる。とは言え、アーティストを撮ることは、非常に興味深い。特に自分の好きなアーティストを撮るのは最高だと語る。レディ・ガガやセリーヌ・ディオンといった著名なアーティストはもちろんだが、新しいアーティストに出会うことも刺激的なのだそうだ。

広告はモーメント、コンサートはエモーション

広告の仕事の比率はどんどん高まっていて、去年～今



香港のトップスターや来香する海外アーティストを撮影。左からアンディ・ラウ、レディ・ガガ、SEKAI NO OWARI。 (C) Andrew Wong

年は50%が広告の仕事なのだそうだ。広告はモーメント(瞬間)を撮る、ライティングとカメラアングルのコンビネーションだと語る。自分のアイデアが入れられるのが広告の撮影で、コンサートはエモーション(感情)を撮るというのがアンドリューの考え方だ。

香港にも写真の学校はあるのだそうで、撮影の基礎技術とか、理論を学ぶことができると言う。しかし、だからといって写真がうまくなったり、写真家になれるわけではないとも語る。「自分はどこでも、技術は学んでない。どうやって撮影するかは、自分で学んだ。学生はミスっても、決して怒られない。でも、プロはどんなハプニングにも対応しないといけない。どんな時でも、結果を出すことがプロだと思っている」。

またアンドリューは、「国際交流セミナーで紹介した新紙幣の撮影は非常に誇りに思っています。歴史的なプロジェクトに関われたと思っている。観光客が香港に来て両替をする。その時初めて目にするのが自分の写真なわけだから。家族も非常に名誉なことだと言ってるよ。あの撮影には、いろいろな可能性を考えて、準備に2～3ヶ月かけた」。お金だからもちろん、様々な法律についても調べる必要があったそうだ。

最近は、香港以外で撮影することも増えている。仕事で訪れることが多いのは、日本の福岡と中国の北京。福岡では、日本人の友達が小さなスタジオを持ってるのだろう。北京には使えるスタジオが2つある。このスタジオは香港より家賃は安く広いのだろう。「北京には、年に2～3回撮影で訪れる。広さが広いから、香港より使い勝手がいい。日本では公園とか郊外のアウトドアで撮影することが多いよ」とアンドリューは言う。「香港で40年暮らしているので、違うフィールドにも行ってみたいという願望がある。でも、旅行者視点の観光写真は嫌だし、嫌いだ。人が暮らしていて働いている、生き生きしているところがいい。そういうところはクール(魅力的)だよね」。

今後どんな仕事をしたいのかと聞くと、「できれば雑誌の仕事がしたいと思っている。なぜなら、人を撮ることが好きだから。犬とか猫も撮ってみたいけど、ポートレートにフォーカスしたい」と語ってくれた。彼が日本の雑誌の紙面を飾る時が来るのか、楽しみに待ちたい。

(記・撮影／出版広報委員：柴田 誠)



新紙幣の図柄の元になる写真を手掛けた。

2019年度「報道写真論」講座報告

主催：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2011年度から始まった専修大学「ジャーナリズム学科(旧：人文・ジャーナリズム学科、担当：専修大学教授・山田健太)」の「報道写真論」の講義に、2019年度は小松健一と前川貴行の両氏に講師をお願いした。

専修大学のジャーナリズム学科開設趣旨は「学生たちの真実を見抜く目を育て、批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者に実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で、何が起きているかを理解してもらうことを」方針としている。この講座には2011年度は桑原史成氏、2012年度は長倉洋海、英伸三各氏、2013年度は宮嶋茂樹、樋口健二各氏、2014年度は大石芳野、山本皓一各氏、2015年度は清水哲朗、石川文洋各氏、2016年度は桃井和馬、石川梵の各氏、2017年度は宇井眞紀子、広河隆一各氏、2018年度は公文健太郎、竹沢うるま両氏を派遣し講義を行った。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

●小松健一

2019年4月9日～5月28日(7回)

受講生は2～4年生で、例年の実績で約70人程ということで当初は100人規模の教室で始めたが、約120人になった第4回目の講義から大教室に急遽変更した。講義内容については、次のようなカリキュラムとした。

第1回 写真の持つ魅力と特性

第2回 すぐれた写真一テーマとモチーフと写真表現の弱点

第3回 写真と人権—著作権・肖像権および個人情報保護法とプライバシー

第4回 『民族曼陀羅 中國大陸』の作品を中心に民族の多様性と共生を考える

第5回 『雲上の神々—ムスタン・ドルバ』、『ヒマラヤ古寺巡礼』の作品を中心に自然と人間との共生、宗教の役割について学ぶ

第6回 写真の持つ普遍的な記録性の価値について 原爆写真から考察する

第7回 第6回までに学んだことを踏まえて受講生自身が撮影した作品の合評

僕は次の3点を課題として出した ①300点以上撮る ②その中から3点をセレクトする。内1点は必ず人物を撮ったものを入れる ③それぞれの作品にタイトルを付け、撮影場所、撮影年月日を入れる

毎回講義が終了するごとにリアクションペーパーを書いて提出しても



キャンパスで講義中の小松健一氏



らった。用紙いっぱいに千字以上書く者もいれば百字程度の人もいたが、総じてみな熱意が感じられた。写真を学ぶ者に読ませたいと思うユニークな視点からの意見も少なくなかった。

「写真というメディアが伝える情報や可能性について学べた授業だった」、「今やスマートフォンやファーチャーフォンには携帯カメラが必ずついていて、日常の何気ない風景や友達とだべっている瞬間をカメラに収めたりと、私たちの多くの生活の『一部』にまでなっています。“写真”的未来は明るいです。私も日常から写真のことをより考えながら日々を過ごしていきたい。楽しい講義をありがとうございました」、「何を焦点に置くか、焦点に置いたものを背景に。逆に背景だったものに焦点を当てるだけで、見える世界が違うことや

小松 健一(こまつ・けんいち)

1953年、岡山県に生まれ、群馬県で育つ。新聞記者などを経てフリーの写真家に。『雲上の神々—ムスタン・ドルバ』で1999年第2回飯田市藤本四八写真文化賞、『ヒマラヤ古寺巡礼』で2005年日本写真協会賞年度賞、2016年第59回日本ジャーナリスト会議JCJ賞など受賞。個展、著書は国内外で多数。近著に27年間取材した『民族曼陀羅 中國大陸』がある。作品収蔵は、中国四川大学、飯田市美術博物館、伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館、(株)ゴールドウィンザ・ノース・フェイス他。公益社団法人日本写真家協会会員

訴える内容が全く違ってくるという写真というメディアは、私の身の回りにたくさんあっても意外と気付かなかった。初めて講義を聞いた時に鳥肌が立ち驚愕したことは良い想い出です」…などの学生の声があった。

僕は、受講生たちが書いた感想を毎回じっくりと読ませてもらい写真家としての処方をあらためて考えさせられる思いがした。まだ若いけれど百数十人、それぞれの思索、生き方がそこにはあった。中国や韓国からの留学生もいた。

今回このような機会を与えてくれた専修大学と協会に心からの謝意を表したい。

●前川貴行

2019年6月4日～7月23日(7回)

2019年6月から7月にかけて、専修大学文学部ジャーナリスト学科において百数十名の学生を相手に計7回の講義を行った。

講義の進め方を事前に考えたとき、最も馴染みのあるスライドトーク形式でのぞむことにした。

初回と第2回目は様々な取材での作品と現場のスナップを紹介し、それぞれの現場の様子や段取りを説明し、撮影に対する意気込みや、その時に抱いていた思いなどを交えて話をした。学生には講義の感想と意見を提出してもらった。

第3回目は、大型類人猿にテーマを絞り講義を行った。

世界に生息する大型類人猿4種、ゴリラ、チンパンジー、ボノボ、オランウータンそれぞれの取材を通し、どのような考え方で行程を進めたか、そして一冊の写真集としてまとめるまでの糸余曲折などを語った。

第4回目は昨年開催した写真展「creation:」と同名の写真集をテーマとした。

多様な生き物を登場させた「creation:」だが、それぞれの生き物が持つ独特的な個性や美しさを強く意識し、宇宙そして我が地球が生み出した唯一無二な生き物たちと、全身全霊で対峙することにより見えてくる世界をコンセプトとした。

一つの生命と向き合う時、自分の意識の持ちようで、色々な関わり方や撮影の切り口が見えてくるというもの。

第5回目はフォトエッセイ「動物写真家」という仕事」を中心、幼年期から青年期、二十代半ばになってなぜ突然写真家を目指したか



キャンパスで講義中の前川貴行氏



ということから、現在の仕事の進め方に至るまで、順を追つて伝えていった。

第6回目は写真集『WILD SOUL 極北の生命』を取り上げた。これは北米に生息するハクトウワシをまとめたもので、約10年の取材期間中におこった様々な出来事などを中心に話を進めた。

そして最終第7回目の前半は、学生たちに事前にチケットを渡して観てもらった世界報道写真展2019年(東京都写真美術館6月8日～8月4日)について。

前週に提出してもらった全員のレポートを読み、その中から講義中に十数名を指名してディスカッションを行った。選ぶ写真も感想もみな様々で、学生たちの考えを直接伝えてもらえたのは、私にとっても大きな収穫となった。

後半では写真絵本『いのしし』の読み聞かせを行った。大学生に対して絵本の読み聞かせはどうだろうと思ったが、それもまた面白いと思ったので行ってみた。

講義全日程を通して、学生たちの反応は様々で、思いもよらない部分に反応したり、共感することも多々見受けられた。講義中はみな物静かな態度で、打っても響かない印象ではあったが、提出されたレポートを読むと、みなそれぞれしっかりと話を聞いて意見を述べているので、多少安心した。

私の考え方として、写真の技術やノウハウよりも、仕事として取り組む姿勢を伝えたかった。学生たちには、わずかでも何かを感じ取ってもらえたならば、講義を受け持った甲斐があると思う。

(写真提供／専修大学、眞月美雨 構成／小池良幸)

前川 貴行(まえかわ・たかゆき)

1969年、東京都生まれ。動物写真家。エンジニアとしてコンピューター関連会社に勤務した後、26歳の頃から独学で写真を始める。97年より動物写真家・田中光常氏の助手をつとめ、2000年よりフリーの動物写真家としての活動を開始。日本、北米、アフリカ、アジア、そして近年は中米、オセアニアにもそのフィールドを広げ、野生動物の生きる姿をテーマに撮影に取り組み、雑誌、写真集、写真展など、多くのメディアでその作品を発表している。2008年日本写真協会賞新人賞受賞。第1回日経ナルギオグラフィック写真賞グランプリ。公益社団法人日本写真家協会会員。

2018年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告

写真の楽しさ、面白さを伝える

-協力：富士フィルムイメージングシステムズ株-

2005(平成17)年より、毎年レンズ付きフィルムカメラによる小学生を対象とした「写真学習プログラム」を、小学校35クラスで実施している。

デジタルカメラは勿論のこと携帯電話の普及によって手軽に写真が撮れ、インターネットでの情報提供のツールとして写真が活用されているのが現状である。写真の原点ともいえるフィルムによる写真撮影が大幅に減少するなか、あえてフィルムを使っての「写真学習プログラム」は、単に写ったという喜びだけでなく、児童だからこそ必要とされている「事物の観察、物事を注意深く見る、凝視することの大切さ」を写真を通じて会得し体験してもらうことに意義を見いだしている。このことは写真という優れた記録媒体を使っての「記録・表現することの意味」を理解し、家庭や社会で広く写真を活用してもらおうとの願いがある。

「写真学習プログラム」は、協会の教育事業として14年間に延べ676人の会員による指導で、23,490人の児童に、「写真学習プログラム」の授業を実施して、「写真への興味を喚起すること」を体験してもらっている。

また、多くの方々にこの児童たちの作品を見ていただこうと、「写真学習プログラム」参加児童の作品を特別企画「PHOTO IS 小学生の眼」として、富士フィルム(株)・富士フィルムイメージングシステムズ(株)が主催する「PHOTO IS」想いをつなぐ「50,000人の写真展」で展示している。写真愛好家や一般客からは、展示された小学生の作品をみて、素直で力強い感性だと驚きの声が寄せられていた。



【2018年4月～2019年3月実施校】

No.	実施校	県名
1	鳥取市立遷喬小学校 4年生	鳥取県
2	鳥取市立美和小学校 4年生	鳥取県
3	神戸市立六甲山小学校 4～6年生	兵庫県
4	水戸市立妻里小学校 6年生	茨城県
5	成田高等学校付属小学校 5年生	千葉県
6	南城市立久高小中学校 4～5年生	沖縄県
7	水戸市立下大野小学校 4～6年生	茨城県
8	北見市立留辺蘂小学校 6年生	北海道
9	北見市立留辺蘂小学校 5年生	北海道
10	長岡市立山古志小学校 4～6年生	新潟県
11	豊橋市立松山小学校 6年1組	愛知県
12	豊橋市立松山小学校 6年2組	愛知県
13	丹波市立久下小学校 5年生	兵庫県
14	丹波市立久下小学校 6年生	兵庫県
15	平群町立平群南小学校 4年生	奈良県
16	日野市立東光寺小学校 6年2組	東京都
17	日野市立東光寺小学校 6年1組	東京都
18	吉野川市立西麻植小学校 6年生	徳島県

No.	実施校	県名
19	新座市立陣屋小学校 5年 A組	埼玉県
20	新座市立陣屋小学校 5年 B組	埼玉県
21	君津市立大和田小学校 6年1組	千葉県
22	君津市立大和田小学校 6年2組	千葉県
23	習志野市立向山小学校 4年1組	千葉県
24	習志野市立向山小学校 4年2組	千葉県
25	仙台市適応指導センター児遊の杜 6年生	宮城県
26	佐倉市立寺崎小学校 5年1組	千葉県
27	佐倉市立寺崎小学校 5年2組	千葉県
28	みやま市立上庄小学校 5年生	福岡県
29	みやま市立下庄小学校 5年1組	福岡県
30	みやま市立下庄小学校 5年2組	福岡県
31	みやま市立下庄小学校 6年1組	福岡県
32	みやま市立下庄小学校 6年2組	福岡県
33	宇佐市立四日市北小学校 6年1組	大分県
34	宇佐市立四日市北小学校 6年2組	大分県
35	成田高等学校付属小学校 6年生	千葉県



[2018年度実施校児童の作品から]



鳥取市立遷喬小学校児童の作品



鳥取市立美和小学校児童の作品



神戸市立六甲山小学校児童の作品



水戸市立妻里小学校児童の作品



水戸市立下大野小学校児童の作品



長岡市立山古志小学校児童の作品



豊橋市立松山小学校児童の作品



丹波市立久下小学校児童の作品



平群町立平群南小学校児童の作品



日野市立東光寺小学校児童の作品



吉野川市立西麻植小学校児童の作品



新座市立陣屋小学校児童の作品



君津市立大和田小学校児童の作品



宇佐市立四日市北小学校児童の作品



成田高等学校付属小学校児童の作品

2019年度高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」

写真力を伝える、極める

協力：(株)ニコンイメージングジャパン

全国高等学校文化連盟写真部と共に開催の2019年度第13回高校写真部顧問を対象とした「デジタル写真講座」を、7月6日岩手、7月13日福岡で開催した。実施に当たっては、(株)ニコンイメージングジャパンの協力で行った。

いま、写真撮影の多くはデジタルカメラの時代。デジタルフォトをどう制作するかという点を技術面も含めて指導することが必要で、顧問の先生方もこの流れに遅れまいとカメラの仕組みや使い方等の技術を習得しようと約7時間の講習を熱心に体験された。

1回目：2019年7月6日（土）

会場：岩手県滝沢市 岩手県立盛岡農業高等学校

講師：松本徳彦

補助：小池聰、前田徹

2019年度の高文連高等学校写真部顧問を対象としたデジタルカメラ撮影プリント技法講習会は、十年余にわたりて協賛会社エプソンとニコンイメージングジャパン両社の協力によって開催されてきたが、本年からエプソン社の都合で参加できない旨の通知を受け、開催の継続が危ぶまれたが、ニコンの撮影機材協力だけでも行おうとの提案で、継続することが決まり、岩手県と福岡県での開催に踏み切った。

その先陣が7月6日（土）岩手県滝沢市の県立岩手農業高校で始まった。受講者19名。講師は東京から副会長の松本が、現地では小池聰、前田徹両会員に協力していただきことにした。(株)ニコンイメージングジャパンからはD750が貸し出され、中島克芳氏からカメラの操作説明をしてもらう。

受講された教諭の方々の技量は初級者から、何年も指導してきたという方まで様々だったが、便利的に十人ずつの二組体制で撮影を実施した。岩手県立盛岡農業高校は創立140年を迎える歴史的な名門校で、寮生を含め600名。東京ドーム約15倍分の広大なキャンパスに農業、畜産、園芸、食品、人間科学、環境と幅広い教育で有名。千葉章浩教諭の案内で、乳牛や豚などの飼育所で、畑に出れば案山子と戯れるなど、変化に富んだ被写体に感動の連続。モデル2名を招いての撮影も参加者には好評だった。



カメラの操作技法の説明（岩手会場、撮影：前田徹）

昼食後、撮影作品講評では、パソコンにデータをコピーし、プロジェクターで投影。初めての方法でもあったため作品選択、メディアからパソコンへのコピーに時間的ロスが多くかった。私の著作権や肖像権に関する講話には、生徒たちが気にする肖像権に关心が強かった。

質疑応答もスナップ時のマナーや人物との対話の必要性に耳を傾けておられた。撮らせてもらっているのだという感謝の気持ち、お礼の意味を込めた会釈やありがとうの声掛けにうなづかれていた。今回はプリント技術ができなかったが、プリント技術の指導も再開してほしいとの要望を伺った。

小池、前田会員の丁寧な指導に感謝の声が相次いだ。地元での活躍が期待される。

（記／松本徳彦）



学校内の牛舎で撮影（岩手会場、撮影：前田徹）



松本副会長による「著作権・肖像権に関する」講話（岩手会場、撮影：前田徹）



(株)ニコンイメージングジャパン古川氏によるカメラの説明（福岡会場、撮影：平川幸児）

2回目：2019年7月13日（土）

会 場：福岡県福岡市 福岡大学附属若葉高等学校

講 師：山口勝廣

補 助：森下東樹、平川幸児

講習会場は福岡市の中心部で、北京オリンピック女子ソフトボールで日本チームを優勝に導いた上野由岐子さんが卒業生の福岡大学附属若葉高等学校が会議室を提供くださり、11名が参加して行われた。

撮影実習は学校近くの大濠公園で在校生や卒業生のモデル撮影を予定していたが、梅雨前線が北上し福岡市内はあいにく雨模様となつたため、急遽、変更して、昭和の良き時代の面影を残す、地元に根付いた住民の台所「唐人町商店街」のアーケードを行った。ここもシャッターの閉まった店が目立つ中、古いままで頑張り続ける店舗と新しいアイデアで勝負する店舗とコントラストのある市場風景を舞台にした撮影だった。

開会に際し今回の世話役をした県立筑紫ヶ丘高校の川野祐一教諭の挨拶のあと、今回の講師担当のJPS山口勝廣専務理事が挨拶して始まった。参加者には(株)ニコン社製の一眼レフデジタルカメラD750が貸与されニコンイメージングジャパンの古川浩樹氏によるカメラの設定、取り扱い方の説明が丁寧に行われた後、歩いて10分ほど唐人町商店街に移動し11時30分までの約1時間半近い撮影実技に入った。参加者は傘を片手に好みの被写体を求めて歩きはじめた。



唐人町商店街で魚屋さんを撮影（福岡会場、撮影：平川幸児）

山口理事の最初の挨拶の中で、肖像権の話があつたこともあり、参加した先生方は、被写体となる人たちとのコミュニケーションをこまめに取り合いながら撮影。店先にワゴンを出し弁当を売るご婦人。ピクピク跳ねる地魚のカレイに加えてノドグロやキンキの並ぶ魚屋さん。店内でピアノを弾いて見せるステーキ屋のオヤジさん。狭い間口の店先で裸電球の下でウナギを焼いて売るお婆ちゃんらと笑い声の出る会話を交わして、親近感のある撮影が印象的だった。

会場に戻った参加者たちは昼食を済ませた後、各々、撮影した写真をパソコンやカメラの液晶で確認し一人5コマを選択した。前回はエプソン社の協力で選択したコマをプリントしていたが今回ではデータをパソコンに取り込み、大型テレビで再生した。山口理事が被写体選びの素晴らしさ、構図の良さ等を一コマ一コマ細かく丁寧に講評した。

参加した先生方は新任の20代からベテランの50代まで幅広かったが、SNS時代を象徴して“写真映え”を意識した視点での作品作り。市場で働く生き生きとした人々の表情を切り取った作品が多いのが印象的だった。山口理事の著作権、肖像権の講話では興味深く聞き入る先生方。著作権に関する質問が集中した。

（記／森下東樹）



唐人町商店街を散策（福岡会場、撮影：平川幸児）



山口理事による作品の講評（福岡会場、撮影：平川幸児）

凸版印刷

第14回西洋美術振興財団賞「文化振興賞」を受賞

西洋美術振興財団賞は、過去2年間に開催された西洋美術に関する展覧会の中から、西洋美術の理解と文化交流の促進、西洋美術研究発展に寄与のあった優れた活動に対し表彰を行い、さらなる振興を図ることを目的としています。

このたび、凸版印刷が2000年に印刷博物館を開設し、高レベルの活動を継続することにより、わが国の西洋美術研究に貢献した功績が評価されました。

特に2018年に開催した企画展「天文学と印刷 - 新たな世界像を求めて」では、16世紀に起ったコペルニクスの地動説と印刷術の登場という、革命的な偉業を巧みに結び付けて、科学と技術による新たな世界像の構築を明快かつ実証的に提示し、多くの来館者を集めましたといふ活動成果が評価されました。

その他にも、東京国立博物館内にTNM&TOPPANミュージアムシアターを設置するなど、高いレベルでの文化貢献活動を継続することで、わが国の芸術文化に意欲的に貢献してきたことなども理由として挙げられます。

凸版印刷では印刷博物館を中心に、印刷文化や印刷表現について独自の視点から調査・研究を継続し、印刷文化の構築を目指します。そして印刷の価値と可能性を追求し、さらには印刷の持つ普遍性を後世に伝えていくことをミッションとして活動を継続していきます。



【印刷博物館】

東京都文京区水道1丁目3番3号 トッパン小石川ビル
開館時間: 10:00 ~ 18:00 (入場は 17:30まで)
休館日: 毎週月曜日(ただし祝日の場合は翌日)

【問い合わせ先】

凸版印刷株式会社
担当: 広報部 佐藤圭一、古田順
TEL: 03-3835-5636
メール: kouhou@toppan.co.jp
<https://www.toppan.co.jp/>

ソニー

有効約6100万画素の新開発35mmフルサイズCMOSイメージセンサーを搭載したミラーレス一眼カメラ「α 7R IV」を発売

「α 7R IV」はα史上最高の解像性能^{*1}と豊かな階調性を実現しながら、高速・高追従AF性能、AF/AE追従最高約10コマ/秒^{*2}の高速連写性能を小型軽量ボディに収めました。ワイヤレスでのPCリモート(テザー)撮影^{*3}、高速データ処理・転送への対応に加え、ピントの山をつかみやすい高精細なビューファインダーUXGA(Ultra-XGA OLED) Tru-FinderTMや握りやすさを追求したグリップ形状など、プロのワークフローを支えます。スタジオでのポートレート撮影や精緻な風景撮影などの幅広い撮影シーンに対応し、映像表現の可能性を広げます。

※1: 35mm フルサイズセンサー搭載デジタルカメラとして、2019年7月17日広報発表時点。
ソニー調べ。

※2: 連続撮影モード「Hi+」時最高約10コマ/秒、連続撮影モード「Hi」時最高約8コマ/秒の高速連写が可能。装着レンズによってソフトウェアアップデートが必要になる場合があります。

※3: Imaging Edge Remote Ver. 2.0 以降が必要です。

【詳しい製品情報】

<https://www.sony.jp/ichigan/products/ILCE-7RM4/>

【問い合わせ先】

買い物相談窓口
TEL: 0120-777-886(フリーダイヤル)
TEL: 050-3754-9555(携帯電話・PHS・一部のIP電話などフリーダイヤルがご利用になれない場合)
月~金: 9:00 ~ 18:00 土日祝: 9:00 ~ 17:00



【JPS会員様からのその他の問い合わせ先】

ソニーイメージングプロダクツ&ソリューションズ
ヨンズ(株)
担当: 永井敏雄
電話: 090-7102-1017
メール: Toshio.Nagai@sony.com

これまでに発売してきた光学レンズの中で最も画角が広く、視覚をはるかに超えたワイド域を軽快に撮影でき、空間を生かす演出写真に最適です。
【DISTORTION FREE: 压倒的な湾曲抑制力】

SAMYANG社の設計技術を集結して、世界最大の画角と同時に、圧倒的な湾曲抑制力が実現できました。11群18枚のレンズで構成されたこのレンズは、非球面レンズ3枚、低分散レンズ3枚、高屈折レンズ1枚の特殊レンズをふんだんに使用して、色収差やフレア、湾曲などさまざまな光学収差を大幅に抑え、レンズの中心から周辺部まで、鮮明な画質と色合いを実現しました。

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー
担当: 田原栄一
TEL: 03-6840-2970
FAX: 03-6840-2962
メール: etahara@kenko-tokina.co.jp
<https://www.kenko-tokina.co.jp/>

クレヴィス

特別展「木村伊兵衛 パリ残像」10月26日(土)~12月8日(日)稲沢市荻須記念美術館

木村が日本人写真家として戦後ヨーロッパを初めて取材した1954年および55年に撮影されたフランス、パリの作品を展示します。木村はパリで、アンリ・カルティエ=ブレッソンやロベール・ドノーラと交流を深め、裏通りや市場などの生活の場を撮影しました。当時、一般的には普及していなかったカラーフィルムで写されたこれらの作品は、戦後間もないパリに生きる人々のざわめきや温もりまで詩情豊かに伝えています。常設展の荻須高徳作品をあわせてご覧いただくことで、パリの素顔を体感していただけるものとして企画しました。ぜひ、ご覧ください。

開館時間: 9:30 ~ 17:00
会期中休館日: 日曜日(ただし11月4日(月・祝)は開館)、11月5日(火)
観覧料: 一般 700円ほか

●講演会「木村伊兵衛のパリを語る」

講師: 田沼武能
日時: 10月26日(土)10:30 ~ 12:00
※先着40名、申込不要、参加無料。イベントに関するお問い合わせは、荻須記念美術館 TEL: 0587-23-3300まで。

【問い合わせ先】

担当: 木村

TEL : 03-6427-2806
メール : info@crevis.jp
<http://www.crevis.jp/>



キヤノン

光学ファインダーによる本格的な撮影を実現 高速連写と高画質を両立したデジタル一眼レフカメラ「EOS 90D」を発売

光学ファインダーによる本格的な写真表現を求めるユーザーのニーズに応えるデジタル一眼レフカメラ「EOS 90D」を発売します。

新開発のCMOSセンサーと映像エンジンDIGIC 8の組み合わせにより、キヤノンのAPS-CサイズCMOSセンサー搭載のデジタルカメラにおいて最高レベルの画質を実現しています。また、高速連写やファインダー撮影時の顔認識、動画撮影などの性能も向上しており、快適な撮影を実現しています。

【最高約10コマ/秒の高速連写】



視野率約100%の光学ファインダーにより、スポーツや動物など動きの速い被写体を快適に撮影できます。

【約3250万画素CMOSセンサーと映像エンジンDIGIC 8による高画質】

有効画素数約3250万画素のCMOSセンサーと、映像エンジンDIGIC 8の組み合わせにより、ノイズの少ない高い解像感を実現しています。

【動体撮影など幅広いシーンに対応する高速AF】

「デュアルピクセルCMOS AF」を搭載しており、ライブビュー撮影においても、高速・高精度な合焦が可能です。加えて、被写体の瞳を検知してフォーカスを合わせる「瞳AF」が、ライブビュー撮影時、サーボAF動画サーボAF時ににおいても使用可能です。

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社
キヤノンお客様相談センター
TEL : 050-555-90002
<https://www.canon.jp>

清里フォトアートミュージアム

山本昌男「手中一滴」展
10月5日(土)～12月8日(日)

山本昌男(1957～)は、90年代より欧米を拠点に活動し、継続して国際的な評価を受けている写真家です。

小さなサイズの写真による実験的なインスタレーション作品「空の箱」・「中空」でデビューし、その後一点一点の写真が深い心の対話を促す作風へと変化していきます。その根底には「人間は自然のほんの一部分であり、一体化した存在」という理念があり、日常誰もが目に見える自然の有り様や、見過ごされそうな小さなものを大切にすくいあげる作品を発表します。独特的な質感を湛えたモノクロプリントは、繊細さと緊張感を孕んだ美へと醸造されています。近作の「盆栽」



山本昌男(川 #1637)
2015年

シリーズは、小さな鉢の中で人の手と水によってのみ生きる盆栽を、八ヶ岳などの雄大な風景の中で撮影しています。

展覧会のタイトル「手中一滴」とは、山本による造語で、「一滴の露にも宇宙が宿る」という禅の教えに基づいています。山本の写真も盆栽も、人が自然と向き合うなかに、人の手から絞り出されるように生まれた作品です。そこには人と作品と自然が織りなす究極の美を追求した世界があります。

本展では、デビュー作から最新作まで約170点を展示し、自然の神秘性を追いつめた山本の30年の軌跡をたどります。

【問い合わせ先】

清里フォトアートミュージアム
山梨県北杜市高根町清里 3545-1222
担当：綱
TEL : 0551-48-5599
休館日：毎週火曜日
入館料・アクセスなど詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。
<https://www.kmopa.com>

ニコン

デジタル一眼レフカメラ「ニコン D6」および望遠ズームレンズ「AF-S NIKKOR 120-300mm f/2.8E FL ED SR VR」の開発を発表

株式会社ニコンは、プロフェッショナルモデルとなる、デジタル一眼レフカメラ「ニコン D6」および、ニコンFXフォーマット対応の望遠ズームレンズ「AF-S NIKKOR 120-300mm f/2.8E FL ED SR VR」の開発を進めています。フラッグシップモデルであるD-桁シリーズは、厳しい状況下においても最高のパフォーマンスを求めるプロフェッショナルフォトグラファーのニーズに応えるべく、ニコンが長年のカメラ開発で培ったトップレベルの技術・ノウハウを結集し進化し続けてきました。「D6」は、その最新機種として開発を行っています。さらに「AF-S NIKKOR 120-300mm f/2.8E FL ED SR VR」は、プロフェッショナルフォトグラファーのスポーツ撮影などをより一層強力にサポートします。ニコンは映像表現の可能性をさらに追求し、デジタル一眼レフカメラとミラーレスカメラの両システムと豊富なレンズラインアップをもって、映像文化をリードしていきます。

※本製品の発売時期・発売価格・仕様などの詳細は未定です。



【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン

【製品に関する問い合わせ先】

ニコンカスタマーサポートセンター ナビダイヤル
TEL: 0570-02-8000

<https://www.nikon-image.com>

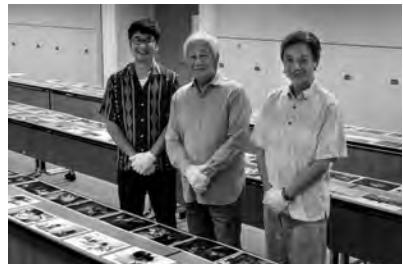
(構成／出版広報委員：川上卓也)

「賛助会員トピックス」頁への寄稿ご案内

賛助会員の皆様には、会報に「賛助会員のページ」を設け、トピックスやお知らせなどの記事を掲載しています。貴社のトピックスやお知らせなどがございましたら、紙面の都合上あまり多くの文字数はとれませんが、貴社のニュース並びにお知らせなどをご寄稿下さいますようご案内申し上げます。

2019年第15回「名取洋之助写真賞」決まる

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している35歳までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」の第15回選考会を、過日、飯沢耕太郎(写真評論家)、清水哲朗(写真家・JPS会員)、野町和嘉(写真家・JPS会長)の3氏によって行いました。応募はプロ写真家から大学在学中の学生までの33名35作品。男性24人、女性9人。カラー29作品、モノクロ6作品で、1組30点の組写真を厳正に審査し、最終協議の結果「名取洋之助写真賞」に和田拓海「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」と「名取洋之助写真賞奨励賞」に藤本いきる「おじりなりてい」の受賞が決まりました。



○最終選考候補者

- ・準「周りの人」 藤本いきる「おじりなりてい」
- ・川嶋 久人「もう『アッサラム アレイクム』とは挨拶できない 中国新疆ウイグル自治区 Before and After」
- ・佐藤 好起「僕たちは空につつまれる。」 鄧 楠「抗白家族」
- ・和田 拓海「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」 佐藤正純「Fitz traverse」

○最終選考通過者

- 和田 拓海 「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」(カラー30点)
藤本 いきる 「おじりなりてい」(カラー30点)

■ 2019年 第15回「名取洋之助写真賞」受賞



大学在学中、単身カナダに渡り、路上生活者を撮影したことをきっかけに写真家を志す。
以来、独学で写真を学ぶ。

2018年 International Photography Awards (IPA) 一般ニュース部門第1位。
第43回「視点」優秀賞受賞。

2019年 Moscow International Foto Awards (MIFA) 環境部門 金賞。
シエナ国際写真賞 ドキュメンタリー & フォトジャーナリズム部門 ファイナリスト他受賞多数。

現在、主に貧困や児童労働、難民問題などをテーマにフリーランスフォトグラファーとして活動中。国際ジャーナリスト連盟(IFJ)メンバー。SOPA Images (香港)所属。千葉県在住。

受賞作品 「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」(カラー30点)

作品について バングラデシュの首都ダッカを流れるブリゴンガ川の川岸では、世界で解体される船の多くが処理されている。そこで働く労働者はリスクと隣り合わせにおり、特に子どもの労働は問題だと作者は考える。そのことに关心を持って疑問を投げかけることにより、世界を豊かなものにできると信じ、撮影した作品。

受賞者のことば この度、名取洋之助写真賞を頂くことができ大変光栄に思います。私の写真によって、過酷な環境に生きる彼らの存在を少しでも知るきっかけになればと願っています。いつの時代も子どもは“宝”です。私一人の力では問題を解決することはできません。しかし、それぞれの立場にある人が協力し合えば、決して解決できない問題はないと私は信じています。これからも、一人でも多くの人に写真を通して伝えられるように精進して参ります。

■ 2019年 第15回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



幼い頃、身近な人の死を次々に経験。両親が記念に撮影していたビデオや写真を見て、鮮明に存在する命の姿に刺激を受け記録することに興味を抱く。

2009年 ビジュアルアーツ専門学校・大阪 写真学科 卒業
2007年～2017年「おじりなりてい」撮影
2019年 第84回香川県美術展覧会 記念展新人賞 受賞
活きる芸術を模索しながら、「ikiru art」にて活動。香川県在住。

受賞作品 「おじりなりつい」(カラー30点)

作品について 写真学校時代の友人・青木昭さんをモデルにした作品。青木さんは定年退職後、写真を学び始めた。このタイトルは青木さんが「オリジナリティ」を言い間違えたことに由来する。家族を失い、本人には闘病が発覚する。発病前よりも精力的に写真を撮り生きて逝った青木さんに捧げた作品。

受賞者のことば 受賞の知らせを頂き、青木さんの顔が浮かびました。彼は自死遺族という立場に置かれながらも、懸命に生きる姿をありのまま見せることで、社会貢献になればと願っていました。青木さんを元気にしたい気持ちで撮影していたつもりでしたが、人生は突然の連続。どんなに苦しくても、この世界は捨てたものじゃないと、私のほうも元気づけられた10年間でした。本賞を、青木さんが歩まれた人生に捧げます。ありがとうございました。

2019年 第15回「名取洋之助写真賞」総評

野町 和嘉(写真家・公益社団法人日本写真家協会会長)

名取洋之助写真賞の選考会には過去2度立ち合ってきたが、今回初めて審査員として作品と向き合うことになった。

昨年、一昨年と比べて、今回はクオリティー的にも充実しており、発表舞台も限られ厳しい環境におけるにもかかわらず、ドキュメンタリーを志向する若手写真家たちの、気迫と熱気に触れ刺激をもらった貴重な時間であった。

名取賞受賞作、和田拓海「SHIPPYARD～翼の折れた天使たち」は、過去に何度も撮られているバングラデシュの廃船解体現場で、児童労働に焦点を絞り肉薄したアプローチが訴求力を發揮した。子どもたちとの距離感、空間描写、どのショットも申し分のないカメラワークである。奨励賞の藤本いきる「おじりなりてい」は、家族に先立たれ天涯孤独となったあげくに末期ガンに罹り、自らの死と向き合う老写真家の日々を、友人として、ときにユーモア溢れる視点で“いのち”を見つめ淡々と撮りきった優れたドキュメントである。ただ挿入された風景写真にもう少し配慮がほしかった。



飯沢 耕太郎(写真評論家)

第10回目から名取洋之助写真賞の選考をしているのだが、今年が一番充実した内容だったと思う。最終選考に残った作品は、どれも見所があり、可能性を感じることができた。

その中で総合的に最も評価が高かったのが、和田拓海さんの「SHIPPYARD～翼の折れた天使たち」だった。バングラデシュの首都、ダッカで船舶の解体・修復業に従事する労働者たちを、長期にわたって取材した労作である。的確なカメラワーク、写真の選択や構成の巧みさはもちろんだが、そこで危険な作業に従事する子どもたちにスポットを当てたことが成功した。和田さんはカナダで路上生活者の撮影をきっかけに写真家を志す。写真を独学で学び、国際的なフォト・ジャーナリストとして活動している。次はぜひ、日本の社会問題に眼を向けたドキュメンタリーにも取り組ん



でもらいたい。

奨励賞を受賞した藤本いきるさんの「おじりなりてい」は、「切実さ」という点においては群を抜いた作品だった。写真学校とともに学んだ年上の友の闘病生活を間近な視点で撮影し続け、その最期までを看取っており、一枚一枚の写真に説得力がある。このような、若い世代の地に足を付けたドキュメンタリーから、新たな切り口が育っていくのではないかという予感がある。次作に大いに期待したい。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)

自身の写真家活動におけるターニングポイントと言えるのが、第1回「名取洋之助写真賞」受賞。そこに選考員として関わることに感慨を覚えました。応募から発表までの緊張感は未だに忘れられず、応募された35作品を当時の自身と重ねるように拝見。格段に上がっているレベルに唸りました。注視していたのが、テーマ、構成、被写体との関わり。



名取賞受賞の和田拓海さんはバングラデシュの船舶解体・修復現場を丁寧に取材。主観的にならないギリギリの客観的視点を保つつゝ、困難な現場で生きなければならない人々の現状を淡々と伝えていく姿勢にドキュメンタリーの本質を垣間見ました。さらには昨今世界的主流となっているアートドキュメンタリーを意識した美しいプリントで他作品を圧倒。30作品の構成も上手く、文句なしの受賞でした。奨励賞の藤本いきるさんは、息子さん奥さんを次々と亡くし、ガンを患う写真愛好家を記録。好きな写真撮影に生きる希望を託しつつ、病魔に侵され日々衰退していく姿、闘病から最期までを畳み掛ける後半、時間の流れの描写が実に巧みでした。時にユーモアを交え、写真愛好家らしく遺影で家族一緒になるフィニッシュにも感情を揺さぶられました。

全体的には既視感のある内容やアプローチ、踏み込みが甘く旅人から抜けきれない作品は勝ちきれなかった印象。将来の可能性よりも完成度の高さで選んだ選考となりました。

「名取洋之助写真賞」について

公益社団法人日本写真家協会(JPS)は、社会に貢献する事業として「JPS展」や「日本写真家協会賞」の表彰並びに顕彰を行っています。2005年からは「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展への助言。更に、写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で協力を頂いています。没後、名取洋之助が関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

●名取洋之助(1910～62年) ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルボルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画・編集者でもあった。

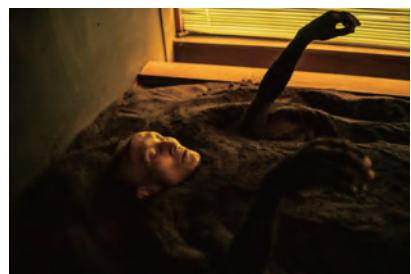
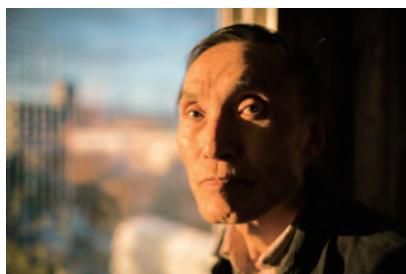
■ 2019年第15回名取洋之助写真賞

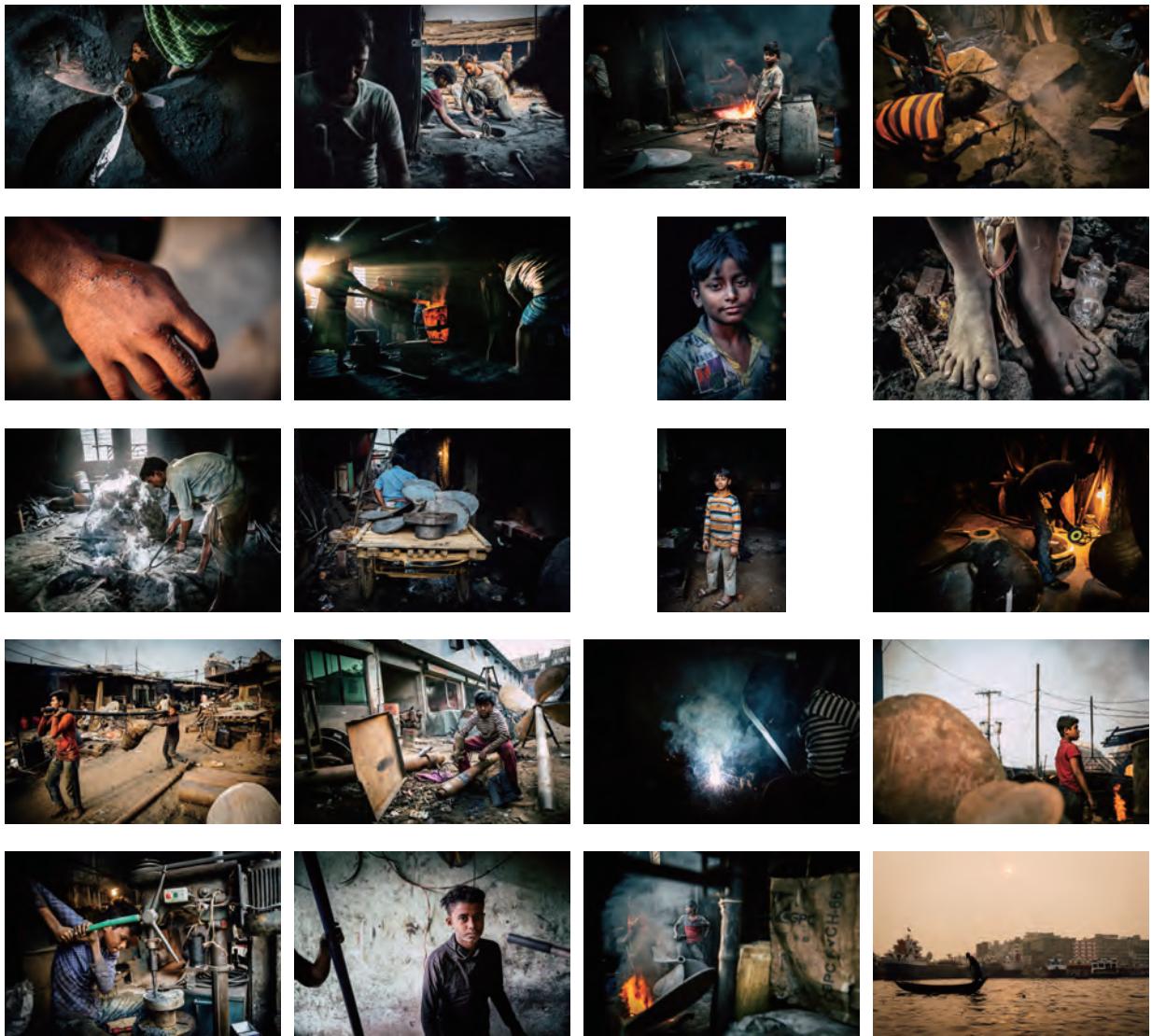
和田 拓海 「SHIPYARD～翼の折れた天使たち」（カラー 30 点）



■ 2019年第15回名取洋之助写真賞 奨励賞

藤本 いきる 「おじりなりてい」（カラー 30 点）





おめでとうございます

協会では、写真技術に関する発見、発明及び写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与、功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。

今回の第45回は、一般社団法人日本写真文化協会「ポートレートギャラリー」に贈呈します。(贈呈式・12月11日(水)16時30分からアルカディア市ヶ谷)

表彰理由は「平成30年に協会創立70周年を迎えた日本写真文化協会は、この70年間に営業写真館の繁栄のため数々の事業を展開してきた。なかでも平成14年に協会内に設けられた写真展会場「ポートレートギャラリー」は、写真愛好家からプロ写真家の作品発表の場を提供し、幾多の優れた写真を世に送り出す活動を続けてきたこと」に対して。

四谷のギャラリーを訪ねて、日本写真文化協会会長の田中秀幸さんにお話を伺いました。

—昔ながらのコンセプトを守り続けるということですが、その意味についてお話し下さい。

田中：日本写真文化協会は、日本中の写真館を中心とした団体です。写真館というものはその撮影対象は日本の文化そのものであり、日本の文化に深く関わり活動している職業です。ですから、私たちは日本の

文化を尊重しなければなりません。七五三であるとか、結婚式であるとか、そういった日本人の生活習慣を尊ぶことをベースとしています。その上で全国規模での写真コンテストの開催や、ギャラリー運営を続けていくことで、写真の素晴らしさを伝えていく。それが日本写真文化協会が掲げる基本的なコンセプトです。

「ポートレートギャラリー」は、誰でも自由に写真を発表できる場を作ろうという考え方を基に生まれたもので、外に向けての啓蒙活動の一環という位置づけです。

—ギャラリーは誰でも自由に使用できるのでしょうか？

田中：はい。プロ、アマを問わず、どなたでも自由に使っていただくことができます。現在ですと、年間に50回ほど写真展が開催されています。もちろん審査はありますが、「ポートレートギャラリー」という名前ではありますけれど、どのようなジャンルの写真でも発表することができます。

—デジタル写真の時代になり、誰でも気軽に写真を撮ることができるようになりました。そのような中にあって、ギャラリーの役割は変わってきたいるとお考えですか？

田中：いま、写真がいちばん上手いのは女子高生ではないか?いやこれは冗談ではなく、私どもが実感していることです。私どもの写真コンテストの総理大臣賞受賞者は、女子高生でした。また私どものギャラリーを使っていただける方のほとんどが、アマチュアの方です。もちろん、アマチュアといっても、JPSなどに所属するプロカメラマンの方に教えられて、写真技術が上達している方が多いように見受けられますが、昔と違って、実にさまざまな年代の

方、さまざまな職業の方が、良い写真を撮り、発表できるようになりました。これは写真界の底辺が広がりつつあるからこそ、生まれる事象なのだと感じています。

—時代が変わっていく中で、人それぞれの思いは、大きな潮流に呑み込まれてしまうような気もしますが？

田中：何かが変わっていく時に、認めなければならないものもあります。けれども、守らなければならないものもあり、これは来年の予定になるのですが、家族の写真をずっと撮り続けていた方にご登場いただきて、撮られた写真を時系列に並べて展示することを考えています。こういう撮影法は写真館がもっと得意とするところですから、その写真を皆様にご覧いただき、写真館で撮る写真の素晴らしさを再認識して欲しいと考えています。

—伝統の尊重と回帰でしょうか。

田中：けれども、伝統的なことばかりやっていると、今度はこのギャラリーが魅力ないものと捉えられてしまうかもしれません。そうすると、このギャラリーに写真を見に来ていただける人が減ってしまう。ですから、ギャラリーの魅力をアップする展示法についても、常に考えていかなければなりません。

「ポートレートギャラリー」の展示法は、基本的にオーソドックスなスタイルを採用していますが、お客様からは画像でなく映像を発表したい、あるいは、展示に音を活かしたいという声を聞いたりもします。そのようなことも一つの検討事項かと思っています。

では何故「ポートレートギャラリー」という名前を守り続けているのかというと、先の話に戻りますが、日本写真文化協会は写真館を会員とする組織で、その名前を掲げることで、ギャラリーの方向性を明示したいという考え方からです。あらゆるジャンルの写真を展示する一方で、いちばん基本的な考え方を守り続けていきたいと考えています。

—今日はどうもありがとうございました。

(2019年8月19日 東京・四谷「ポートレートギャラリー」にて、聞き手／出版広報委員：小池良幸、撮影・構成／池口英司)

第45回日本写真家協会賞

一般社団法人 日本写真文化協会

「ポートレートギャラリー」



田中 秀幸 さん

(一般社団法人 日本写真文化協会 会長)

JPS2019年新入会員展 「私の仕事」

東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」

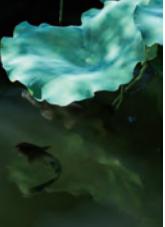
2019年7月11日(木)～7月17日(水)

大阪：富士フィルムフォトサロン 大阪

2019年8月23日(金)～8月29日(木)



		
<p>夢の中 飯塚 元彦 (山梨県)</p>	<p>鞄 五十嵐 洋 (東京都)</p>	<p>願い叶う 井上 嘉代子 (山梨県)</p>
		
<p>新緑 岩月 千佳 (愛知県)</p>	<p>散歩 岩本 慎太郎 (群馬県)</p>	<p>光の鼓動 江口 誠 (熊本県)</p>
		
<p>南仏の記憶 大越 邦生 (神奈川県)</p>	<p>視線の先 大西 としや (奈良県)</p>	<p>Leather craftsman 上吉川 祐一 (兵庫県)</p>

		
 <p>36weeks 川内 陽 (大阪府)</p>	 <p>約束 川口 紗子 (岡山県)</p>	 <p>マグロ大王・木村清社長 菊池 一郎 (東京都)</p>
		
 <p>猛禽女子1 葛原 よしひろ (滋賀県)</p>	 <p>WORLD PEACE FESTIVAL : PUSHIM 久保 貴弘 (東京都)</p>	 <p>白木神社に奉納される梶原の 太鼓踊り (熊本県五木村) 小林 正明 (神奈川県)</p>
		
 <p>ぴゅんピューン！！ 小山 光弘 (長野県)</p>	 <p>旭光 酒井 梨恵 (東京都)</p>	 <p>3月14日 三宮 幹史 (東京都)</p>
		
 <p>上海・外灘 鹿野 貴司 (東京都)</p>	 <p>朱夏-2 鈴木 一彦 (東京都)</p>	 <p>ダリの海 清家 道子 (大分県)</p>

 <p>Fly in the sky</p> <p>関 一也 (長野県)</p>	 <p>Seine</p> <p>田形 肴 (東京都)</p>	 <p>ゼフィルス飛翔－ ジョウザンミドリシジミ 武並 完治 (岡山県)</p>
 <p>Let's do something</p> <p>谷口 健一 (奈良県)</p>	 <p>ベルリン東駅前</p> <p>種清 豊 (東京都)</p>	 <p>「オペラ《椿姫》」新国立劇場 2017年 公演より 提供：新国立劇場 寺司 正彦 (東京都)</p>
 <p>高層建築の人々</p> <p>中塚 雅晴 (東京都)</p>	 <p>Together –幸せ－</p> <p>中村 恵美 (東京都)</p>	 <p>星空は漁火とともに</p> <p>成澤 広幸 (埼玉県)</p>
 <p>shell</p> <p>西村 広 (東京都)</p>	 <p>沢井比河流先生 (箏演奏家) ～邦楽ジャーナル表紙より～ ヒダキトモコ (非公開)</p>	 <p>凍えた両手に息を吹きかけて</p> <p>福園 公嗣 (埼玉県)</p>

 <p>孫とおばあさん 細木 良男 (島根県)</p>	 <p>DOOR SCOPE 本郷 剛 (東京都)</p>	 <p>すこしむかしのあたらしいまち 封鎖 松浦 弘昌 (大阪府)</p>
 <p>遊牧民の情報源 松尾 純 (広島県)</p>	 <p>歓 水谷たかひと (東京都)</p>	 <p>優和 美 都 (神奈川県)</p>
 <p>Congratulations! 南 博幸 (京都府)</p>	 <p>干す 山崎 純敬 (滋賀県)</p>	 <p>夜光性静物観察記 ～東京都大田区のタイヤ公園～ 山下 晃伸 (東京都)</p>

※ 展示作品各自2点から編集部でセレクトした1点を50音順に掲載しました。
(構成：小池良幸)



東京展オープニングパーティー記念撮影（撮影：寺司正彦） 東京展会場（撮影：山下晃伸）

大阪展示会場（撮影：松浦弘昌）

写真解説

ヤマセミ（表紙写真）—— 嶋田 忠

氷点下 20 度、凍てつく寒さの中、じっと水面を見つめるヤマセミ。

体が前傾した次の瞬間、水中にダイビング、大きなヤマメを捕えて舞い上がった。北海道千歳川、最北の不凍湖、支笏湖から唯一流れ出ている清流だ。ヤマセミは体長 40cm と大形で、魚類が主食。渓流が生息地のため、数は少ない。全国に生息するが北に行くほど羽毛の色が白く、北海道のヤマセミが最も美しい。

（写真展、写真集「野生の瞬間 華麗なる鳥の世界」）

小豆島物語（表4写真）—— 芥川 仁

映画「二十四の瞳」で知られる瀬戸内海に浮かぶ香川県小豆島で、暮らしや産業、伝行事などを 2 年間取材する機会を与えられた。3 月の日暮れ時、石組みの防波堤に囲まれた蒲生の船着き場から、船外機に乗って刺し網を仕掛けに行こうとする浜田満（81 歳）さんに偶然出会った。「一日一日を朗らかに大事に生きとったら、あと 3 年ぐらいたは生きとるやろ」と届けのない言葉に、浜田さんが島で過ごしてきた時間のおおらしさを感じた。（写真展「小豆島物語」）

◆ JPS ギャラリー

出雲大社 吉兆さんと番内さん—— 中野晴生

出雲大社の門前町では、正月三日に笛や太鼓の鳴り響くなか、「歳徳神」と記した高さ約 10 メートル、幅約 1 メートルの「吉兆幡」を担ぎ、「番内さん」が先払い役で街を練り歩く。出雲大社本殿前、千家、北島両国造家で「大社神謡」を謡い奉納して、五穀豊穣や無病息災を祈る。享保 16 年（1731 年）にはすでに往なわれており、古くから伝わる新春の民間行事で、町内が最も華やぐ日である。写真は、大注連縄前で奉納を終えた番内さん。

浮き世—— 西川祐介

最近ようやく見慣れてはきたが、コスプレや痛車のパーティーが熱い。秋葉原や渋谷、お台場などでは自然発生的に集まり更にそれを見物する人まで加わっている。少子高齢化はじめ地方圏における産業の衰退、人々の孤立化などの社会風潮のなかで生まれたこの若者文化は一時的な享楽にふける刹那と思われていたのだが、今では世界中から注目される日本文化となっているというから驚きである。

恐竜たちの楽園—— 吉村和敏

カナダ、アルバータ州南東部に広がるバッドランドと呼ばれるエリアは、恐竜や古代生物の化石が多く出ることで知られている。拠点となるドラムヘラーの街中に、巨大なティラノサウルスの模型が置かれていた。臨場感を出すために、あえて駐車場に停まる車を入れ、シャッターを切った。その後、大地に視線を戻し、彼らがこの地を悠々と歩き、草木を食べ、時に争っている姿を頭の中で思い描いてみた。過去へとタイムスリップできるのも、カナダの魅力の一つだろう。

微笑—— 河野英喜

『太陽は一つ』の原則に倣いストロボを光源に、ライティングの基本でもある一灯ライティングで撮影している。

僕が感じるモデルの特徴や立体感の表現、肌の透明感やフレーム内にある色彩の再現性まで考えて、ライトのポジションを定めた。

フラットに光をまわしただけのライティングではモデルの個性は光らない。

ポートレート撮影はモデルの個性に光を灯しながら「表情」という宝石箱で様々に輝く宝石を捉えるのと同じなのだと僕は思う。

アサギマダラ—— 宮入芳雄

林野庁の森林保護員として高尾山域を巡視して 12 年。撮り溜めた写真にエッセイを添えた本が『ぼくは高尾山の森林保護員』。その続編を、昆虫をテーマに書いてほしいと出版社から依頼が来た。私は昆虫の専門家でもマニアでもない。そこで素人の目線で昆虫の世界を覗いてみた。そこには高尾山域に住むユニークな虫たちとの出会いがあった。

こぼれ落ちそうなトラック—— 小澤太一

モロッコの最南部、サハラ砂漠の小さな村ハッシラビアドで撮影。大きなトラックが、ラクダが食べるための草を大量に運んでくる。それにしてもよく落ちないものだな…と感心してしまう。ラクダは砂漠観光にくる人を乗せるためにたくさん飼われており、村にとっての大きな産業のひとつだ。ある日の夕方、トラックの脇で村人が世間話をしていた。その大きさの対比を面白く感じ、人物の動きを見ながら撮影した。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

講談師 田辺銀治—— ヤナガワゴー！

2019 年 3 月 6 日 浅草 木馬亭にて。銀治の自主興行「熱間鍛錬（あっかんたんぎん） Vol. 5 の楽屋にて。行きつけの神楽坂の美容師さんが楽屋まで出向き、演目のイメージにあわせて髪を結い上げてくれました。光も十分とはいえないせまい楽屋でも X-Pro2 と XF56mm F1.2R APD は取り回しもよく思い通りの写真を撮らしてくれました。

霧の盆地より／染まる霧島—— 大浦タケシ

故郷、都城盆地は明け方霧の発生が極めて多い。盆地を見下ろすように聳える霧島連山も霧の上に浮かんでいるように見えることからその名が付いたと言われている。霧が深く立ち込めると数 m 先も見えなくなり写真どころではないが、陽の兆しとともに霧が引きはじめる時間になるとこれまでにならない新鮮な出会いも多い。写真は霧の残る早朝、山の頂が朝日で赤く染まる霧島連山のひとつ高千穂峰（たかちほのみね）を写したものである。

URBAN—— 土屋敏朗

FUJI FILM X-H1 ならではの 色の再現性とアドバンスフィルターの効果を 23mm F1.4 という大口径単焦点レンズにて撮影しました！

ガラス張りのビルとビルとの映り込みを不思議な世界観で表現できたと思います。

フィリピンの子どもたちを支援してきて —フィリピン過疎地で「ひとりだけの NGO」活動を続ける木下 健さん—

JPS会員の木下健さんが、フィリピン・ルソン島の山村で、「ひとりだけの NGO」活動を始めてもう 35 年になる。今日では現地に幼稚園もできて、木下さんが 1 人で活動を始めた頃とはずいぶんと現地の様子も変わってきてているというが、それでもまだ、何もかもが十分に行き渡っているとは言い難い。たった 1 人のフォトグラファーが、遠い外国でできる支援活動とは何なのか？ 活動 35 年を機に、お話を伺った。

大きな組織に任せているだけでは本当の支援はできない

—— 木下さんは、もう 35 年もの間、フィリピンのマシカップという山岳民族の小さな集落で、現地の子どもたちの支援を続けていますが、きっかけは？

木下：マシカップでの活動を始める前にもユニセフの仕事をお手伝いさせて頂いていたのです。ただ、実際に活動をしてみると、ユニセフにはユニセフの問題点があって、私には不満でした。それで 1 人で支援活動を始めたということですね。

—— ユニセフといえば、非常に大きなしっかりとした団体という印象がありますが。

木下：ユニセフでの支援をしてきましたが、当時のユニセフは問題点もあり、私には不満でした。大手の広告代理店が中に入り、例えば、発展途上国の飢えた子どもの姿を強調的に使うなどして、募金を煽るなどです。そこからは、子どもたちを理解するなど、程遠いことです。それと、大きな募金団体を優遇し少額募金にはそけないなどです。

—— 結果についても宣伝をしてくれるような組織にユニセフは目を向ける？

木下：そういうことですね。最初はユニセフのツアーに参加しました。そのツアーで子どもたちの写真を撮り、それをポストカードにして得た収益をユニセフに寄付したのですが、小さな額の寄付ではそっけのない対応しかしてもらえず、こちらからの取材の依頼にも

対応しても
らえなかっ
たのです。
その頃、キ
リスト教児
童福祉会と
いう NGO
を通じて、
現地の支援
活動の様子
を撮影して
もらえない
かという依頼を頂きました。これにはギャラは出ない
ということだったのですが、引き受けさせて頂き、フィ
リピンのルソン島中央部にあるマシカップに行った。
それが 1985 年のことでしたから、もう 35 年前のこと
になりますね。

マシカップは、ネグリートという山岳民族が山から
降ろされ定住化させられた集落で、ネグリートの人たちは、フィリピンの中でも最も貧しいのです。1970 年代のマルコス政権時代に、フィリピンの山の森林は大量に伐採され、木材として輸出されました。日本の商社も絡んでいます。当時、山で生活していたネグリートの人たちは、その森林伐採で山を追われたのです。定住化しても、ネグリートの人たちの生活環境や、教育水準が高くありませんでした。そこで、識字教育の支援が始まられました。

地道な活動ですね。

木下：やがて自立ができたという判断から、支援は打ち切られました。ところが、マシカップの人たちの貧しさは変わりません。そこで、キリスト教の教会のセンターの要請を受け、私がマシカップ集落の子どもたちの識字教育の支援を続けることになりました。

フィリピンでは、小学校に入学するときにも、試験があります。それは自分の名前が書けるかどうかとか、最低限の人との協調性が備わっているかどうかというような、ごく簡単な試験なのですが、文字の読み書きができるいまでは、子どもたちは小学校に入学すること



村の人から贈られた感謝状を手にする木下健さん



子どもたちの写真で作ったポストカード

さえできないのです。それではいつまで経っても、子どもたちが幸せになれないかもしれない。

そこで今度は、私ひとりで「小さな教室」を開き、就学前の子どもたちのための識字教育をはじめました。そして、写真を撮ることが私の仕事なのですから、子どもたちの写真を撮ってポストカードを作り、販売をして、必要な資金の足しにさせて頂きました。

大人にも文字を教えて、村に本を贈った

—— 誰もが受けることができるが本当の教育なのでしょうね。

木下：二十数年前から、就学前の子どもたちの識字教育を続けていますが、おかげさまで、10人の子どもがいるとしたら、当初は2～3人しか小学校に入学出来なかったのが、今では行けない子が、1人いるかいないかになりました。

そして、3年前に町がマシカップに幼稚園を作ってくれました。以前は幼稚園が遠いところにあって子どもたちが通えませんでしたが、近くに幼稚園ができてことで、子どもたち誰もが小学校に行けるようになり、もっと勉強ができるようになると思います。その話を聞いた時、これで私の仕事も終わったなと感じました。

—— 嬉しいような、寂しいような…。

木下：町の幼稚園は出来ました。私の支援は、まだ出来ます。先生も続けたいというので、補修教室をやることにしました。学校に行けなかった、大人たちも対象です。

ところが、先生が、突然、病死です。識字教育を担当する先生がいません。そこで、考えついたのが、最後の支援として、本を贈ることにしました。字は読めるようになっても、教科書以外に読むものがないのです。昨年の3月には、窓口のキリスト教の教会のシスターに、マニラで数百冊の本を買ってもらい、マシカップに運びました。そして、現地で本箱を買いました。日本製の中古の良いのが見つかりました。本は、赤ちゃんの時から知っている、今はハイスクールで学んでいる、ジャネルの家に常備しています。嬉しい申し出が、亡くなった先生の次女のジェーンからありました。土曜日だけでも、子



贈られた本を読む現地の子どもたち

どもたちを教えたいたいというのです。そこで、ジャネルの家の軒先に、テーブルとイスを用意し、本箱の本を使っての「小さな図書館・土曜教室」が始まりました。ジェーンからは、土曜日には、SNSで、教室の写真が送られてきます。

—— それでは、もう現地には行ってないですか？

木下：自分の年齢、フィリピンの暑さなど考え、ここ数年、現地に行くのは今年で最後だと思いながら行っています。今年の3月に、最後だと思い、援助金やお土産を持って行きました。

そこで体調を崩し、病院に入院したこともあり、来年は無理だと思い、子どもたちに話をしました。それが右下の写真です。「来年は来られないと思う。でも、教室のためのお金はシスターに送る。みんなも、頑張って勉強を続けて欲しい」と。

ところが、日本に帰ってくると、子どもたちに会いたくなり、また行きたくなるのです。援助金については、定期的にお金を送ってくださる方が何人もいらっしゃいますし、たとえ、援助金が集まらなくても、自分のお金で、なんとかできる範囲の金額だし、人々、航空券などの費用は自分で負担してきましたから。今は来年行くかどうか、迷っています。

インタビューを終えて

お話を伺いながら、現地で撮られた写真を拝見していると、木下さんが「この時は、私が来るというので、いつもよりたくさん人が集まってくれたんだ」とか、「この家具は出来がよくて、他のものより丈夫なんだ」など、どのシーンにも長い解説を加えてくれます。確かに、人間が1人でできる仕事の量というのは大きなものにはできず、集められるお金なども、大きなものとはならないのかもしれません。それでも、人と人の間に太い絆を築くことは、1人だけの仕事でも十分にできることなのだと、何よりも強くそう感じました。

(2019年7月6日 八王子市内にて 聞き手・撮影／出版広報委員：池口英司、現地写真・ポストカード提供：木下健)



現地で活動中の木下健さん

プロカメラマンのための 「ミラーレスカメラ入門」

◆ミラーレス化という大きな波の到来

ここ数年、レンズ交換式カメラにミラーレス化という、大きな波が押し寄せている。

ミラーレス機は2008年登場のパナソニックG1から始まり、オリンパス、富士フィルム、ソニーなどが相次いで参入。当初はマイクロフォーサーズやAPS-Cサイズの比較的小型の撮像センサーを搭載するモデルから始まり、普及機から中級機クラスの商品展開が続いたが、2013年にソニーより撮像センサーが35ミリフィルム一コマとほぼ同じ大きさのフルサイズモデルが登場。このあたりを境に徐々にプロ需要が加速した。

さらにオリンパスなどミラーレス専業メーカーによる高級機種投入や、これまで一眼レフに主軸を置いてきたニコン、キヤノンからもフルサイズミラーレスが登場。特にプロユーザーの多い2社からの参入で、ミラーレス機のポジションは確実なものになった。

並行するようにフルサイズよりもさらに大きなセンサーサイズを持つ中判ミラーレスもハッセルブラッド、富士フィルムから用意されて、レンズ交換式カメラの市場は一眼レフからミラーレスへとシフトしつつある。

◆カメラの進化上の転換期

カメラの歴史をさかのばれば、これまでマニュアルフォーカスからオートフォーカス。フィルムからデジタルなど、大きな転換期はいくつかあったが、その次の大波がミラーレス化と言っていいだろう。

ミラーレスカメラの主なメリットは静音化、コンパクト、高画質、動画兼用などが挙げられる。静音化は一番の要因であるミラー系の駆動機構が必要ないため、機械による作動音が減少。最近では撮像センサーの進化でシャ

ッター幕を動かすことなく電気的にシャッターを切る、電子シャッターも中高級機を中心に装備されて、ほぼ無音の撮影も可能になった。また静音化同様、ミラーの往復運動に必要なスペースや機構が不要になり、特に奥行き方向のサイズと構成部品点数も減少。スリムな構造や振動軽減で手ブレ抑制に効果を發揮しやすいのもメリットだ。

ミラーが省かれるとレンズマウント面と撮像センサーまでの距離(フランジバック)が短くなり、一眼レフ用レンズをそのまま利用できず、各社レンズマウントが変更されている。これによりレンズ設計の自由度向上やマウント径の大型化を図り、ミラーレス化は高画質にも一役買っている。

◆動画撮影ニーズにマッチ

また時代とともに、私たちの仕事内容も少しづつ変化し、Web媒体の撮影が増えた結果、昔に比べて動画撮影を依頼される機会も増えてきた。

ミラーレス機は構造上、ビデオカメラと似ている。動画撮影時、一眼レフではミラーアップして背面モニターを見るスタイルが基本だが、ミラーレス機なら、静止画撮影同様にファインダー、背面モニターでの撮影が可能。中高級機ではヘッドフォン端子やマイク端子を備える機種もあり、なかには本格的な動画撮影にも応える実力を持つ製品も登場している。そのほかのアドバンテージでは、露出に応じてファインダー上の明るさが変わり、撮影前に撮影露出をイメージしやすい。再生画像の確認をファインダーで行える。オートフォーカスの測距点が画面のほぼ全域において高精度で利用できる。顔認識技術でピントや露出精度向上など、生粋の一眼レフユーザーには、目からウロコ並みの機能も多い。



Panasonic G1 (2008)
2008年、ミラーレスの歴史はここから始まった



Canon EOS R (2018)
キヤノン初のフルサイズミラーレス



Nikon Z7 (2018)
4745万画素のZ7と2450万画素のZ6が登場

◆弱点は？

対して一眼レフのほうが優れている点は、電池の持ち、センサーゴミの付着、ファインダー表示の遅延、レンズラインナップなどがあげられる。

電池の持ちについてはかなり改善されているが、撮影中もファインダー表示に電気を使うので長時間は消耗が気になるところ。ひとつの対策としてはスマートフォン用のモバイルバッテリーを使ったUSB充電・給電ができる製品が多くを占めている。

センサーゴミについては、一眼レフでも問題視されているがミラーレス機の大半はレンズ交換時、撮像センサーはむき出しで、おのずとゴミ付着のリスクは高い。各社各様にゴミ対策は行っているが完璧でなく、現状では気遣わしい思いをするしかないのが実情だ。

ファインダー表示の遅延は、スポーツなど動体撮影ではシャッタータイミングに関わる大きな問題。レンズを通した光をミラーやプリズムの反射で目に伝えてきた一眼レフに対して、ミラーレスはセンサーから電気信号に置きかえてモニター表示する構造上、改善の難易度は高いが、一部モデルでは遅延を感じないレベルにまで進化。むしろ一眼レフ特有のブラックアウト（ミラーホーム時にファインダーが見えない現象）のないミラーレス機も登場しているので、こちらも時間とともに改善されていくことだろう。

◆導入時のハードル

ミラーレス一眼のメリット、デメリットはおおむね理解頂けたと思うが、導入時のいちばん高いハードルは所有レンズの流用についてだ。多くの場合、一眼レフ用オートフォーカス（AF）レンズは同一メーカーのボディにはアダプター経由で装着可能だ。ただしレンズが少し古いものだと装着できても、運動に制約される製品もあるので、具体的な一眼レフ用レンズをミラーレスカメラに装着する方法を見ていこう。

キヤノン一眼レフユーザーの場合、同社製ミラーレスカメラへの移行が最も容易で、フルサイズのEOS Rシリーズならば、マウントアダプター EF-EOS R（4種あり）。APS-CサイズのMシリーズならば、EF-EOS Mを使え

ば、一眼レフ用のEFレンズが取り付けられる。

ニコン一眼レフユーザーは、同社Zシリーズへ、マウントアダプターFTZの利用で大半のFマウントレンズをオート露出できる。

Sigma MC-11 (EF-E) ※写真はSA-E非公式ながら、キヤノン純正レンズも多くが利用可能

る。オートフォーカスの利用はレンズ内モーター内蔵のAF-P、AF-S、AF-Iレンズに限られるので、AFレンズだからといって完全運動でないのは注意したい。

また一眼レフ用レンズは構造上、他社ミラーレス一眼に取り付けられるものが多く、たとえばシグマ製キヤノン用交換レンズは同社MC-11 (EF-E)を取り付ければ、ソニーEマウントとしてソニー製ミラーレス機で利用できる（但し、一部の機能に制約あり）。

このようなマウント変換アダプターが、シグマを筆頭に輸入品を含め、各ボディに向けて豊富な種類が販売されている。しかしながら、物理的に取り付けられるだけのものから、AE/AF連動可能なものまで様々。中には取り付けるとレンズやボディから外れない粗悪品も含まれる玉石混交状態。ひとつの目安として、ビックカメラやヨドバシカメラのような大手量販店での取り扱いを参考に選ぶことをおすすめする。

◆まとめ

従来、式典やステージなど音に制約のある撮影シーンがミラーレス機登場で負担も減り、連写スピードも高級一眼レフを上回る機種も珍しくなくなっている。これまで慣れ親しんだ一眼レフを急に入れ替えるのは難しくても、まずはテスト的に使ってみてはどうだろう。まだ当面、現行一眼レフの購入や修理には困らないが、レンズを含めた新製品の登場が先細るのはほぼ確実。着実に仕事をこなすためにこそ、移行期間をしっかり見据えたい。（記／出版広報委員：桃井一至、画像／各社 Web Site より）



富士フィルム GFX100
1億画素の中判ミラーレス。ボディ内手ブレ補正内蔵



ソニー α 7R IV
フルサイズ投入から、4世代目の高画素モデル



Panasonic S1H
動画機能に特化したフルサイズ派生モデル

2019JPS展 報 告

事業担当副会長 松本徳彦

1976年第1回JPS展（一般公募は第2回目から開始）より数えて44回目を迎えた2019JPS展。昨年より応募枚数は減少したが、18歳以下部門の応募者数が昨年より増加したことは、若い世代への写真文化の浸透が感じられ、良い兆候であった。

JPS展は、東京、名古屋、関西で毎年開催され、協会事業の中でも多くの会員の参加によって運営されている。各会場での展示構成から講演会、イベントなど、各地域の会員による趣向を凝らした演出も人気となっている。ここ3年ほどは各地域で毎年使用している会場が改築や耐震工事などの関係で別会場になることが続いたが、本年度で終了した。会場の確保や開催時期など支障なく開催できたことは、関係する会員の尽力によるものである。

東京展（東京都写真美術館B1F）5月18日（土）～6月2日（日）は、LED照明を使った均一光で写真鑑賞には申し分ない空間であった。例年通り18日の初日に文化庁参事官（芸術文化担当）付文化戦略官所昌弘様と入選者・入賞者をはじめ関係者183名の出席で表彰式を行った。イベント「写真家と一緒にJPS展をみにいこう！」は小澤太一、清水哲朗の両会員の講師で開催。ギャラリートークは、7回171名の参加があった。14日間の東京展総入場者は、3,575名（有料入場者数1,728名）であった。

名古屋展は6月19日（水）～23日（日）の5日間、愛知県美術館で催した。しかし、これまでより展示室が手狭になり、来場者から見にくくと指摘を受けたが、入場者は1,022人と昨年同様であった。22日（土）美術館最上階で催したイベント、ポートフォリオレビューには予想以上の72名の参加者があり、テーブルに並べられた作品について、お互いに感想や意見を述べあうなど盛況であった。初めての試みであったが、作家と鑑賞者との意見交換



文科大臣賞受賞者のオーゼキヨーキさんと記念撮影（撮影・小林みのる）



表彰式（5.18 東京都写真美術館ホール、撮影・小林みのる）

など交流が生まれ、参加型の催しを積極的に増やす必要性を感じた。地元の動物写真家小原玲会員の講演会「アザラシの赤ちゃんからシマエナガちゃん」の人気は高く会場いっぱいの120名が参加した。

関西展は猛暑が続く7月30日（火）～8月4日（日）、京都市美術館別館で催し、1,338人の入場者があった。今年から展示構成を上位入賞者の作品が「より見やすくなるように工夫されていてよかった」との声もあったが、「会員作品が少ない」「公募作品の方が力がある」といった声もあり、会員への警鐘が聞かれた。続いて審査員の『フォトコン』藤森邦見編集長と同誌に連載中の四方伸季会員が「入賞作品の審査の現場から見た『写真の力』」と題する講演を行い、入賞作品のポイント、写真撮影におけるルールとマナーについて、藤森氏との実践的な講演に、聴衆から次々と拍手がわき関心の深さが伝わってきた。

会期の最終日4日（日）の撮影会イベント「ZOOっとエンジョイ！オリジナル動物園写真集を作ろう！」をオリンパス（株）と（株）アスカネットの協力で催し、小学生を含む14組26名の参加者があり、意義ある催しになった。



東京展講演会（撮影・小林みのる）



東京展展示会場（撮影・川村容一）

第44回 2019JPS展の報告

作品受付：2018年12月10日（月）～2019年1月15日（火）
作品審査：2月2日（土）
審査員：熊切圭介（審査員長）、榎並悦子、大西みづぐ、清水哲朗、藤森邦晃（『フォトコン』編集長）
後援：文化庁ほか
総展示数：542枚（公募277名475枚、会員作品56名56枚、ヤングアイ11校11枚）
総入場者数：5,935名
入場料（各展共通）：一般700円（团体割引560円）、学生400円（团体割引320円）、高校生以下無料、65歳以上400円（関西展、名古屋展は65歳以上無料）
※团体割引は20名以上

応募総数：1,795名、6,147枚
（一般：1,619名、5,794枚 18歳以下：176名、353枚）
入賞・入選者総数：277名、475枚
一般部門：242名、420枚（文部科学大臣賞1名、金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、奨励賞5名、優秀賞17名、入選213名）
18歳以下部門：35名、55枚（最優秀賞1名、優秀賞9名、入選25名）

入賞者氏名：
文部科学大臣賞
オーゼキコーキ 逢える日 5枚組モノクロ
東京都知事賞 該当者なし
金賞 小林一重 峡谷を治める 単 カラー
銀賞 大野真司 Rose mary 単 カラー
銀賞 岸 大輔 富士詣で 3枚組 カラー
銅賞 常川 真 道端昆虫観察記 4枚組 カラー
銅賞 雨森希紀 教えたくない 単 カラー
銅賞 宮本安紀子 SF空間 単 モノクロ
（奨励賞以下略）

18歳以下部門
最優秀賞 成瀬 夢 煌めく先へ 単 カラー
（18歳以下部門優秀賞以下略）

会員作品：56名 56枚

企画展示「ヤングアイ」

公益社団法人日本写真家協会会長賞：現代写真研究所
写真総合科II「addiction」田島朋樹
ヤングアイ奨励賞：大阪芸術大学 芸術学部 写真学科
「Look in」莊司晃正・濱紹里

参加校：11校

現代写真研究所 写真総合科II、東京工芸大学 芸術学部 写真学科、学校法人吳學園 日本写真芸術専門学校、日本大学芸術学部 写真学科、東京総合写真専門学校、専門学校 名古屋ビジュアルアーツ 写真学科、名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科、学校法人 Adachi 学園 ビジュアルアーツ専門学校・大阪、学校法人 日本写真映像専門学校・大阪芸術大学 芸術学部 写真学科、九州産業大学 芸術学部 写真・映像メディア学科

【東京展】

後援：文化庁、東京都 **共催：**東京都写真美術館



名古屋展展示会場（撮影・谷 泰宏）

会場：東京都写真美術館 B1F

会期：5月18日（土）～6月2日（日）10:00～18:00（木・金は20:00まで）、月曜休館（祝日の場合、翌平日休館）

表彰式・講演会：5月18日（土）東京都写真美術館 1Fホール 13:00～14:30 表彰式、参加者数：183名、15:00～16:30 講演会「気鋭の写真家による第44回2019JPSJPS 展入賞作品講評！」講師：榎並悦子、大西みづぐ、清水 哲朗 司会：吉永陽一（JPS会員） 参加者数：190名

祝賀パーティー：5月18日（土）17:00～19:00 ビヤステーション 恵比寿 参加者数：185名

イベント：5月26日（日）「写真家と一緒にJPS展をみにいこう！」 参加者：34名 会場：東京都写真美術館 1Fスタジオ、およびJPS展会場

協力（会場モニター提供）：パナソニック株式会社

入場者数：3,575名

【名古屋展】

後援：文化庁、愛知県、愛知県教育委員会、名古屋市、名古屋市教育委員会

会場：愛知県美術館 ギャラリーE・F室

会期：6月19日（水）～6月23日（日）10:00～18:00（金は20:00まで、最終日17:00閉館）

作品講評会・講演会：6月22日（土）愛知芸術文化センター12階 13:00～13:50 作品講評会 講師：山口勝廣専務理事、14:00～15:30 講演会「アザラシの赤ちゃんからシマエナガちゃん」 講師：小原玲（JPS会員） 参加者数：約120名
入場者数：1,022名

【関西展】

後援：文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会

会場：京都市美術館別館

会期：7月30日（火）～8月4日（日）9:00～17:00

作品講評会・講演会：8月3日（土）京都市国際交流会館イベントホール 13:00～14:30 作品講評会 講師：野町和嘉会長 15:00～16:30 講演会「入賞作品と審査の現場から見た『写真の力』」 講師：藤森邦晃（『フォトコン』編集長）、四方伸季（JPS会員） 参加者数：約110名
入場者数：1,338名

第44回 2019JPS展

写真事業担当理事：足立 寛

委員長：今井孝弘 副委員長：川村容一 委員：大津茂巳、木村正博、小室貴義、杉本奈々重、曾根原昇、鷹羽金蔵、根岸亮輔、吉永陽一

名古屋展実行委員長：三澤武彦 副委員長：鈴木一生

委員：小玉亘宏、川島栄嗣、谷 泰宏、塚本伸爾、花卉知之、原田佐登美、松原 豊、村山直章

関西展実行委員長：二村 海 副委員長：米川浩二 委員：植村耕司、内牧依子、越智信喜、金城泰哲、クキモトノリコ、柴田明蘭、辻村耕司、永野一晃



関西展展示会場（撮影・葛原よしひろ）

第45回 2020 JPS 展案内

写真展事業委員会

1976年にスタートしたJPS展は来年第45回目を迎えます。今回も一般公募を例年どおり募集します。皆様の力作をお待ちしております。

■イベント等

講演会、セミナー、撮影会を開催予定。

■作品集

展示作品を写真集として発刊、販売。

■メールマガジン

JPS展メールマガジンを配信していますのでご購読ください。

下記アドレスから登録できます。

<https://www.jps.gr.jp/jps-ten-magazine/>



<第45回 2020 JPS展 応募規定>

- **テーマ：**自由 *注意事項をよくお読みください。
- **応募資格：**アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただし、JPS会員は除きます。
- **応募部門：**一般部門 年齢を問いません。
18歳以下部門 2001年4月1日以降生まれの方
- **応募プリント：**(用紙) サイズはA4または六つ切8×10インチ(203×254mm)に限る。カラー、モノクロ両プリントのみ。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。余白・余黒の有無は自由です。作品は、必ず応募者本人が撮影したものであること。
- **出品点数：**単写真=制限はありません。組写真=5枚までを1組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。
また台紙には貼らないで応募してください。
- **受付手数料：**
一般部門:1枚につき2,200円(組写真の場合も1枚2,200円)
18歳以下部門:1枚につき600円(組写真の場合も1枚600円)郵便局より下記、郵便振替口座へ2020年1月15日までにお振込みください。お振込みがない場合は審査しません。作品の中に受付手数料を同封することは、厳禁とします。応募作品返却希望者は、返却料2,200円を加算してお振込みください。(応募作品の返却は6月下旬から7月上旬を予定しています。海外からの応募の場合は返却できません)
郵便振替口座番号:00110-5-651936
口座名称(漢字):日本写真家協会JPS展
*通信欄に応募部門、応募合計枚数、ご依頼人の郵便番号、住所、氏名、氏名フリガナ、電話番号を必ずご記入ください。
*氏名には必ずフリガナをつけてください。
- **受付及び締切**
2019年12月10日(火)から2020年1月15日(水)まで。
郵送または宅配便に限ります。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。
- **審査員：**野町和嘉(審査員長)、熊切大輔、高砂淳二、水谷たかひと、伏見美雪(『アサヒカメラ』編集長)
*審査員の都合により変更になることがあります。
- **審査結果：**3月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ(<https://www.jps.gr.jp>)とメールマガジンでも発表します。(電話でのお答えはいたしません)。
- **展示用作品：**入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で半切に引伸し、再提出していただきます。その際には作品の原板・データが必要になりますので、必ず保存しておいてください。
文部科学大臣賞、東京都知事賞、金・銀・銅賞作品について
は大型サイズになる場合があります。
- **展示及びパネルの製作費：**入賞・入選作品は、当協会特注のパネルにて展示しますので、一般部門は1枚につき8,800円、18歳以下部門は1枚につき4,400円を指定の日時までに納入していただきます。
入賞・入選の辞退はできません。
- **作品集：**第45回 2020JPS展作品集の刊行を予定しています。

作品集の原稿には応募作品を使用します。

●展示会場・会期

東京都写真美術館 2020年5月23日～6月7日(予定)
京都市美術館別館 2020年6月23日～6月28日(予定)
愛知県美術館 2020年7月(予定)

●注意事項

1. 原則として未発表作品に限ります。過去にコンテスト等で入賞・入選した作品及びそれらに類似した作品(同じ対象を同じような条件で同じ時期に撮影した作品)は応募できません。また、現在コンテスト等に応募し結果が判明していない作品も応募できません。
2. 被写体の肖像権・著作権には十分にご注意ください。スナップ等で人物を撮影された場合には、コンテスト応募の承諾を得てください。
3. すべての応募作品の著作権は撮影者に帰属します。ただし、入賞・入選作品は巡回展終了までの間に当該作品を他に使用する場合、当会の許諾を得てください。
4. 入賞・入選作品は、審査結果発表後、優先的に当展の広報宣伝等の目的範囲内で雑誌その他に使用することがあります。
5. 応募作品の返却を希望される方は、受付手数料納入の際、返却料2,200円(枚数に関係なく)を加算してお振込み下さい。
※海外からの応募の場合は返却不可となります。返却は6月下旬から7月上旬を予定しています。
6. 入賞・入選の展示作品は展覧会終了後、着払いの宅配便で返送します。
7. 作品受理以前の事故、破損につきましては、その責任を負いかねます。作品は慎重に取り扱いますが、輸送途中の不可抗力による事故等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。
8. 受付手数料、パネル製作費はいかなる場合でも返金いたしません。
9. 応募者は応募規定、注意事項を全て了承したものとみなし、違反した場合には入賞・入選は取り消しとなります。作品到着後における応募・展示の辞退はできません。また、過去に規定違反のあった方の受付はお断りすることができます。
10. 応募者の個人情報の利用は今回のJPS展と今後の応募のご案内などの範囲とし、管理を慎重にいたします。
11. 18歳以下部門に応募された方が入賞・入選された場合は、年齢確認の資料を提出していただきます。

●賞：(一般部門)

- 文部科学大臣賞 1名(賞状、盾、賞金50万円、副賞)
東京都知事賞(予定) 1名(賞状、盾、賞金30万円、副賞)
金賞 1名(賞状、盾、賞金15万円、副賞)
銀賞 2名(賞状、盾、賞金10万円、副賞)
銅賞 3名(賞状、盾、賞金5万円、副賞)
奨励賞 5名(賞状、盾、賞金2万円、副賞)
優秀賞 20名程度(賞状、盾、副賞)
入選 200名程度(賞状、記念品)

(18歳以下部門)

- 最優秀賞 1名(賞状、盾、副賞)
優秀賞 10名程度(賞状、記念品、副賞)
入選 10名程度(賞状)

- **応募先・お問い合わせ：**〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 CJIIビル303 公益社団法人日本写真家協会第45回2020JPS展
TEL.03-3265-7453 FAX.03-3265-7460

J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2019・5月～9月)
 ①発行所 ②発行年月
 ③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
 ④定価 ⑤寄贈者
 ⑥電子書籍ストア



海の時刻

武下 巧

①武下巧 ②2019年4月
 ③21.8×30.3cm、100頁
 ④2,222円 ⑤武下氏



自然写真の平成30年と
フォトグラファー
進化するネイチャーフォト
編集・日本自然科学写真協会(海野
和男、濱和雄、伊知地国夫、他)

①小学館 ②2019年4月
 ③21.7×15.3cm、240頁 ④3,200円
 ⑤日本自然科学写真協会



SAHARA

小澤太一

①日本カメラ社 ②2019年7月
 ③21.7×30.3cm、88頁
 ④3,600円 ⑤発行所



寓話／RyUlysses

鈴木龍一郎

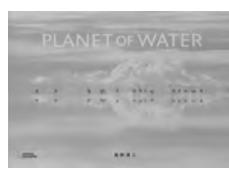
①JCII フォトサロン ②2019年5月
 ③24×25cm、31頁 ④800円
 ⑤発行所



フシギなさかな ヒメタツのひみつ

尾崎たまき

①新日本出版社 ②2019年5月
 ③27×22.3cm、24頁
 ④1,500円 ⑤発行所



PLANET OF WATER

高砂淳二

①日経ナショナルジオグラフィック社
 ②2019年6月 ③20.5×29.7cm、112頁
 ④2,400円 ⑤発行所



海人

西野嘉憲

①平凡社 ②2019年6月
 ③22.8×26.8cm、166頁
 ④5,900円 ⑤西野氏



AFTER THE GONG

高尾啓介

①忘羊社 ②2019年5月
 ③25.7×18.3cm、167頁
 ④3,000円 ⑤高尾氏



永観堂 禅林寺

水野克比古、水野秀比古、
 水野歌夕

①青青社 ②2019年5月
 ③29.7×21cm、103頁 ④-円
 ⑤水野氏



出雲大社

中野晴生

①富山房インターナショナル
 ②2019年5月 ③30.3×21.5cm、262頁
 ④6,800円 ⑤中野氏



WE LIVE IN HARLEM

若生靖夫

①若生靖夫 ②2018年5月
 ③24×25cm、70頁 ④-円
 ⑤龍欣子氏

 <p>被爆 ヒロシマ・ナガサキ いのちの証 江成常夫</p> <p>①小学館 ②2019年7月 ③29.7×23cm、175頁 ④4,600円 ⑤江成氏</p>	 <p>ユメノシマ 夏目安男</p> <p>①現代写真研究所出版局 ②2019年7月 ③18.8×24.4cm、120頁 ④2,800円 ⑤夏目氏</p>	 <p>日本の庭 京都 中田 昭</p> <p>①パイインターナショナル ②2019年7月 ③21×15cm、222頁 ④2,200円 ⑥発行所</p>	 <p>京都 祇園祭 中田 昭</p> <p>①京都新聞出版センター ②2019年7月 ③18.6×15cm、127頁 ④1,600円 ⑤中田氏</p>
 <p>骨肉 大西成明</p> <p>①赤々舎 ②2019年3月 ③29.7×22cm、120頁 ④3,800円 ⑤大西氏</p>	 <p>野生の瞬間 華麗なる鳥の世界 嶋田 忠</p> <p>①東京都写真美術館 ②2019年7月 ③22.5×25cm、204頁 ④一円 ⑤発行所</p>	 <p>Passages of Pure and Beautiful Souls Dumri Village, Portraits of 29 families 中川十内</p> <p>①Blue Bear Inc. ②2018年3月 ③35.5×25.3cm、44頁 ④4,000円 ⑤中川氏</p>	 <p>LAST PARADISE 精霊の踊る森 嶋田 忠</p> <p>①講談社 ②2019年7月 ③25.7×25.7cm、107頁 ④3,600円 ⑤嶋田氏</p>
 <p>たいむすりっぷ 1972~1988 昭和と呼ばれた時代 田畠藤男</p> <p>①日本カメラ社 ②2019年7月 ③24.7×25.7cm、60頁 ④2,930円 ⑤発行所</p>	 <p>土と生きる 川辺川ダム水没予定地に暮らしうけた夫婦 小林正明</p> <p>①花乱社 ②2019年8月 ③23.6×25.5cm、95頁 ④4,400円 ⑤小林氏</p>	 <p>Philosopher's stone 中川十内</p> <p>①Ichibeicho Gallery ②2018年7月 ③12.5×18.4cm、208頁 ④一円 ⑤中川氏</p>	 <p>泥んこ、危険も生きる力に ないないづくしの里山学校 岡本 央</p> <p>①家の光協会 ②2019年8月 ③21×14.8cm、127頁 ④1,400円 ⑤岡本氏</p>

 <p>競馬 BANEI KEIBA 山岸 伸</p> <p>①朝日新聞出版 ②2019年8月 ③21.7 × 30.3cm、95頁 ④2,800円 ⑤山岸氏</p>	 <p>とびきりの日常 ある日の木更津社会館保育園 島田 聰</p> <p>①木更津社会館保育園 ②2019年9月 ③24 × 19.2cm、48頁 ④850円 ⑤島田氏</p>	 <p>柳行李 山口規子</p> <p>①日本カメラ社 ②2019年7月 ③23 × 16cm、80頁 ④1,800円 ⑤山口氏</p>	 <p>光の田園物語 環境農家への道 今森光彦</p> <p>①クレヴィス ②2019年8月 ③22.2 × 18.5cm、208頁 ④2,500円 ⑤発行所</p>
---	---	--	--

寄 贈 図 書

武並完治氏.....伯耆大山 神宿る山の博物誌
 小松健一氏・中村 哲、編集・構成・小松健一・虞美人草 九十三歳のわたくし
 近藤誠宏氏
 ...加藤麻美、監修・近藤誠宏・飛驒河合 山中和紙 ばあちゃん ぼくが継ぐ
 吉永友愛氏.....キリシタンの里 祈りの外海
 クレヴィス様...今森光彦・魔法のはさみ、土門拳・土門拳の古寺巡礼
 ...廣田尚敬・鉄道のものがたり、三好和義・室生寺、中村征夫・海への旅
 ...今森光彦・Aurelian、中村征夫・永遠の海、木村伊兵衛・バリ残像
 ...長倉洋海・その先の世界へ、中村征夫・世界一の珊瑚礁
 ...マーティン・ギトリン・オードリー・ヘブバーン・彼女の素顔がここに
 ...監修・宮内庁侍従職・天皇皇后両陛下ともに歩まれた60年
 ...松本紀生・極北のひかり、編集・クレヴィス・英國ロイヤルスタイル
 ...岩合光昭・岩合光昭の世界ネコさがし、岩合光昭・ねことはな
 ...岩合光昭・岩合光昭の世界ネコ歩き2、岩合光昭・かびばら
 ...岩合光昭・岩合光昭の世界ネコ歩き 続々番組ガイドブック
 ...岩合光昭・岩合光昭の世界ネコ歩き 続々番組ガイドブック
 ...JAGDA 様.....Webと著作権
 JCII フォトサロン様.....真繼不二夫・美の生態
 ...秋山武雄・小さな旅-モチーフを探して 1950~60年代-
 ...井桜直美・一日米と親条約締結165周年-
 ...『ペリー提督日本遠征記』を追って 琉球・小笠原諸島
 ...高橋 昇・熱波-ブレイボーイ・インタビューセレクション-

交通新聞社様.....青田 孝・鉄道を支える匠の技
 ...杉崎行恭・あの駅の姿には、わけがある
 SSP 様.....日本自然科学写真協会創立40周年記念
 Nature Photography 2019 自然科学写真への誘い
 キヤノンマーケティングジャパン(株)キヤノンフォトサークル様
 ...Canon Photo Annual 2019
 リコーイメージング(株)ペンタックスリコーカミーラークラブ事務局様
 ...PENTAX RICOH PHOTO ANNUAL 2019-2020
 ソニー様.....Sony World Photography Awards
 東京都写真美術館様.....宮本隆司・いまだ見えざるところ
 ...TOPコレクション「イメージを読む 場所をめぐる4つの物語」
 ...TOPコレクション「イメージを読む 写真の時間」
 ...しなやかな闇いーボーランド女性作家と映像 1970年代から現在へ
 二科会写真部様.....第67回展二科会写真部作品集
 日本カメラ社様...沈輝、長谷川由美子・棚田の民 中国貴州省の苗族
 ...広瀬勝裕・北欧夏日和
 日本山岳写真協会様.....創立80周年記念「協会写真展の歴史」
 日本写真文化協会様.....文協70年のあゆみ
 ...第65回全国写真展覧会 全国展フォトコンテスト作品集
 日本肖像写真家協会様.....人像2018
 日本大学芸術学部写真学科様.....LOCUS2019
 日本写真協会様.....「東京写真月間2019」図録

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。

■ 「第29回日本製鉄音楽賞 特別賞」受賞 平成31年3月13日



受賞者：林喜代種（1983年入会）

誰でも簡単に日常を撮る時代だからこそ、撮り手の情熱は必要不可欠で、林氏の写真から感じる熱量は音楽の現場そのもの。長きに亘って撮って来られた“瞬間”は、楽壇史であり、時に言葉以上の力を持つ。

Message Board

◆山口規子（2001年入会）

『トルタビ』旅して、撮って、恋をしてノ』（日本写真企画刊）を上梓いたしました。世界中を旅しながら撮影した写真を例にして、その国や場所のエピソード、そして撮影のコツや心構えなどをまとめた初心者向けの本です。旅に出たら必ず写真を撮るという時代から、旅だけでなく日常でも写真を撮ることが多くなった昨今、少しでも写真を上手く撮りたいと思う一般の方々が増えてまいりました。そんな方のために、この本がお役に立てたら光栄です。

（千葉県船橋市在住）



たら幸いです。（沖縄県石垣市在住）

◆飯田照明（1997年入会）

その仕事は還暦まで続けられる仕事かい？高3の時、母から言われた言葉でした。幼い時から母子家庭で育ったので手に職をつけて企業に就いてほしいとの考えでいた母でした。そのため就職に有利な工業高校の電気科に進み電力会社に入ることを考えていました。たまたまモノクロフィルムで被写体を撮り現像、焼き付けの実習があり暗室で印画紙に映像が浮かび上がった時の感動が忘れられずこんな仕事ができないかと考えた末にカメラマンになろうと写真学科のある大学に進学したいと母に相談した時に言われた言葉でした。間もなく還暦を迎ますがすでに亡くなった母との約束を守ることが出来ますがもう少しレンズを通して世界を見ていきたいと考えています。

（東京都北区在住）

◆由木 翔（2003年入会）

我が写真ライフ

太平洋戦争の末期、1945年4月。境港岸壁において「徴用船たまえ丸」が、火薬の荷上げ作業中に突然爆発した。120人死亡。309人が重軽傷を負い、431戸が全焼する。父の嘗む由木写真館も消失し、このとき私は、生後1年6ヶ月。この史実を両親から幾度となく聞かされて育ってきた。このせいか写真に対する興味と執着は、日々つのっていました。42歳。幼稚からの盟友が同じ和歌山の地で他界した。写真集一冊残せというのが彼の遺言だった。翌年に仕事を捨て、世界各国を訪れ、撮影取材にあたる。やがてフォトコンへ狂い咲き、1994年、日本フォトコンテスト年度賞1位受賞。得点23点は1991～2000年の10年間最高得点を樹立。我が写真道は、宿命のように流されて、プロへ転身。著書9冊出版。我が写真ライフは、友と父との絆である。

（和歌山県和歌山市在住）

◆西野嘉憲（2010年入会）

石垣島の魚突きの達人「海人三郎」の潜水漁の現場に内薄し、伝統的な迫い込み網漁の親方の生き様を追った写真集『海人一八重山の海を歩く』を平凡社より上梓しました。八重山の海を舞台に生きる海人（漁師）は、人が生きる普遍性と多様性を体现し、生態系の一部になつて生きていると感じます。美しい風景に目をとらわれがちな南の島で繰り広げられる、ヒトと自然の関係をご覧いただけ



◆飯塚明夫（1994年入会）

3年ぶりにアフリカの土を踏んだ。今回は少し長い取材期間が取れたので、タンザニア、ルワンダ、ガーナを取材した。タンザニアではビクトリア湖の漁師たちの漁の姿を追い、ルワンダでは、ジエノサイド25周年の記念行事とルワンダ経済を支えるコーヒーの生産地を取材した。高層ビルが増える大都市と、地方と



の経済格差が益々広がっていた。
(写真是ルワンダの首都キガリ)

ガーナでは小規模金採掘業者の取材を行ったが、環境破壊を食い止めたい政府の強い規制により、その数は激減していた。自然環境を守るのは大切だが、仕事をなくした多くの人々は今どうして暮らしているのかが気にかかる。（東京都中央区在住）

◆高尾啓介（1995年入会）

After The Gong『今を生きるアマチュアボクサーたちの肖像』をこの5月に刊行。1981年23歳で後輩らの写真を撮ろうと後楽園ホールへ向かい一瞬の切り取りを始めたのが今日に至った。拳に金を求めず、名声も求めぬ自らとの戦いの場。そんな、「修行僧」のようなボクサー達にエールを送る気持ちで撮り始めたアマボクシング。—そう言うとカッコ良いけれども…。

写真集は元学生ボクサー達の今を追い全国を廻り140名以上を2年半の歳月で新たに取材した。写真界では話題にもならないが、芸術、文化的作品の扱いを受けずとも、同じテーマを40年続けたことも幸いか。新聞書籍

などで取り上げて頂き感謝致します。まあ記録は記録だが、写真屋の意地で本として残す事が出来た。誰かが100年先、もっと先まで写真集を見て語り引き継いで頂けるならば本望です。

今日まで写真屋稼業を続けられた事を幸福な時間だったと感謝申し上げます。

（東京都葛飾区在住）

◆小林正明（2019年入会）

このたび川辺川ダム建設計画で、熊本県五木村のダムに沈むとされた土地に暮らし続けた老夫婦のドキュメンタリー写真集『土と生きる』（花乱社、4,400円+税）を出版しました。

2002年に撮影を始め、2005年にはダム水没予定地に残るのは1軒だけに。その後、2009年にダム建設が中止されます。老夫婦の暮らしは、自分たちで食べる野菜を作り、足りないものを買う自給自足に近いものでした。移転に際し、移転先にも農地を求めるが、国が応えぬまま建設中止。移転話もなくなります。老



夫婦は寄る年波に勝てず、2017年3月までに村を離れます。巨大公共工事がもたらす激変の中で、変わらぬ暮らしを続けてようとした姿を多くの方に見てもらい、感じていただきたいと思います。

（神奈川県横浜市在住）

◆大西成明（1987年入会）

写真集『骨肉』への想い

もっとも身近な自然である「私の身体」の本質をちゃんと見極めたいという気持ちが、写真を撮り始めた当初から私の中にありました。「生老病死」という言葉が指し示すように、われわれは生まれた瞬間から「みんな腐っていく存在」です。「死」は、肉の崩壊と鉱物（骨）への兆しを孕んでいます。「骨」と「肉」のイメージを巡りながら、われわれの生命がそもそも地球に飛来した隕石のかけらからでできているとい



う、壮大な「生命記憶」への旅を写真集で実現したいと取り組んだのが、写真集『骨肉』です。ページを繰るうちに、内臓の中を素手で触られているようなドキドキ感と胸騒ぎの渦に巻き込まれてもらえば、こちらの“思うツボ”にはまっていただけるんですが、さて……。(東京都狛江市在住)

◆中川十内 (1974年入会)

2010年に訪れた北インドの寒村ドゥンミリ村。

前日に町で調達した布を村人たちと木にくくりつけて設営した野外スタジオは、大地に帆のように風を孕む。その日はやさしい風が吹いていた。

ポートレイト撮影の原点のような被写体との対峙。日暮れまで夢中でシャッターを切り、ほぼ村人たちを撮り切った。その中から29の家族の肖像を2017年に展覧会で発表し、翌年にモノクロの写真集としてまとめたものである。(東京都港区在住)



◆島田 聰 (2002年入会)

独立以来、約40年続いているある月刊誌のグラビアの仕事があります。木更津社会館保育園は、その436番目の取材先でした。昨今忌避されることの多い「危険」「汚い」が昔日の様に豊かに育まれる、素晴らしい保育園だったのですが、取材を終えてほんの数日後、園長から「今回の写真で園の創立80周年記念写真集を作りたい」との電話。まだ撮った写真も見ていないのになんという意外な、でもとても嬉しい依頼だったので、有り難くお請けすることにしました。幸いとても好評とのことで、1000部の増刷も決定。諸々、有り難く、嬉しい限りです。(東京都世田谷区在住)



◆夏目安男 (2017年入会)

日比谷まで海だった東京湾、江戸時代から2008年までに5,730ヘクタールが埋め立てられました。これは千代田・中央・港・新宿の4区を合わせた面積に匹敵します。島の名の付いた佃島、夢の島などだけでなく、晴海、豊洲、新木場、中央防波堤なども埋立地なのです。東京湾岸の埋立地は「ユメノシマ」として、時代の「夢」を託されたドラマチックに変容を重ねてきました。オリンピック会場建設、築地の豊洲移転を機に、埋め立てで生まれた東京湾岸地帯「ユメノシマ」は今、変容の

さなかにあります。

晴海・海に向かって続く白い壁。葛西・渚に打



夏目安男

ち上げられたエイ。中央防波堤・コンテナターミナルで首をうなだれじっと海を見つめるキン。豊洲・超高層ビル群の谷間で瞑想する人……。江戸時代から今日まで、ゴミと残土の投棄・埋め立てで出来た大地、それはまるで現代の「ユメノシマ」。東京湾岸「ユメノシマ」の今をドキュメントしました。(東京都江東区在住)

◆高橋与兵衛 (1995年入会)

平成23年3月11日、東日本大震災が起きた。早速、多くの報道関係者、写真家等が、現地に向かい、生々しい惨状を伝えた。しかし、私には現地に赴くことも、取材の勇気もなかった。余りに惨い震災だったからである。あれから7年後、徳一の偉業を知った。彼は、奈良の東大寺、興福寺等で学んでいたが、若かった彼は現代の仏教は堕落していると嘆き、悲しみ、先ずは修行と旅に出た。会津の地に来ると、風光



高橋与兵衛

明媚な磐梯山、素朴で濃かい人柄に触れ、心を満たしていたが、予期しない磐梯山の大噴火(大同元年・806年)に遭遇する。その鎮魂と復興にと、わずか数年で100カ寺近くの寺院を建立した。その凄まじい情念を今に伝える寺院、仏像等に触れ、徳一の心清を悟って欲しい。これが、写真展の狙いであったが、多くの人から関心を戴き、感謝にたえない。

(新潟県胎内市在住)

◆岡本 央 (1987年入会)

8月に『ないないづくしの里山学校』(家の光協会)を出版しました。千葉県・木更津社会館保育園の「里山保育」と小学生を対象にした「土曜学校」の子どもたちの姿をドキュメンタリー風に構成しています。ゲームや市販の玩具で大人が作成したマニュアル通りに遊ぶことの多い現代っ子たちが、便利でも安全でもない“ないないづくし”的な里山で、なぜ生き生きと過ごせるのか。泥だらけになって水や土と格闘し、危険だとして子どもから遠ざけられることが多い火や小刀などで欲し



岡本 央

いものを手作りする。自分の意思で行動し、失敗を繰り返しながら、恐怖とも向き合いながら、仲間と協力し合って多くの貴重な経験を積んでいく子どもたち。子どもを見くびってはいけない。彼らが本来持っている能力を引き出す教育が、ここでは確かに行われています。(東京都練馬区在住)

◆公文健太郎 (2014年入会)

2011年、東北の被災地に立ったとき、何を撮っていいのかわからぬまま帰ってきたのを覚えています。そのことがひとつのきっかけとなって始めた日本を知る旅。『耕す人』につづき今回、東北の大河・北上川を源流の一滴から海まで旅し、流域に暮らす人たちを撮りました。ここにどんな暮らしがあるのか、どんな暮らしがあったのか、僕なりの回り道で答えを探しました。

キヤノンギヤラリーでは「暦川」と題し、北上川の250キロの流れを季節のうつろいと共に、日本の川と暮らしについて考えました。Jam Photo Gallery



では「川のある処」として、川に抱かれたどこにでもある、どこかの町を想像しました。ふたつの写真展は終了ましたが、同時に発売されました新作写真集『暦川』(平凡社)をどうぞよろしくお願いいたします。

(東京都小金井市在住)

◆小川泰祐 (1998年入会)

所属する日本建築写真家協会では2020年に創立20周年を迎えます。その周年記念企画事業として全国の会員の総意により、日々変貌を続ける東京都中央区銀座通りのパノラマ写真に再び挑戦する事になり、「銀座ジャック再び!」として、写真集発行及び写真展開催を企画し、この度写真集を発刊致しました。2005年に銀座中央通りの各建築を正面から捉え、有楽町側を昼間、晴海側を夕景として垂直なパノラマ状につなげ、「銀座ジャック品川で銀ぶら」と称してキヤノンサロン品川で写真展を開催しました。今回は15年後に再チャレンジした写真集です。その構成としては、ダブル観音開きの銀座中央通りパノラマ写真を主題とし、中央区銀座と名の付く路地を含む多くの建築、街並み、生活、銀座の年中行事などを建築写真家の目で捉え一冊にまとめた写真集です。ご高覧頂けましたら幸いです。



(神奈川県藤沢市在住)

受賞・出版・写真展 2018年・日本写真家協会会員（1月～12月）

作品による会員の動きを記録する意味から年1回受賞・出版・写真展をされた方々の記録を掲載しております。資料は会員のアンケートの回答をもとに作成しておりますので掲載もれもあることと思いますがご了承下さい。

■受賞

会員名	受賞名	時期	理由
岩本圭介	「ネイチャーズベストフォトグラフィーアジア2018」Landscape部門 HighlyHonored	7/31	作品「由布川峡谷」に対して
大竹英洋	第7回梅棹忠夫・山と探検文学賞	5/20	著書『そして、ぼくは旅に出た。はじまりの森ノースウッド』。自然写真家への道を歩む決意を決めた旅。しなやかな感性と、情景が浮かび上がるような静謐で新鮮な文体に対して写真集・写真展「弁造 Benzo」は北海道の原野にひとり暮らす開拓農民弁造さんの控えめで濃密な日常空間をめくりながら、写真表現の新たな地平を開いた。その確かな手応えを感じさせる作品に対して
奥山淳志	2018日本写真協会賞新人賞	6/1	
笹本恒子	「東京都名誉都民」称号贈呈	10/1	日本初の女性報道写真家として活躍しました。女性の社会進出の先駆者として、また、100歳を超えた現在も活動を続けている姿は、人々に希望や活力を与えている功績に対して
白鳥真太郎	藍綬褒章	11/14	
杉山テルゾウ	平成30年度外務大臣表彰	7/24	日本とモンゴルとの相互理解の促進に対して
富岡畦草	「第34回写真の町東川賞 飛彈野数右衛門賞」	8/4	写真集『変貌する都市の記録』(白揚社、2017年)ほか、東京を定点観測で撮影し続けてきた活動に対して
寺師太郎	第69回全国カレンダー展 第1部門 銀賞	1/22	カレンダーの機能を満たすために、技術的、デザイン的に優れていると判断
西村豊	平成30年度自然保護活動等功労者長野県知事表彰	7/28	永年にわたり自然保護、小学校、大学等で自然教室、自然環境教育にとりくんできた
アーレス・オズボーン	TIFA Honorable Mention Winner	4/3	「Sea Objects」に対して
アーレス・オズボーン	The Eighth Annual Exposure Photography Award	6/14	「Oyako」に対して
山田哲也	西宮市技能功労者表彰	11/	優れた技能を持ち、社会に貢献したことに対して

■出版

(写真集・写真関係著書・電子書籍・CD-ROM・DVD・ビデオ等)

会員名	著書名	発行所	発行/	定価
足立君江	カンボジア 里の民	現代写真研究所出版局	12/20	2,500
荒川好夫	C62重連 最後の冬 -「ニセコ」を追った21日間-	OFFICE NATORI	9/1	2,315
安念余志子	うたかた	風景写真出版	8/8	1,900
池田勉	長崎・天草 潜伏キリシタン祈りの里	朝日新聞出版	7/30	4,300
石田研二	Infrared Photography 2018 赤外線撮影の世界 VI -形	石田研二	3/22	
石引まさのり	大東島 南と北のモノローグ うふあがり島	ポーダーインク	1/23	1,800
江成常夫	多摩川 1970-74	JCII フォトサロン	1/5	800
太田宏昭	ばんえい競馬 砂の軌跡	小学館	3/5	3,241
奥山淳志	弁造 Benzo	奥山淳志	1/20	
おちあいまぢこ	うつくしいもの（共著）	日本キリスト教団出版局	9/25	1,200
風間耕司	富山写真語 - 297国登録有形文化財 滑川市立田中小学校旧本館 万華鏡	ふるさと開発研究所	2/	500
梶山博明	彩の記憶 ニュージーランド	日本写真企画	3/6	2,000
亀田昭雄	渡良瀬の風景 I・葦庵づくり	アトリエ Winds	9/1	3,000
木村正博	新宿御苑の四季 撮影・散策ガイド	日本カメラ社	4/15	1,500
熊切圭介	揺れ動いた'60年代	「ドネム列・フォト好きハマ宮崎」実行委員会	10/3	
熊切大輔	利那 東京で	日本写真企画	7/31	2,000
桑原史成	風の村	生活クラブ風の村	10/17	1,500
結解学	写真で振り返る JR ダイヤ改正史（共著）	飛島出版	7/1	1,300
小柴一良	Fukushima 小鳥はもう鳴かない	七つ森書館	12/1	3,000
小林恵	フクシマノート	冬青社	10/25	4,500
小松健一	彝人—中国大陸の山岳民族	日本中国友好写真協会	3/1	1,000
小松健一	民族曼陀羅－中國大陸	みづき書林	6/14	12,000
(故)近藤龍夫	近藤龍夫が記録した昭和Ⅱ、Ⅲ	岐阜新聞社	4/1	各 1,852
齋藤康一	歳月中国 1965	山東画報出版社	1/	1,200 元
齋藤康一	40年後再回首	新世語文化有限公司	10/	16,000 元
佐藤秀明	LONESOME COWBOY	ボイジャー	10/26	4,800
佐藤真樹	国宝 柏尾山 大善寺 開山千三百年記念写真集	大善寺	10/1	
佐藤仁重	THE BIG APPLE	日本カメラ社	9/1	2,800
瀬戸秀美	世界の名門バレエ団（共著）	世界文化社	12/25	2,300
竹内トキ子	2019 カングー「こころの富士」	辰巳出版	9/20	1,200
竹中勝	沖縄 その光と影の記録	リープル出版	11/20	3,500
谷泰宏	2016-2018 IBI ONO	岐阜新聞社	5/16	2,315
田沼武能	月刊「たくさんふしぎ」394号「地蔵さまと私」	福音館書店	1/1	667
土田ヒロミ	フクシマ 2011-2017	みすず書房	1/25	12,000
富岡畦草	東京定点巡礼	日本カメラ社	4/21	2,200
富塚晴夫	富士きよなる	岡田紅陽写真美術館	5/23	1,100
富山愛子	マダガスカル	東方出版	9/11	1,500

会員名	著書名	発行所	発行/	定価
長尾 迪	那須川天心 フォトブック FLY HIGH	双葉社	6/20	1,800
中川喜代治	江戸の悪 PAT II	太田記念美術館	6/1	2,500
中川喜代治	没後160年記念歌川広重	太田記念美術館	9/1	2,500
中川十内	風に吹かれて “ドゥンムリ村の29の家族の肖像”	BB BOOKS	2/	4,000
中川十内	Philosopher's stone	市兵衛町画廊	7/	2,500
中島眞理	最新犬種図鑑 写真で見る犬種とスタンダード	インターペー	7/10	5,400
中谷吉隆	蠢く街・新宿 What 1955-2017	日本写真企画	3/20	1,500
長野良市	DVD ゼロの阿蘇 500日の記録 (共著)	九州学び舎	/	2,000
長野良市	ゼロの阿蘇 500日の記録	シーズ・プランニング	1/31	2,000
中村卓哉	辺野古海と森がつなぐ命	クレヴィス	9/10	2,315
西川祐介	浮き世	リープル出版	12/10	3,000
野町和嘉	ETHIOPIA 伝説の聖櫃	クレヴィス	1/28	3,700
野町和嘉	PLANET	キヤノンギャラリー	5/1	70,000
野本暉房	神饌 供えるこころ 奈良大和路の祭りと人 (共著)	淡交社	3/16	1,800
秦達夫	屋久島 Rainy Days	風景写真出版	6/1	2,750
(故)林忠彦	時代を語る 林忠彦の仕事	光村推古書院	4/30	3,800
(故)林忠彦	林忠彦生誕100周年作品BOX「無頼」	新潮社	10/30	120,000
(故)林忠彦	林忠彦 昭和を駆け抜ける	クレヴィス	11/	2,500
馮学敏	中国 <日本印象>	中国文化センター	12/11	
深澤武	奄美・琉球	青菁社	7/24	2,000
福田豊文	パンダでおぼえることわざ慣用句	学研プラス	6/19	1,200
アーレス・ズボン	OYAKO An Ode to Parents and Children	Sora Books	11/	1,580
細江英公	おとこと女	JCII フォトサロン	2/28	1,000
堀江重郎	屋久島 神々からの伝言	南方新社	7/20	2,500
前川貴行	creation:	新日本出版社	6/15	7,200
前田憲男	日本産カエル大鑑 (共著)	文一総合出版	8/31	27,000
松尾順造	天空の十字架	長崎文献社	7/10	1,600
水谷草人	世界の山と世界の屋根を滑る 1967-2017	JCII フォトサロン	5/8	1,000
湊和雄	世界が注目する南の島 やんばるの森	少年写真新聞社	10/17	1,500
宮澤正明	H 45 HIDEKI SAIJO	青志社	7/30	5,000
持田昭俊	とっきゅう JAPAN!	小峰書店	3/26	1,200
桃井和馬	和解への祈り	日本キリスト教団出版局	11/1	2,000
森田敏隆	日本の原風景 滝 (共著)	光村推古書院	7/24	2,800
諸河久	軽便風土記	JCII フォトサロン	9/4	800
諸河久	モノクロームの私鉄原風景	交通新聞社	12/4	2,800
八木祥光	たんぽぽ仙人「風のたより」No.9 ドラマ 80×240 百々海岸	やるき出版	3/27	
八木祥光	日本の自然「身近な草木花」(共著)	やるき出版	11/1	3,000
八木祥光	神々と妖怪の棲む立山黒部	やるき出版	11/16	1,000
箭内博行	ニッポン 離島の祭り	グラフィック社	9/25	2,200
箭内博行	ダイアリージャパン2019 日本の離島風景	E&E ホールディングス	10/25	1,700
山縣勉	観察 SURVEILLANCE	禅フォトギャラリー	11/4	6,000
山岸伸	瞬間の顔 Vol.10 639	山岸伸写真事務所	3/16	2,315
山口一彦	鹿が舞う町	静岡新聞	12/13	3,000
山村善太郎	悠久の日本人のこころ 磐座	求龍堂	11/15	3,600
山本皓一	素顔の田中角栄 密着! 最後の1000日間	宝島社	7/11	1,000
横塚眞己人	マングローブの木の下で	小学館	6/20	1,300
横塚眞己人	季節のごちそう ハチごはん	ほるぶ出版	9/25	1,500
吉永陽一	空鉄の世界 空から見つめた鉄道情景	日本写真企画	5/10	1,000
吉野信	吉野信的アフリカ 写真家が旅して感じた17のストーリー	天夢人	7/8	1,800
吉野雄輔	山渓ハンドイ 図鑑 改訂版 日本の海水魚	山と渓谷社	9/17	3,800
林明輝	Design Scape	山と渓谷社	3/16	3,700
和田芽衣	わたしと娘(ゆき)	慧眼株式会社	6/15	2,778
(故)渡辺英明	死ぬにはいい日	渡辺英明	8/22	3,000

■写真展 (一門展・巡回展・常設展などの写真展は省略させていただきました)

会員名	写真展名	会期	会場
青木勝	青木勝 YS-11名機伝説 2018	10/13～12/2	所沢市・所沢航空発祥記念館 特別展示会場
青木紘二	青木紘二クライアントワーク Part1	1/18～1/24	キヤノンギャラリー名古屋、高岡市
青木紘二	冬季オリンピック 報道の世界	10/13～11/25	高岡市・ミュゼふくおかカメラ館
浅井秀美	東京下町日和-平成の墨田-	4/11～4/22	墨田区・フリースペース緑壺
浅岡恵	Saigon	4/28～6/1	千代田区・日本外国特派員協会 メインバー・ギャラリー
浅川英郎	Musikfoto	1/4～1/18	ギャラリー・アートグラフ
足立君江	「カンボジアの農村」-暮らしの音が吹き抜ける-	2/1～2/7	ポートレート・ギャラリー
足立君江	カンボジアの子どもたちと	12/20～12/26	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
阿部俊一	瞬光が描く美瑛の大地	11/14～11/26	リコーアイメージングスクエア大阪
荒川好夫	北海道冬 C62 栄光の記録	8/17～8/19	ピックサイト 第19回国際模型コンベンション会場内

会員名	写真展名	会期	会場
荒川好夫	むかし懐かし蒸気機関車	10/6～10/7	杉並区高井戸区民センター
安珠	ピューティフル トゥモロウ～少年少女の世界～	7/11～8/28	キヤノンギャラリーS
安念余志子	うたかた	8/8～8/20	リコーアイメージングスクエア新宿 ギャラリーI & II
飯島幸永	その風土に生き抜く	5/16～6/17	リコーアイメージングスクエア銀座 ギャラリー A.W.P
飯田裕子	楽園創世～南太平洋の命とマナ(靈力)を訪ねて～	4/17～4/29	京都市・rondokreanto
池田宏	「南極之戀半世紀」1967-2018	10/20～11/18	台湾台北市・1839 當代藝術
池谷俊一	池谷俊一多角界	7/～11/	御殿場写真ギャラリー
石田研二	Infrared Photography 2018 赤外線撮影の世界VI - 形	3/22～3/31	EIZO ガレリア銀座
石引まさのり	うふあがり島IV	3/3～3/30	千代田区・日本国外特派員協会
石引まさのり	うふあがり島V 大東島 南と北のモノローグ	8/7～8/12	那覇市・沖縄県立美術館
今森光彦	地球いきものがたり	4/11～5/2	キヤノンオープンギャラリー1
今森光彦	里山 比琶湖水系を旅する	4/25～5/14	リコーアイメージングスクエア大阪
岩木登	光は曲がって届く～南八甲田	9/27～10/3	キヤノンギャラリー銀座
岩本恵次	動植綵写～憧憬若冲～	6/15～6/21	ギャラリー・アートグラフ
宇井眞紀子	アイス、いのもの営み	2/2～2/24	中野区・ギャラリー冬青
宇井眞紀子	アイス、現代の肖像	3/13～3/18	東村山市立中央公民館1階展示室
内山アキラ(最)	海を渡る白鳥	11/6～11/11	中央区・藤屋画廊
榎並悦子	彩風 南ぬ島	10/11～10/17	キヤノンギャラリー銀座
江成常夫	多摩川 1970-74	1/5～1/28	JCII フォトサロン
江成常夫	相模原市収蔵作品展「昭和・時代の肖像」	3/4～4/1	相模原市・光と緑の美術館
江成常夫	相模原市収蔵作品展「After the TSUNAMI」東日本大震災	8/11～9/2	相模原市民ギャラリー
太田有美子	by the sea 湘南	6/13～6/25	リコーアイメージングスクエア新宿 ギャラリーI & II
大竹英洋	動物写真展	7/21～8/26	柏崎市立博物館
大竹英洋	大竹英洋写真展	11/6～12/9	福井県立図書館
大塚勝久	西表石垣国立公園 八重山の原風景	7/1～7/31	沖縄県石垣市・ホテルミヤヒラギャラリーロード
大沼英樹	忘れえぬ千年桜	3/3～3/12	石巻市・石巻河北ビル1階・かほくホール
大野雅人	Cub-jo	9/7～9/20	ソニーアイメージングギャラリー銀座
大山謙一郎	うさぎ追いしかの山	1/11～1/20	熊本市・ギャラリー・ジャッド
大山謙一郎	炎えた女(もえたひと)	8/9～8/15	ポートレートギャラリー
奥山淳人	庭とエスキース	1/24～1/30	銀座ニコンサロン
小倉隆人	吉野川源流～劍山系から 2016～2017	3/2～3/11	豊島区・床屋ギャラリー
織作峰子	恒久と遷移の美を求めて	7/13～7/22	中央区・和光ホール
織作峰子	「ウイリアムモリス」英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡	9/8～11/11	上田市立美術館
織作峰子	スイスアルプス鉄道の旅	11/13～11/26	富士フィルムイメージングプラザ内ギャラリー
KAO'RU(柴原薫)	KAO'RU Exhibition Vol.14 「Flower Cocktail」	12/17～12/23	art space kimura ask?
柿木正人	「震災よ！」東日本大震災から7年	2/23～3/1	ギャラリー・アートグラフ
樋山博明	REAL ニュージーランド	3/6～3/12	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY2
片岡司	wind of mind (こころの風)	7/20～7/26	オリンパスギャラリー大阪、広島市
加藤恵美子	Northern Beauty of four Seasons -極北の雪月花-	5/11～5/17	富士フォトギャラリー銀座
金井杜道	WOOD NOTE II /GELATIN SILVER PRINT	6/23～7/15	世田谷区・Monochrome Gallery RAIN
叶悠眞	大パンダ展	8/26～9/6	足立区・シアター 1010 ギャラリーA
上岡弘和	日本の可動橋 -勝闘橋とその仲間-	8/17～8/23	富士フィルムフォトサロン東京
刈田雅之	ハコモリ	2/13～2/25	京都写真美術館 ギャラリージャバネスク
川島浩之	銀河のごとく フラメンコ舞踊家 鍵田真由美	11/30～12/6	オリンパスギャラリー大阪
川隅功	匂旬景	6/15～6/21	富士フォトギャラリー銀座
川田喜久治	ロス・カブリチョス～インスタグラフィー 2017	1/12～3/3	港区・PGI
川田喜久治	百幻影 -100 Illusions	8/31～10/11	キヤノンギャラリーS
川廷昌弘	ジャバニーズ・エコロジー 南方熊楠 ゆかりの地を歩く	5/22～6/17	千代田区立日比谷図書文化館3階
川村剛弘	青ヶ島 神の造形	5/1～5/31	伊東市・伊豆高原 五木祭 2018 no.37 ミモ座リゾート
木村恵一	車椅子からの…	4/5～4/11	キヤノンギャラリー銀座
木村芳文	手取川	4/19～4/25	キヤノンギャラリー銀座
金城真喜子	女ともだち そして私	4/4～4/23	リコーアイメージングスクエア大阪 ギャラリー
久間昌史	FOOD IS ...	5/17～5/23	キヤノンギャラリー銀座
熊切圭介	揺れ動いた'60年代	10/3～10/8	宮崎県立美術館県民ギャラリー2
熊切大輔	刹那 東京で	7/31～8/20	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
小澤太一	KIDS A GO GO !	11/9～1/17	大分県・Gallery IWAQ
小柴一良	FUKUSHIMA 小島はもう鳴かない	8/8～8/28	銀座ニコンサロン
小城崇史	つなぐ音 つむぐ人	3/20～3/25	京都写真美術館 ギャラリージャバネスク
小城崇史	Exciting Moment of Sports Vol.1	9/28～10/3	オリンパスギャラリー東京
小松健一	彝人－中国大陸の山岳民族	2/21～3/5	リコーアイメージングスクエア新宿
小松健一	奄美人と彝人－海の民 山の民	8/3～8/27	奄美市・田中一村記念美術館、鹿児島市
小松ひとみ	みちのく色語り	1/12～1/17	富士フィルムフォトサロン福岡
齋藤康一	「40年回眸」	11/2～11/18	中国・北京中
齋藤ジン	はかけ	6/20～7/1	渋谷区・ピクトリコ ショップ&ギャラリー表参道
齋藤ジン	葉脈	11/22～11/28	キヤノンギャラリー銀座
坂井田富三	～想像と創造～ Landscape Quartet	4/10～4/15	京都写真美術館 ギャラリージャバネスク
坂井田富三	#ねこまみれ3	7/28～8/10	名古屋市・ソニーストア名古屋
坂井田富三	#ねこまみれ4	9/5～9/15	EIZO ガレリア銀座
坂井田富三	#ねこまみれ5	11/23～12/7	大阪市・ソニーストア大阪・a プラザギャラリースペース
坂本憲司	もうひとつの時間	7/20～8/4	プランカ HANARE

会員名	写真展名	会期	会場
桜井秀	DRY EARTH -乾地-	5/24 ~ 5/30	キヤノンギャラリー銀座
佐々木伸	Vivimos en Bolivia! ~ボリビア・アルティプラーノの生活と人々~	4/15 ~ 4/22	香川県・アイバル香川
佐藤理一	ギリシヤの白	3/20 ~ 4/7	港区・ギャラリー E&M 西麻布
佐藤昭一	2018「日々のなかから」	5/23 ~ 5/28	町田市フォトサロン
佐藤成範	ボッワナ	10/25 ~ 10/31	ギャラリー・フィレンツエ
佐藤尚	47ぼくのより道	3/16 ~ 3/21	富士フィルムフォトサロン福岡
佐藤秀明	LONESOME COWBOY	11/14 ~ 11/26	リコーカメージングスクエア新宿 ギャラリー I & II
佐藤倫子	CAMBO	1/9 ~ 2/3	渋谷区・ピクトリコ ショップ&ギャラリー表参道
佐藤倫子	MICHIKO 2018 ワタシテキ	6/19 ~ 7/9	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1+2
佐藤仁重	X-New York	7/27 ~ 8/2	富士フィルムイメージングプラザ内ギャラリー
三田崇博	トキナーレンズで撮る世界遺産	1/22 ~ 2/24	ケンコー・トキナーサービスショップ内ミニギャラリー
三田崇博	World Heritage Journey	6/2 ~ 6/8	大阪市・ビジュアルアーツギャラリー
三田崇博	古代エジプト 世界の遺産	10/2 ~ 10/14	大阪府立弥生文化博物館 ミニギャラリー
三田崇博	エジプト、そして中央アジアへ	11/23 ~ 12/2	京都府立けいはんな記念公園ギャラリー1月の庭
四方伸季	島時間	9/12 ~ 9/16	渋谷区・ピクトリコ ショップ&ギャラリー表参道
柴田明蘭	小さな都の物語	4/24 ~ 5/3	京都市・ギャラリー 270
渋谷利雄	一能登立国1300年記念一気多の神々写真展	8/4 ~ 8/26	輪島市・輪島市民ギャラリー いろは蔵
清水重蔵	ブナ人 -新潟-	2/23 ~ 3/1	富士フィルムフォトサロン東京
清水哲朗	New Type	3/16 ~ 4/12	エブソンイメージングギャラリーエブサイト
下瀬信雄	蛇目舞	5/30 ~ 6/5	銀座ニコンサロン
庄田洋	あの日を忘れない 東日本大震災3.11から今日まで	9/14 ~ 9/17	国分寺市・cocobunji プラザ セミナールーム
白鳥真太郎	貌・KAO II 白鳥写真館「これから…」	4/21 ~ 6/24	高岡市・ミュゼふくおかカメラ館
白旗史朗	フジクロームで描く美しき日本の屋根	1/4 ~ 1/11	富士フィルムフォトサロン東京
杉本恭子	彩り季節風～ヨーロッパの風～	3/16 ~ 3/22	ギャラリー・アートグラフ
杉山テルゾウ	杉山晃造展	7/26 ~ 8/1	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
鈴木一雄	日本列島 花乃聲	4/8 ~ 4/22	福島テルサ・ギャラリー 4F
鈴木智明	木曾の冬	2/24 ~ 3/4	豊橋市・Gallery 垂鳥絵
須田一政	民謡山河（もう一つのバージョンより）	3/23 ~ 4/21	横浜市・PAST RAYS
須田一政	現代東京図絵1979-82	9/29 ~ 11/3	横浜市・PAST RAYS
平寿夫	サビール イエメン ハダラマウトの水飲み場たち	4/6 ~ 4/11	オリンパスギャラリー東京
平寿夫	サビール イエメン ハダラマウトの水飲み場たち2	8/1 ~ 8/31	京都市・NTT西日本京都支店 三条コラボレーションプラザ、奈良市
高砂淳二	Dear Earth	7/14 ~ 9/17	山梨県・岡田紅陽写真美術館
高砂淳二	祝福の瞬間 - Blessing from the Universe -	11/3 ~ 11/15	中央区・GINZA OKAMI
高橋敬市	靈気満つ景	6/29 ~ 10/14	富山市・ギャルリ・ミレー
宅間國博	Enjoy the Viewpoint	10/31 ~ 11/4	ピクトリコギャラリー表参道
竹内トキ子	富士山～鱗彩～	1/4 ~ 1/15	リコーカメージングスクエア新宿
竹内トキ子	富士彩雲	1/4 ~ 1/31	富士フィルムフォトギャラリー調布
竹内敏信	日本の原風景を求めて	12/5 ~ 2/23	岡崎市・岡崎市美術館
竹中勝	沖縄その光と影の記録	12/6 ~ 12/12	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
谷泰宏	第2回タニヤスピロ スナップ展	10/2 ~ 10/14	岐阜市・古民家カフェ&ギャラリー 水の音
田沼武能	時代を刻んだ貌	4/21 ~ 6/24	仙台市・仙台文学館 企画展示室
土田ヒロミ	2011-2017 フクシマ	3/7 ~ 3/20	銀座ニコンサロン
富塚晴夫	富士きよらなる	5/23 ~ 7/12	山梨県・岡田紅陽写真美術館
中井精也	笑顔あふれる「ゆる鉄」ワールド	4/7 ~ 6/24	川崎市民ミュージアム
中井精也	東急田園都市線開業50周年記念 DT moment	4/7 ~ 6/24	川崎市・アートギャラリー
中川喜代治	羅漢、石仏と日本の風景	3/28 ~ 4/2	かんなみ仏の里美術館
中川十内	Philosopher's Stone	7/2 ~ 7/13	港区・市兵衛町画廊 /TAMANI
永嶋サトシ	[Color Stream IV]Crowd of TOKYO	8/1 ~ 8/18	EIZO ガレリア銀座
中田昭	【祇園祭】GION MATSURI	9/15 ~ 11/4	米・ポートランド日本庭園
中谷吉隆	蠢く街 新宿 What 1955-2017	3/20 ~ 4/9	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1+2
中津川隆康	VIA AURELIA	1/31 ~ 2/5	渋谷区・Space Jing
中野耕志	WINGS 翼のある風景	1/23 ~ 2/5	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1
中村征夫	『極夜』地球最北の村 シオラパルクへ1977	1/6 ~ 1/17	ポートレートギャラリー
中村征夫	海中を彩る仲間たち	6/11 ~ 8/31	中央区・ノエビア銀座ギャラリー
中村卓哉	海と森がつなぐ命 - 迎野古 -	9/11 ~ 10/1	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
中村友一	日本彩々	1/8 ~ 1/13	中央区・日本橋「小津和紙」2F 小津ギャラリー
名畑文巨	Positive Energies	5/16 ~ 5/21	英・Gallery @ DXO
並木隆	心花 こころ	4/27 ~ 5/10	ソニーイメージングギャラリー銀座
奈良原一高	受贈記念肖像の風景	1/25 ~ 5/7	島根県立美術館 展示室4・展示室5
奈良原一高	奈良原一高 スペイン	2/3 ~ 4/1	愛知県・高浜市やきもの里かわら美術館
奈良原一高	奈良原一高展	7/23 ~ 8/10	港区・ウナックサロン
奈良原一高	人間の土地と“グループ「在実者」”第一部	11/14 ~ 2/11	島根県立美術館 展示室4
奈良原一高	人間の土地と“グループ「在実者」”第二部	11/16 ~ 2/4	島根県立美術館 展示室5
西田茂雄	世界遺産・仁和寺	10/16 ~ 10/28	京都写真美術館
西野嘉憲	房州捕鯨	8/9 ~ 8/16	和歌山県・太地町立石垣記念館
野口毅	lighthouse V 明治期の保存灯台	3/2 ~ 3/8	富士フィルムフォトサロン大阪
野町和嘉	異境エチオピア	1/5 ~ 1/17	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
野町和嘉	PLANET	1/5 ~ 1/17	キヤノンギャラリー銀座
野町和嘉	World Heritage Journey 世界遺産を訪ねて	1/5 ~ 1/30	キヤノンオープンギャラリー1 キヤノンSタワー2 F
野町和嘉	地球創生 ICELANDSCAPE	12/6 ~ 12	キヤノンギャラリー銀座

会員名	写真展名	会期	会場
野本暉房	神まつり…	4/4 ~ 4/8	奈良市・奈良県文化会館
ハービー・山口	ALMOST 50 YEARS	6/28 ~ 8/28	フレームマンエキシビションサロン銀座
芳賀日出男	伝えるべきもの、守るべきもの 祭りで人は神になる	1/4 ~ 3/31	FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館
橋本紘二	『農』は人を癒やす	5/29 ~ 6/26	キヤノンオープンギャラリー1
秦達夫	Rainy Days 屋久島	5/25 ~ 5/31	富士フィルムフォトサロン東京
竹内・リカ(英隆)	ル・コルビュジエを追いかけて	10/16 ~ 11/5	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
塙真一	Paris ~ liberté ~	9/28 ~ 10/4	富士フォトギャラリー銀座スペース 1・2
原田寛	KATACHI 古都のかたち～日本のこころ	2/20 ~ 2/25	鎌倉市・鎌倉生涯学習センター 市民ギャラリー
HARUKI	遠い記憶。II	11/8 ~ 11/14	キヤノンギャラリー銀座
鴻学敏	中国・日本印象	12/12 ~ /26	港区・中国文化センター
深澤武	奄美・琉球	7/25 ~ 8/7	銀座ニコンサロン
福田俊司	国境なき自然	9/10 ~ 10/12	ロシア・国立マリンスキー劇場沿海地方ステージ
藤村大介	世界のまがとき	1/19 ~ 1/25	富士フィルムフォトサロン大阪
藤村大介	Earth Glow	8/4 ~ 8/26	坂出市・坂出市民美術館
ブルース・オズボーン	葉山ハート OYAKO	4/21 ~ 5/13	神奈川県・葉山町森戸神社
ブルース・オズボーン	葉山 ART WALK 展	6/3 ~ /	神奈川県・葉山加地邸
ブルース・オズボーン	「親子の日」特別写真展	7/16 ~ 7/29	アミュプラザおおいた
ブルース・オズボーン	ブルース・オズボーンと親子写真展	9/12 ~ 10/5	新宿区立新宿文化センター
ブルース・オズボーン	～「親子の日 2018」に出会った親子～	9/14 ~ 9/19	オリンパスギャラリー東京
ブルース・オズボーン	沖縄「親子の写真展」	10/23 ~ 10/28	沖縄プラザハウスショッピングセンター
細江英公	人間写真家細江英公「旭日重光章」受章記念写真展	1/22 ~ 3/23	中野区・写大ギャラリー
細江英公	おとこと女	2/27 ~ 4/1	JCII フォトサロン
細江英公	ガウディの世界「ビンテージ」展	5/10 ~ 5/26	中央区・Contemporary HEIS art
細江英公	芸術家たちの肖像	11/17 ~ 12/23	渋谷区・Galerie LIBRAIRIE6
前川貴行	creation:	5/31 ~ 6/6	キヤノンギャラリー銀座
丸田あつし	北海道の夜景	10/12 ~ 10/14	SKY CIRCUS サンシャイン 60 展望台
水越武	森林列島	9/19 ~ 12/16	安曇野市・田淵行男記念館
水越武	MY SENSE OF WONDER	11/6 ~ 12/1	中央区・コミュニケーションギャラリーふげん社
水谷章人	アスリートの一瞬	4/21 ~ 8/28	湯島上・フォトギャラリーブルーホール
水谷章人	信濃路	4/24 ~ 7/16	安曇野市・田淵行男記念館
水谷章人	世界の山と世界の屋根を滑る 1967-2017	5/8 ~ 6/3	JCII フォトサロン
水本俊也	写真で伝える因州和紙の魅力	4/21 ~ 6/24	鳥取市・あおや和紙工房
水本俊也	小鳥の家族～メモリアル～	12/21 ~ 12/26	鳥取市・中電ふれあいホール
溝縁ひろし	祇さん芸妓まめ鶴	5/24 ~ 6/5	京都市・ギャラリー古都
宮沢あきら	初夏の葉っぱのある風景	6/8 ~ 6/21	富士フィルムフォトサロン東京 ミニギャラリー
宮澤正明	SIGHT ~光景~	2/1 ~ 2/25	石川県・金沢城五十間長屋
宮澤正明	「ドナルド・キーン 儒教に還る」二章、三章	4/1 ~ 8/12	新潟県・ドナルド・キーンセンター柏崎
宮澤正明	ドナルド・キーンのまなざし	7/7 ~ 8/5	北区・旧古河邸・大谷美術館 1階フロア
宮澤正明	「ドナルド・キーン 日本の心を伝えて」	10/12 ~ 12/22	新潟県・知足美術館
宮澤正明	能登	10/28 ~ 11/30	石川県・のと里山里海ミュージアム
森井頼紹	東海道五十三次祭り旅	9/7 ~ 9/13	富士フィルムフォトサロン東京
諸河久	軽便風土記	9/4 ~ 9/30	JCII フォトサロン
八木祥光	DRAMA80 × 240 百々海岸 DOU DOU BEACH	3/27 ~ 4/1	名古屋市・ノリタケの森ギャラリー、豊橋市・千代田区
八田公子	博多祇園山笠「夏の風」	6/13 ~ 7/17	福岡県・岩田屋三越「リブロ」
八田公子	キユーバの風	8/23 ~ 9/4	福岡県・ラテン文化センター「ティエンボ」
山岸伸	瞬間の顔 Vol.10	3/16 ~ 3/21	オリンパスギャラリー東京
山岸伸	2018 End of Summer ~また夏が終わる~	10/19 ~ 11/1	ソニーイメージングギャラリー銀座
山村善太郎	悠久の日本人のこころ・磐座	10/31 ~ 11/6	中央区・日本橋三越本店 本館1階
山本治之	ぶな林彷徨 -美しきぶな林の四季-	1/12 ~ 1/18	富士フィルムフォトサロン大阪
山本昌男	"Tori"	1/9 ~ 3/3	米・Etherton Gallery、西
山本昌男	"Yamamoto Masao"	3/10 ~ 5/5	伯・Instituto Figueiredo Ferraz
山本昌男	"A Box of Ku"	4/6 ~ 6/17	露・Multimedia Art Museum
山本昌男	"Microcosm Macrocosm"	9/15 ~ 12/23	独・Alfred Ehrhardt Stiftung、加
横井洋司	「柳家さん」師匠十七回忌	5/15 ~ 5/19	豊島区・高岩寺会館
吉竹めぐみ	AN ARAB STORY;The S'Baa Clan of Syria 1995-2011	8/2 ~ 8/29	アメリカニューヨーク・Gallery AWA
吉竹めぐみ	ARAB Bedouin of the Syrian Desert	9/22 ~ 9/23	イギリス・オックスフォード大学 St John's College
吉永陽一	路	2/6 ~ 2/17	港区・Gallery 5610
吉永陽一	いきづかいいーいつもの鉄路	4/27 ~ 5/10	富士フィルムフォトサロン東京
米田堅持	海上保安の表情	10/24 ~ 10/30	フレームマンエキシビションサロン銀座 1F
林明輝	DesignScape - 新しい風景のかたち -	2/16 ~ 3/1	ソニーイメージングギャラリー銀座
若生靖夫	WE LIVE IN HARLEM	6/14 ~ 6/27	アメリカ・Dwyer Cultural Center
和田芽衣	私たち普通のお母さん	2/17 ~ 2/24	埼玉県・飯能市市民活動センター、長崎県
和田芽衣	娘（病）とともに生きていくく	5/19 ~ /	東京国際フォーラム B ブロック 7F ホール B
和田芽衣	わたしと娘（ゆき）	8/31 ~ 9/2	神戸市・Mirage Gallery
渡辺幹夫	フクシマ無窮 II - 7 年が過ぎて	3/9 ~ 3/15	ギャラリー・アートグラフ
物故展（常設展は省略させていただきました）			
(故)大竹省二	ある写真家のアンソロジー	8/29 ~ 9/22	千代田区・KKAG
(故)木村伊兵衛	スナップ撮影の名手 木村伊兵衛	6/30 ~ 10/4	京都市・ライカギャラリー京都
(故)木村伊兵衛	パリ残像	10/24 ~ 11/5	中央区・日本橋三越本店 新館 7階催物会場

会員名	写真展名	会期	会場
(故)津田洋甫	初期作品 1950-60 年代	8/25 ~ 9/9	渋谷区・MEM
(故)林 忠彦	写真家林忠彦が見た画家 織田廣喜	3/13 ~ 4/1	福岡県・嘉麻市立織田廣喜美術館
(故)林 忠彦	キヤノンフォトコレクション「東海道」	3/22 ~ 3/28	キヤノンギャラリー大阪
(故)林 忠彦	昭和が生んだ写真・怪物 時代を語る林忠彦の仕事 第1部、第2部	4/1 ~ 7/31	FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館
(故)林 忠彦	昭和の目撃者 林忠彦 VS 土門拳	4/19 ~ 7/17	山形県・土門拳記念館
(故)林 忠彦	「異郷好日 1973 ~ 1989」世界を巡る心の旅	4/20 ~ 5/10	ギャラリー・アートグラフ
(故)林 忠彦	カストリ時代 1946 - 1953	8/10 ~ 9/29	千代田区・ギャラリー一冊
(故)林 忠彦	文士の肖像・林忠彦写真展	9/20 ~ 4/14	山口県・中原中也記念館
(故)林 忠彦	林忠彦の世界 それは『昭和』だった	11/22 ~ 12/24	山口県・周南市美術博物館
(故)林 忠彦	文士の時代 - 貌とことば	12/8 ~ 2/23	日黒区・日本近代文学館・展示室
(故)藤本四八	富士山	7/21 ~ 8/19	飯田市・飯田市美術博物館
(故)細江光洋	細江光洋の世界展	11/10 ~ 12/9	飛騨市・飛騨市美術館
(故)前田真三	色彩の写真家(たびびと) 前田真三出合いの瞬間をもとめて 第1部 ふるさと調の時代	11/1 ~ 12/28	FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館
(故)渡辺義雄	名誉市民渡邊義雄 生誕 110 周年記念展	2/24 ~ 2/28	三条市・三条東公民館

グループ展（会員中心のものを掲載させていただきました）

グループ展名

舞台写真家たちの挑戦

プラカメラ

隼人－中国大陆の山岳民族

Photo Unit J12 Vol.2

JPS2016 MEMBERS 写真展「My Works」

JPS2018 年新入会員展「私の仕事」

北海道が好き

JPS7_2018"my life 5"

会員数

会員 5 名

会員 5 名

小松健一、島里島沙

会員 6 名

会員 15 名

会員 31 名

山岸伸、宇井眞紀子、山口一彦

会員 18 名

1/5 ~ 1/20

2/9 ~ 2/22

2/21 ~ 3/5

3/1 ~ 3/7

5/17 ~ 5/23

7/12 ~ 7/18

8/21 ~ 10/12

10/3 ~ 10/8

EIZO ガレリア銀座

オリンパスギャラリー大阪

リコーイメージングスクエア新宿 ギャラリー I & II

アイデムフォトギャラリー「シリウス」

アイデムフォトギャラリー「シリウス」

アイデムフォトギャラリー「シリウス」、大阪

札幌市・まるひこアートスペース和

リコーイメージングスクエア新宿ギャラリー II

日本写真家協会（JPS）入会のご案内

■ 申込時期：2019年12月～2020年1月

■ 入会日：2020年4月

- 協会は1950年の創設以来、写真家の職能と地位確立著作権の擁護、啓発活動を行っています。
- わが国の写真表現の歴史を綴った「写真100年展」「現代写真史展」などを通じて、写真表現の変遷を内外に広める活動を行ってきました。最近では「日本こども60年」「おんな」「生きる」と写真の社会性に富んだ写真展、写真集を発行しています。さらに一般公募の「JPS展」と「名取洋之助写真賞」の実施、写真界に特段の功績を上げられている方に「日本写真家協会賞」を贈るなどを行い、「写真美術館の創設活動」、写真原板の保存収集・データベース化をする「日本写真保存センターの設立」運動など様々ななかたちでの文化活動に寄与しています。
- 正会員の入会資格は、職業写真家として3年以上の活動実績のある方。正会員2名の推薦、保証が得られ、うち1名は本会在籍5年以上の正会員の推薦理由書を提出できる方で、入会申込書と資料を添えて1ヶ月に提出。入会が内定後、4月の新入会員説明会に出席することで正会員となります。
- 「入会申込書」は1部1,000円で配布中。

問い合わせ先：協会事務局 03-3265-7451



Topics

The 45th Japan Photographers Society Award

Japan Professional Photographers Society gives Japan Photographers Society Award and honors to individuals or organizations who have contributed or achieved for the discovery, inventions and development of photography culture. This year which is the 45th, the award will be given to Portrait Gallery, a permanent gallery operated by Japan Photo Culture Association that is a organization of commercial photo studios. The reason of the award is that the gallery has been contributing to the Japanese photography community as the place where anyone can present their works freely.

The 15th Yonosuke Natori Photographic Prize

Yonosuke Natori Photographic Prize is the award for the photographers under 35 years old. It is organized by Japan Professional Photographers Society, and it invites public participation. Applicants are supposed to submit a set of 30 photographs.

This time which is the 15th, the award was given to Mr. Takumi Wada (30 years old) living in Chiba Prefecture. The award-winning work is titled "SHIPYARD~Angels with Broken Wings". It's the series of photographs of workers in poor working environment at ship breaking yard in Bangladesh.

Also, Encouragement prize of The 15th Yonosuke Natori Photographic Prize was given to Mr. Fujimoto Ikuiru (34 year-old) living in Kagawa Prefecture. The award-winning work is titled "Ogirinality" It's the photography record of Mr. Fujimoto's aged class-

mate at a photography school. Mr. Fujimoto photographed the classmate who got terminal pancreatic cancer until his death. The winner of The Yonosuke Natori Photographic Prize was selected out of 35 works submitted by 33 applicants this year.

The 3rd Tsuneko Sasamoto Photographic Award

The 3rd Tsuneko Sasamoto Photographic Award in 2019 was given to Mr. Yoshinaga Tomonari (75 years old) living in Nagasaki prefecture. He is a semiprofessional photographer.

The theme of Mr. Yoshinaga's photography work is the history of catholic christians who suffered from persecution and repression for about 260 years in Nagasaki during Tokugawa shogunate period. Mr. Yoshinaga has been taking photographs of the descendants of christians for more than thirty years in 1979 to 2012. The selected work for the award is his photography book which title is "Village of Christians - Prayer in Sotome".

The award ceremonies for these awards will be held on Dec. 11 at Arcadia Ichigaya in Tokyo. Commemorative photo exhibition of The 3rd Tsuneko Sasamoto Photographic Award will be held at Aidem photo gallery "Sirius" (Dec. 19 - 25, Shinjuku, Tokyo). The photo exhibition of The 15th Yonosuke Natori Photographic Prize will be held at Fuji Film Photo Salon Tokyo (Jan. 24-30, 2020, Roppongi, Tokyo).

Text By Kuwabara Shisei (Director), Translation by Ishii Mayumi (International Relations)

About the Japan Professional Photographers Society

The Japan Professional Photographers Society was established in 1950. Through its activities it strives to define the role of the professional photographer and secure copyright protection while working to develop photographic culture. In 2001 it received recognition as an Incorporated Body from the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, in March 2011 it was officially recognized as being a Public Interest Incorporated Association by the Prime Minister's office, and since April 1 of that year it has been active under the title, Japan Professional Photographers Society, Public Interest Incorporated Association.

Since its foundation, the society has succeeded in receiving an extension for the period of copyright protection (to 50 years after the death of the artist), held numerous exhibitions concerning photographic history and expression (A Century of Japanese Photography, History of Japanese Contemporary Photography, Sixty Years of Japanese Children, Women, etc.), and published numerous books on photographic history and collections of photographs. In order to contribute to the promotion and development of photographic culture, it holds the JPS Exhibition as an open exhibition, presents a nationwide Photography Study Pro-

gram for elementary school students, the Photo Forum that aims to develop photographic expression, Digital Photography Lectures for the advisors of high school photographic clubs, and presents the Yonosuke Natori Photographic Award to uncover and foster new talent. At the same time, it carries out a wide range of activities to contribute the development of photographic culture, such as: cultural exchange with overseas photographers, PR through publishing and information dissemination via the Internet.

Furthermore, it presents the Japan Professional Photographers Society Award in recognition of individuals or organizations who have achieved notable achievements in the development of photographic technology, education, or critique.

The Japan Professional Photographers Society has devoted itself to the establishment of photographic museums, such as the Tokyo Metropolitan Museum of Photography, and is currently actively working towards the creation of the 'Japan Photographic Preservation Center' (archive) for the collection and preservation of original photographs.

Japan Professional Photographers Society

JCII Bldg. #303, Ichibancho 25, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082

Tel: +81-3-3265-7451 Fax: +81-3-3265-7460

E-mail: info@jps.gr.jp Web site: <http://jps.gr.jp/int/index-e.html>

第13回JPSフォトフォーラム 「撮るべき、時代。」

日常をスマートフォンで反射的にシャッターを押す現代。誰でも写真を撮り、SNSで瞬時に伝える時代。

だからこそ写真家は、何を、なぜ、どのように撮るのかを思考し、意識してシャッターを押すべきではないでしょうか。強い意志で撮られた写真は時代を記録し、思いを伝え、後世に残るのです。

今年度からのフォトフォーラムでは、「撮るべき、時代。」というテーマを基に、それぞれの写真分野で掘り下げたフォトフォーラムを開催します。

日 時：2019年11月17日（日）

10:40～16:00 講演とパネルディスカッション

タイムテーブル：10:40～12:15 第1部 基調講演 野町和嘉（JPS会長）

13:00～14:00 第2部 パネリストによる写真講評会

14:15～16:00 第3部 パネルディスカッション

「スナップ それぞれの流儀。」

場 所：有楽町朝日ホール

主 催：（公社）日本写真家協会、（株）朝日新聞出版

後 援：文化庁

協 賛：エプソン販売㈱、オリンパス㈱、キヤノンマーケティング

ジャパン㈱、（株）シグマ、（株）タムロン、（株）ニコンイメージング

ジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ㈱

入場料：無料

定 員：600名（先着順、要申込）

申 込：「JPS HP 申込みフォーム」より申込み

www.jps.gr.jp



基調講演・パネリスト 写真左から、野町和嘉、大西みづぐ、HARUKI、熊切大輔（司会・佐々木広人『アサヒカメラ』前編集長）

2019年ラグビーワールドカップ日本大会

パスを受け取って

阿部典子（JPS会員）

2019年9月20日、アジアでは初開催となるラグビーワールドカップが開幕。全国12都市の会場で11月2日まで行われますが、この歴史的な大会に関わろうと数年準備を進め、撮影の機会を得ることができました。

日本開催とあって取材希望は多数。一時は申請が制限され再提出になったものの、2度目の申請でメディアアクセディティーションパスが承認されました。ご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

撮影は私の地元・札幌市の札幌ドームより始めました。2002年サッカーワールドカップの会場となったスタジアムです。オーストラリア対フィジー、イングランド対トンガという組み合わせ。2日間2試合で約7万人近くの方が入場され賑わいました。

今まで関東大学対抗戦、北海道招待試合など数回来ていても、ワールドカップは手荷物検査、パスやマッチチケットの確認など、警備が厳しく緊張感が別物です。何

台もの機材を軽々持ち運ぶ体格の良いフォトグラファーを見て「目前のチャンスを生かすだけ。」という気持ちでピッチへ上りました。

オーストラリア対フィジーでは前半フィジーが大健闘してリード。「予想が外れた。」と思いきや、後半オーストラリアが逆転。勝者の撮影という面目を果たせました。イングランド対トンガでは前後半通じイングランドが優勢。後半何とか1トライと攻撃を重ねるトンガに会場から「トンガ」コールが。点差が開いても全力で走る選手を観客が見守ります。

湧き上がるウェーブは何度もスタンドを周回。ノーサイド後は健闘を讃え、お互いのジャージを交換。トンガのジャージを着たイングランドの選手が一列に並び手を振った瞬間、「これがワールドカップ LIVE。」私は強い感動を受け、しばらくの間立てませんでした。

会報が出る頃、決勝トーナメントが始まりますが、予選プール撮影者から取材を認定されます。再び巡ってくるパスがあるなら、落とさないようキャッチしたいと思います。（下の写真は、9月22日のイングランド対トンガ戦。結果は白ジャージのイングランドが35点、赤ジャージのトンガが3点）



パス



突進



突進



トライ



柿木 正人 正会員

令和元年5月30日、食道ガンのため逝去。
70歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成24年入会)

被災地への思い 繋げる

東日本大震災の被災地を、発生後から撮り続けていた柿木正人さんが亡くなつた。亡くなるちょうど一週間前の5月24日。被災地をともに取材する桑原史成さんが、ふと電話して一緒に会話をしたのが最後となつた。「あまり食べられないのよ。短い会話だったが、その声は弱かつた。ここ数年、がんと闘う日々が続いていた。2016年12月、食道がんの大手術。昨年、各部位に転移が見つかったが、被災地の定点取材は敢行していた。写真記者として長年、通信社に勤務。定年後、旧知の写真記者仲間・花井尊さん（故人）と「高輪写真研究所」を立ち上げた。報道写真では得られない世界観を写真に託す。だが、そこは報道カメラマン。東日本大震災では、発生から3ヶ月後に花井さんと被災地に向かっていた。「今まで見たこともない広大な現場は、私の中の感覚と理性に大きなギャップを作つた」と回想する（JPSニュース500号）。

2012年から毎年、銀座で花井さんと震災写真展を共催した。花井さん亡き後も、「身の上の目線でコツコツと記録して伝える」と考え、写真展を続けた。

柿木さんは一世代違うが大学の先輩。現役時代は他社ながら現場でいろいろ教示を受けた。面倒見がよく、その縁もあり被災地取材は何度も一緒になった。

ふだんはあまり多く語る方ではないが、大の日本酒党で聞き上手だ。燐酒を飲みながら、カメラ談義を楽しむのが好きで、愛煙家でもあった。写真は無類のメカ好き。ねに新しいモノに興味津々で、その昔、ボラロイドカメラが発売されるといち早く購入した、との逸話がある（奥様談）。

被災地への取材は昨年10月下旬が最後となつた。盛岡から福島県いわき市までの2泊3日の旅。体力を心配した奥様の付き添いを「ここは一人で行く」と進つた。こだわりの新機材「ドローン」が登場する。福島県双葉町の海沿いを浪江町境から撮影した写真が、今年3月の写真展で飾られた。「これ！ドローンだよ」。会場でニヤッとした笑顔が印象的で、忘れられない最後の姿となつた。

心からご冥福を祈りつつ、その遺志を繋げる一人として、今後の取材を誓った。合掌

渡辺 幹夫



矢部 志朗 正会員

令和元年7月12日、間質性肺炎のため逝去。73歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成19年入会)

「森の守護神として」

井村 淳

7月12日。北海道の撮影から帰ってきた羽田空港でスマートの電源を入れると、知人からのメッセージで矢部さんの計報を知り、その場に立ち尽してしまいました。僕にとって矢部さんは、北海道の生き物の写真の撮り方を教えてくださった第二の師匠的な存在でした。

27年くらい前、僕がアシスタントをしていたときに師匠・竹内敏信が取材で北海道へ行くと地元の方々が案内をしてくださり、その中に矢部さんはいらっしゃいました。その頃の矢部さんは、農水省にお勤めでしたが、早く退職して写真一本でやっていきたいと話されていたのを覚えています。初めてお会いしてから間もなくすると、10年間撮り続けていた作品で構成された『エグリス オフトケの森の物語—矢部志朗写真集』が講談社（1994/11）より発刊されました。矢部さんの地元である北海道の音更町にある音更神社の境内の森に生息する生き物をその後も追い続け、また、その森の自然を管理し守るという役割もされてきました。

矢部さんは、動物写真家として音更町のみならず北海道全域の自然を撮影していました。矢部門下生と言える方々やご友人が全道にいらして、動物写真では喉から手が出る程に欲しい被写体の情報が矢部さんの元へ集まっていました。野生動物の情報は、生息場所が荒れてしまうことなどから他の人々に知らせたくないのですが、これも矢部さんの人望の厚さを物語っているよう脱帽です。

その後も、北海道の動物たちの著書を発行されていて、『小さな森の物語一十勝・樽守の杜の動物たち』や『北の国のシマリス』などがあります。そして、最近では動物だけではなく熱気球に乗り上空より広帯の風景を撮影されていて、そろそろまとめようかな、という話を聞いていました。それが写真集などで拝見できることを切に願います。そして、矢部さんのご冥福をお祈りしつつ、雲の上から、いつまでも森を見守っていてくださること思います。



太田 宏昭 正会員

令和元年7月15日、間質性肺炎のため逝去。64歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成6年入会)

太田宏昭さんを偲ぶ

総務委員会

1955年、愛媛県宇和島市生まれ。1980年大阪芸術大学写真学科卒業後、写真家・村上ひろし氏に師事。2年後東京へと移り、多くの写真家の助手を経て、1984年フリー、フォトスタジオプロントを設立する。

1977年、写真展「光と水」開催（銀座他5都市のキヤノンサロン）。

2001年、能写真展「ある披き回道成寺」開催（リトニアの首都ビリニュス）。

2010年、「ばんえい競馬写真展 光と砂」開催（銀座、札幌、大阪のキヤノンギャラリー）。

2012年、「第10回ホースフォトグラフ展」（JRA 競馬博物館）に参加。

2015年、「ばんばの肖像」展開催（ふげん社ギャラリー）。

2017年、「ばんえい競馬 砂の軌跡」展を4か月間開催（フランス・ブルシュ地方のエコミュゼ・ド・ブルシュ）。

2018年、「ばんえい競馬 砂の軌跡」発行（小学館）。

入会25年目の2019年7月15日、間質性肺炎にてお亡くなりになりました。

ご冥福をお祈りいたします。



鍔山 英次 正会員

令和元年8月14日、肺炎のため逝去。88歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(平成18年入会)

自然環境を探求した写真家 鍔山英次氏の死を悔やむ

田沼 武能

「写真は文明の中で最も新しい表現体であり、人間の思想や感情をダイレクトに伝達できる映像文化の一つである。写真の成否を決めるのは、広範でより深い知識と洞察力、そして磨かれた感性によるものと思う。私は、そういう写真の道を選んだ事を誇りにしている。」この一文は鍔山氏が2004年『津軽の声が聞こえる』（ウインズ出版刊）のライ患者で詩人の桜井哲夫さんと共に撮った津軽の写真と詩の写真集を出版した時の辞である。

鍔山氏は早稲田大学在学中から当協会二代目会長の渡辺義雄氏の写真クラブに入り写真を学んだ。根っからの写真好きな写真家である。卒業後は東京新聞に入社、写真部に所属する。1984年カルガモ親子が東京・三井物産人口池で育った子ガモ10羽を連れ早朝に宮城前の大通りを渡り大手濠に引越しをする光景を捉え新聞に発表し、メディア界にカルガモ旋風を巻きおこした。東京・武蔵野を流れる野川が汚れ、水枯れになつたことを嘆き、地元の文化人とともに「野川を美化する会」を結成し、地元の協力のもとに美しい野川に再生してゆく、その情報を新聞紙面に発表し、「生きている野川」を創刊社より出版している。地球の汚染問題を積極的に記事にし改善に尽力した写真家だった。探究心が強く、写真を撮る前には必ず調べてから取材にかかるのも鍔山氏のすばらしい作品を作り出す原動力になっている。私自身も川の流れと神々の関連について教えを受けたこともある。

哲学者梅原猛氏にも気に入られ18年に亘り写真を担当した、氏の戯曲『ヤマトタケル』や『オグリ』など市川猿之助の新しい歌舞伎に挑戦する猿之助を捉えており、日本舞台写真家協会の会長も務めている。東京写真記者協会部門賞（カルガモ報道）、渡良瀬川環境報道で日本新聞協会賞、小金井市環境賞、平成27年日本写真協会賞功労賞などを受賞している。親友の訃報を書かねばならぬとは無念でならない。合掌



野村 英男 正会員

令和元年8月16日、老衰のため逝去。
88歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(昭和33年入会)

ゆうゆうの人、野村英男さん

奥村 正光

野村英男さんは日本大学芸術学部写真学科の私の一年後輩、兄上は2、3年先輩。父上は「松竹」の著名な映画カメラマン。映像ご一家という歴史的な環境であったと伺っております。

学生時代はジーンズのマンボズボンで葉山の街なかを闊歩され「葉山男爵」の異名をとり、多くの人々から親しく愛されました。

当時(1954年)、私は学校図書係に勤務しておりましたが、野村さんも一年後に人社され、職場の同僚となりました。とりわけ、二人にとって最も思い出深いのはカラーフィルムの自家現像に挑み、様々な試み、実験を繰り返し、新たな体験・経験を積んだことでした。

その後、フリーとなって、野村さんは神谷町にコマーシャルフォトスタジオ兼住居を構えられ、多くの企業の広告写真を担当されました。野村さんの写真スタイルは、特に広告作品では大型カメラ(4×5, 5×7, 8×10)を駆使するのが特徴で、その成果を「B全」のポスターなどにしてスタジオに展示されてきたのが懐かしく思い出します。

特筆すべきは、**<太陽>**に大型カメラを向けたことで、レンズを自ら改良し、長年にわたり作品を撮り続け、ライフワークとされたことあります。

富士フォトサロンの個展で発表された数々の**<太陽>**は大いなる反響を呼び、高い評価を得られました。

また、野村さんは人望あつく、APAの監事を長年務められ、JPS、APAに於いて功労会員の表彰を受けるなど、写真家としてゆうゆうと幸せな生涯をまとうされました。

ここに慎んで、野村英男様のご冥福をお祈りいたします。

編集後記

◎写真家の世界は、私のデビューした時代に比べ、いまや氷河期と言えるでしょう。それはスマホの登場で、写真は何處でも、何時でも、誰でも失敗なく写る時代になってしまったからです。しかしプロの撮った写真は内容が違うと思います。現在は勿論のこと、後世に伝えなければならない写真を撮っているのです。そういう信念を持って撮影を続けていた私たちの仲間を紹介し普及したいと思い、チャレンジの貢を充実しました。今回はフィリピンの子ども達を支援するべく「ひとりだけのNGO」を立ち上げ、仕事をする木下健さんです。ぜひお読みください。

◎10月1日、予定通り消費税が10%となった。ギリギリまで、また延期になるのでは?といった憶測が流れ、本号の企画段階でも議論となつたが、今回の改正には様々な制度や予定が含まれていることを知った。今号フォーカスの記事が皆様のお役に立つことを願う。(田沼)

◎夏休みを温泉で取った夜は地元の音楽祭の日でした。とはいへ会場は観音様の境内、入場無料。出演者にはプロもいれば、この前楽器を演奏したの何時?と聞きたくなるバンドもいて、何が出て来るか解らないのが楽しかった。良いものです。アートって。(池口)

◎自動車免許の更新を都庁で行った。帰りは新宿駅まで歩きヨドバシカメラを覗いた。以前ほど機材に関心がなくなっている自分に気づいた。ミラーレスカメラの急激な普及についてゆけないのか、ついてゆく必要を感じていないのか。機材終活の時は近い?(飯塚)

◎日本建築写真協会写真集「銀座ジャック再び!」が出版されました。「再び」とは2005年に銀座通りパノラマを撮影し、品川キヤノンサロンで写真展を開催して以来の「再び」です。建て替わりもあり街並みは一新されました。来年の写真展に向けて只今準備中です。(小野)

◎消費税増税前の駆け込み発表の様に新機種が発表された。昨年は、事故や病気になり1年半の間とともに働く事も辛い時期もあり、今年は、新しいカメラを買う事をやめてその分作品を作ろうと決めた。カメラは買ったが写真撮れないでは本末転倒。やっぱり写真を撮らなきゃ意味がない。(川上)

◎8月、9月と展示枚数は少ないながらもそれぞれ違うテーマの写真展を開催しました。告知が十分でなかったにもかかわらず多くの方、久しくお目にかかるなかつた方にご来場いただき、きちんとカタチにすることの大切さを再認識しました。この後12月、1月にも開催予定です。(小城)

経過報告(2019年4月~2019年6月)

- ◎4月17日 出版広報座談会
PM2:00 ~ 4:30 JCII会議室 7名
- ◎4月22日 第43回公益社団法人日本写真家協会理事会
PM2:00 ~ 4:00 JCII会議室 18名、欠席2名、監事3名
 - 第1号議案: 平成30年度事業報告書案承認の件 第2号議案: 平成30年度決算報告書案承認の件 第3号議案: 理事任期満了に伴う改選の件 第4号議案: 名誉会員推举の件 第5号議案: 第45回「日本写真家協会賞」承認の件 第6号議案: 平成30年度会費滞納による正会員資格の喪失の件、第7号議案: 2019(平成31)年度第20回定期会員総会内決定の件、他
- ◎5月10日 日本写真保存センター 2019年度第1回諮問委員会議
PM1:30 ~ 3:00 日本写真保存センター御徒町作業分室 18名
- ◎5月10日 日本写真保存センター 2019年度第1回支援組織会議
PM3:30 ~ 4:30 日本写真保存センター御徒町作業分室 支援組織会員8社9名、JPS6名
- ◎5月14日 第1回技術研究会
PM2:00 ~ 4:30 JCII会議室 参加者 60名
 - フォトショップ、ライトルーム、ブリッジ Adobe 担当者に聞く新機能とQ & A -
- ◎5月18日 ~ 6月2日 第44回2019JPS展(東京)
東京都写真美術館B1F 入場者 3,575名
 - 5月18日 表彰式、祝賀会、講演会「気鋭の写真家による第44回2019年JPS入賞作品講評」「イベント「写真家と一緒にJPS展をみにいこう!」「ギャラリートーク」
- ◎5月24日 2019(平成31)年度第20回定期会員総会
PM1:30 ~ 3:00 東京都写真美術館1階ホール 本人出席者116名、代理委任2名、議決権行使書910名、計1,028名、会員外理事4名、監事3名、名誉会員3名、賛助会員8社12名
 - 決議事項: 第1号議案: 平成30年度事業報告及び決算承認の件、第2号議案: 「公益社団法人日本写真家協会定款」一部変更の件、第3号議案: 「役員の報酬並びに費用に関する規程」一部変更の件、第4号議案: 理事任期満了に伴う改選の件、第5号議案: 名誉会員推举承認の件
- 報告事項: 1、「平成31(令和元)年度事業計画書」の件、2、「平成31(令和元)年度予算書」の件、3、「第45回「日本写真家協会賞」の件、4、会費滞納による正会員資格の喪失の件、5、その他
- ◎5月24日 第44回公益社団法人日本写真家協会理事会
PM3:10 ~ 3:45 東京都写真美術館1階「スタジオ」 19名、欠席1名、監事3名
 - 令和元年度代表理事及び業務執行理事の選定の件、他
- ◎6月6日 「笹本恒子写真賞」選考会
PM1:30 ~ 3:30 JCII会議室 6名
 - 選考・椎名誠、大石芳野、野町和嘉、推薦候補者・14名、第3回「笹本恒子写真賞」・吉永友愛

◎10月1日の国慶節の日に香港にいた。100以上続いているアモの大きな祭目の日だ。普段通りに見えた街は、夕方から一変。遠い国「紛争」が目の前の出来事になった。翌日、テレビや新聞は中国の建国70周年パレードと、警察とデモ隊の衝突の様子を伝え、市場や屋台街は何事もなかったように普段通りの日常を取り戻していた。終結にはまだ時間がかかりそうだ。(柴田)

◎この夏思ったのは、来年のオリソニック、撮影をするフォトグラファー諸氏は大変だろうと思った。地球温暖化で、暑くなったり夏のオリソニック。フォトグラファーも健康管理には特に注意して良い写真を写して欲しい。カメラがどんなに進化しても、フォトグラフアーハイアがいいなければ写真は写せない!(伏見)

◎ミラーレスカメラ入門編を担当しました。登場から10年以上経つて、ようやく多くのプロカメラマンの要望を満たせるレベルに成熟してきたのでしょうか。私自身、当初は一眼レフと併用していましたが、この34年はミラーレスのみで仕事をこなしています。この記事が少しでもお役に立てれば幸いです。(桃井)

◎ネパールには「先生の日」という祝日がある。学校は休みだが、子どもたちは手紙を書き、朝の市場で花束を買い、登校して先生に渡して日ごろの感謝を表す。先生は父や母とともに尊敬の対象だ。かたや日本では公立学校の先生の志望者数が減少し続いているという。いつの時代も先生は憧れと尊敬の対象であつて欲しい。(山縣)

日本写真家協会会報 第172号(年3回発行) 2019年10月20日 印刷・発行 ◎編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

頒布 1ヵ年・3回 3,500円(消費税・送料共込)

出版広報委員 田沼能武(理事)、小池良幸(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、小野吉彦、川上卓也、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地JCIIビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋MKビル 電話 03(3265)0611(代表)

Canon

make it possible with canon

STABILIZER
ON OFF

写真は進化する。

写真の理想とは何か。私たちキヤノンは、答えを持っていません。写真を撮る人、それぞれの理想が違うからです。一つ一つの理想を叶えるために、どんなシステムが必要なのか、その一心で開発を続けてきました。30年を超えるEOSシステムの歴史もまた、挑戦の連続でした。映像表現の可能性を切り拓くのはEOSでなければいけない。そのプライドと強い意志が、私たちの原動力でした。EOSの挑戦は終わっていません。その証明が新マウントを採用したEOS Rシステムです。キヤノンの光学技術を最大限に発揮させることができる、EOSの新しい選択肢。それは、表現領域を限りなく拡張させ、想像の限界を突破する力。理想を叶える力。みなぎる力を手に入れた時、あなたの写真は、進化する。



EOS R SYSTEM



EOS
EF
90 140
million million
EOS EF



J-PASS
PARTNER



◎キヤノン EOS R ホームページ
canon.jp/eos-r



◎キヤノンお客様相談センター
デジタルカメラ・
交換レンズ
050-555-90002

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

東京2020
オリンピック
パラリンピック
公式カメラ

[受付時間] 平日・土 9:00～17:00 (日、祝日、12/31～1/3は休ませていただきます) ※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。
※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。※受付日の詳細は受付日カレンダーでご確認ください。 <https://cweb.canon.jp/e-support/information/tel-calendar-cc.html>



SP35mm F/1.4 Di USD

for DSLR (デジタル一眼レフカメラ用)



込めたのは美しさへの信念。

息を呑むキレ味と、やわらかなボケ味。

画質へのこだわりがここに結実。

意志を撮る。覚悟を写す。

SP 35mm F/1.4 Di USD (Model F045)

キヤノン用、ニコン用 Di:35mm判フルサイズおよびAPS-Cサイズ相当デジタル一眼レフカメラ用レンズ



TAMRON

www.tamron.co.jp



Zでなければ、会えなかつた自分がいる。



ニコン史上最高画質
フルサイズミラーレス

Z7 Z6 オールラウンド
フルサイズミラーレス

狙った瞳を逃さない。高精度な「瞳AF」^{*1}新搭載。

- [Z 7] ■ 有効画素数 4575万画素 ■ 常用感度 ISO 64-25600 ■ 高速連続撮影 最高約 9コマ / 秒^{*2} ■ 493点像面位相差 AF
[Z 6] ■ 有効画素数 2450万画素 ■ 常用感度 ISO 100-51200 ■ 高速連続撮影 最高約 12コマ / 秒^{*2} ■ 273点像面位相差 AF
[Z 7・Z 6 共通] ■ 画像処理エンジン EXPEED 6 ■ 有機 EL パネル採用電子ビューファインダー ■ タッチパネル採用チルト式 3.2型画像モニター
■ ボディー内手ブレ補正(計5軸、約5.0段分) ■ 4K UHD動画 ■ Wi-Fi・Bluetooth内蔵 ■ 記録媒体XQDカード(別売り)

*1 静止画撮影、オートエリヤ AF (AF-S, AF-C) 時 *2 拡張時 ●NIKKOR Z 58mm f/0.95 S Noctは開発発表製品です。

CAPTURE TOMORROW

0570-02-8000

一般電話からは市内通話料金でお利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、夏期休業等を除く毎日) ●ナビダイヤルがご利用いただけない場合は、(03)6702-0577におかけください。●ファクシミリでのご相談は、(03)5977-7499へご送信ください。

www.nikon-image.com | 株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

1.1億本
NIKKOR

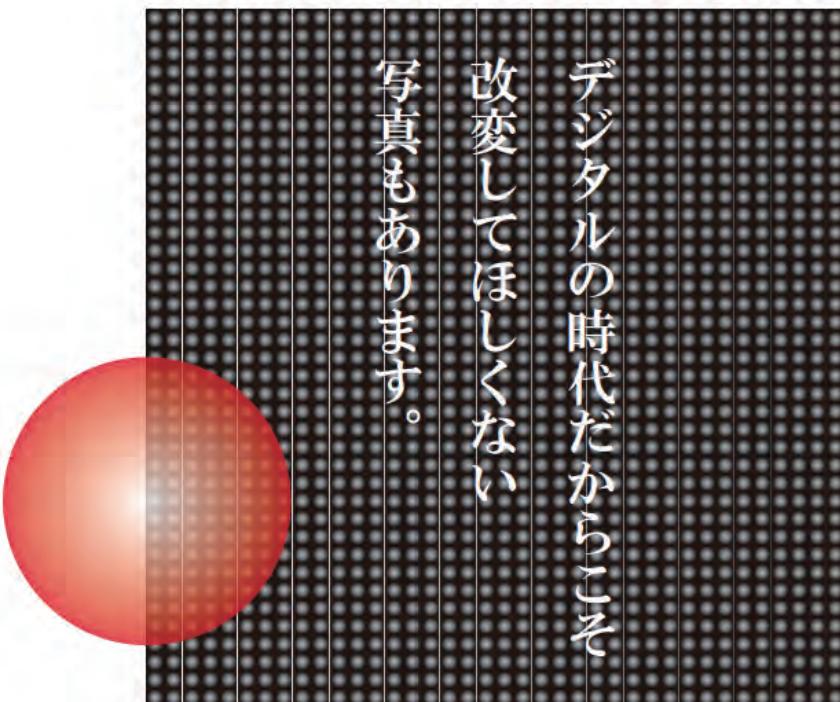
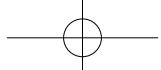


1/400, F5.0, ISO 100, EV -1.0, WB: 次曜光, IC: ハードモード---

RICOH
imagine. change.

株式会社リコー／リコーアイメージング株式会社 www.ricoh-imaging.co.jp

GR



著作権は、たくさんの権利が集まった法律です。

勝手に作り変えられない権利。

そんな権利が著作権にあるのをご存知ですか？

これを「同一性保持権」と言います。

勝手にトリミングされたり、勝手に合成されたりしないように、
この権利は守ってくれます。

著作者の創作意欲を守るための権利、

著作者人格権のひとつです。

写真著作権を大切に



一般社団法人 日本写真著作権協会 <https://jPCA.gr.jp> 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

[正会員団体] 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会

一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟／一般社団法人日本スポーツプレス協会／一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。

SIGMA

常用単焦点レンズにふさわしい性能と
サイズのベストバランスを追求。
Contemporaryラインの
フルサイズミラーレス専用レンズ、登場。

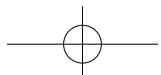
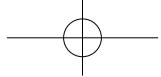
C Contemporary **45mm F2.8 DG DN**

希望小売価格(税別):75,000円 フード(LH577-01)付
対応マウント:Lマウント用、ソニー Eマウント用



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

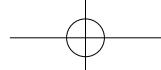
sigma-global.com



講談師 田辺銀治—— ヤナガワゴーッ！

FUJIFILM X-Pro2 XF56mm F1.2R APD

FUJIFILM

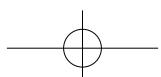
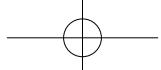


X-Gallery



霧の盆地より／染まる霧島——大浦タケシ
FUJIFILM X-T3 XF18-135mm F3.5-5.6R LM OIS WR

FUJIFILM



URBAN ————— 土屋敏朗

FUJIFILM X-H1 XF23mm F1.4 R

FUJIFILM

最高の一瞬を、最高の一枚に。



フォトグラファー | 辰野 清 KIYOSHI TATSUNO

GFX100+GF100-200mmF5.6 R LM OIS WR

対角線長55mmの
ラージフォーマットセンサー搭載。
世界最高レベルの1億2百万画素という
超高解像度と、富士フィルムが誇る
色再現技術で圧倒的な写真画質を実現する
フラッグシップモデル、GFX100。
桁違いの鮮明さを、その手に。

DIGITAL CAMERA
GFX 100

高速・高精度AF性能、ボディ内手ブレ補正、
4K動画撮影も可能な
革新的ミラーレスデジタルカメラ。





Photo Akutagawa Jin